

Oracle® Server X5-8 設置ガイド



Part No: E65037-01
2015 年 7 月

Part No: E65037-01

Copyright © 2015, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>) か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

目次

このドキュメントの使用方法	9
設置手順の概要	11
サーバーの機能とコンポーネント	13
フロントパネルの機能	13
前面のインジケータモジュール	14
電源装置のコントロールとインジケータ	15
ファンモジュールのコントロールとインジケータ	16
バックパネルの機能	17
バックパネルのステータスインジケータとボタン	19
ストレージのコントロールとインジケータ	20
サーバーでサポートされているコンポーネント	20
サーバーの設置の準備	23
サーバーの仕様	23
物理仕様	23
電気仕様	24
環境要件	24
通気のガイドライン	25
出荷梱包インベントリ	26
必要な工具および装置	26
ESD 防止対策	27
オプションのコンポーネントの取り付け	27
ラックの設置手順	29
安全上の注意事項	29
ラックの互換性	30
▼ サーバーの開梱と内容のインベントリの作成	31

▼ シェルフレールと背面固定部品の取り付け	34
▼ 出荷用留め具の取り付け (オプション)	39
▼ サーバーをラックに取り付ける	41
サーバーの配線	43
バックパネルのコネクタとポート	43
▼ サーバーのケーブル接続	44
サーバーの管理	47
複数サーバー管理ツール	47
単一サーバー管理ツール	47
Oracle System Assistant	48
Oracle ILOM	48
Oracle Hardware Management Pack	49
UEFI BIOS	50
Oracle ILOM への接続	51
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース	52
Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値	52
▼ ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする	53
▼ リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする	54
▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 ネットワーク設定の変更	56
▼ Oracle ILOM CLI からの IPv6 ネットワーク設定の変更	58
▼ Oracle ILOM Web インタフェースからのネットワーク設定の変更	60
▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	62
▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト	63
▼ Oracle ILOM の終了	64
サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング	64
▼ Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット	64
▼ SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット	65
▼ root アカウントのパスワードの回復	65
Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定	67
Oracle System Assistant の起動	67
▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した Oracle System Assistant の起動	68

▼ Oracle System Assistant のローカルでの起動	70
▼ Oracle System Assistant のネットワークの構成	71
OS インストールのためのサーバーの準備	72
▼ OS インストールのためのサーバーの準備	73
OS インストールのためのストレージドライブの構成	75
ストレージドライブ構成	75
▼ Oracle System Assistant を使用した RAID の構成	77
BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成	84
▼ UEFI ブートモードでの RAID の構成	84
▼ レガシーブートモードでの RAID の構成	94
オペレーティングシステムおよびドライバの設定	97
インストール済みの Oracle Solaris OS の構成	99
Oracle Solaris 構成の準備	99
Oracle Solaris OS 構成ワークシート	99
▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構 成	102
Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール	103
Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント	104
インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成	105
インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件	105
Oracle VM 構成ワークシート	106
▼ インストール済みの Oracle VM Server の構成	106
Oracle VM のドキュメント	110
インストール済みの Oracle Linux OS の構成	111
Oracle Linux 構成ワークシート	111
▼ インストール済みの Oracle Linux OS の構成	112
▼ Oracle Linux OS を登録および更新する	114
サーバーファームウェアとソフトウェアの入手	117
ファームウェアとソフトウェアの更新	117
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション	118
入手可能なソフトウェアリリースパッケージ	118
ファームウェアとソフトウェアへのアクセス	119

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード	120
物理メディアをリクエストする	121
物理メディアのリクエストのための情報の収集	121
▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)	122
▼ 物理メディアのリクエスト (電話)	123
更新のインストール	123
ファームウェアのインストール	124
ハードウェアドライバと OS ツールのインストール	124
 システム電源の制御	127
サーバーの電源投入と電源切断	127
▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を切断する	128
▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を投入する	128
▼ Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する	129
 設置の問題のトラブルシューティング	131
トラブルシューティングおよび診断の参考	131
技術サポート情報ワークシート	131
サーバーのシリアル番号の確認	132
 サイト計画のチェックリスト	133
搬入経路およびデータセンターのチェックリスト	133
データセンター環境のチェックリスト	134
施設の電源のチェックリスト	135
ラックマウントのチェックリスト	136
安全性のチェックリスト	137
自動サービス・リクエストのチェックリスト	138
納入のチェックリスト	138
 索引	141

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、Oracle Server X5-8 用の最新のファームウェア、ソフトウェア、およびドキュメントを入手する方法について説明します。また、フィードバック用のリンクおよびドキュメントの変更履歴も提供されています。

- [9 ページの「Oracle Server X5-8 モデルの命名規則」](#)
- [9 ページの「最新のファームウェアとソフトウェアの入手」](#)
- [10 ページの「ドキュメントとフィードバック」](#)
- [10 ページの「寄稿者」](#)
- [10 ページの「変更履歴」](#)

このドキュメントセット内の情報は (オンラインヘルプと同様の) トピックに基づいた形式で提供されているため、章、付録、セクション番号などは含まれていません。

Oracle Server X5-8 モデルの命名規則

Oracle Server X5-8 の名前は、次のものを識別します。

- X は、x86 製品を識別します。
- 最初の数字 5 は、サーバーの世代を識別します。
- 2 番目の数字 8 は、プロセッサの最大数を識別します。

最新のファームウェアとソフトウェアの入手

各 Oracle x86 サーバー用のファームウェア、ドライバ、その他のハードウェア関連のソフトウェアは定期的に更新されます。

最新バージョンは、次の 3 つの方法のいずれかで入手できます。

- Oracle System Assistant: これは、工場出荷時にインストールされる Oracle x86 サーバー用のオプションです。これは必要なすべてのツールとドライバを含んでおり、ほとんどのサーバーに取り付けられている USB ドライブ上に存在します。

- My Oracle Support (<https://support.oracle.com>) から更新をダウンロードできます。
- 物理メディアのリクエスト: My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。サポート Web サイト上の「問合せ」リンクを使用してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://docs.oracle.com
Oracle Server X5-8	http://www.oracle.com/goto/X5-8/docs-videos
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。Oracle ILOM のドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack。『プロダクトノート』に一覧表示されている、サポートされているバージョンの Oracle HMP のドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ohmp/docs

このドキュメントについてのフィードバックを <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> にお寄せください。

寄稿者

主著者: Michael Bechler、Cynthia Chin-Lee、Mark McGothigan。

寄稿者: William Schweickert、Anthony Villamor、Mick Tabor、Richard Masoner、Ray Angelo、Tamra Smith-Wasel、Denise Silverman。

変更履歴

このドキュメントセットのリリース履歴を次に示します。

- 2015 年 7 月。初版。
- 2015 年 7 月。若干の技術的な修正。

設置手順の概要

次の表は、サーバーを正しく設置するために実行する必要があるタスクについて要約したものです。

手順	説明	リンク
1	『Oracle Server X5-8 プロダクトノート』で、このサーバーに関する最新情報を確認します。	『Oracle Server X5-8 Product Notes』
2	サーバーの設置準備をします。	23 ページの「サーバーの設置の準備」
3	サーバーの機能を確認します。	13 ページの「サーバーの機能とコンポーネント」
4	別途出荷されたオプションのコンポーネントを取り付けます。	『Oracle Server X5-8 Service Manual』
5	サーバーをラックに設置します。	29 ページの「ラックの設置手順」
6	データケーブルと電源コードをサーバーに接続します。	43 ページの「サーバーの配線」
7	Oracle System Assistant を使用してシステムのソフトウェアとファームウェアを設定します。	67 ページの「Oracle System Assistant の起動」
8	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続します。	51 ページの「Oracle ILOM への接続」
9	サーバーのドライブを準備し、RAID を構成します。	75 ページの「OS インストールのためのストレージドライブの構成」
10	該当する場合は、インストール済みのオペレーティングシステムを構成します。	■ 99 ページの「インストール済みの Oracle Solaris OS の構成」 ■ 111 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」 ■ 105 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成」
11	該当する場合は、次のいずれかのオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアをインストールします。	『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Linux Operating System』 『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Oracle Solaris Operating System』 『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Oracle VM』

手順	説明	リンク
		『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Microsoft Windows』
12	システム電源を制御する手順を確認します。	127 ページの「システム電源の制御」
13	インストールの問題をトラブルシューティングします。	131 ページの「設置の問題のトラブルシューティング」

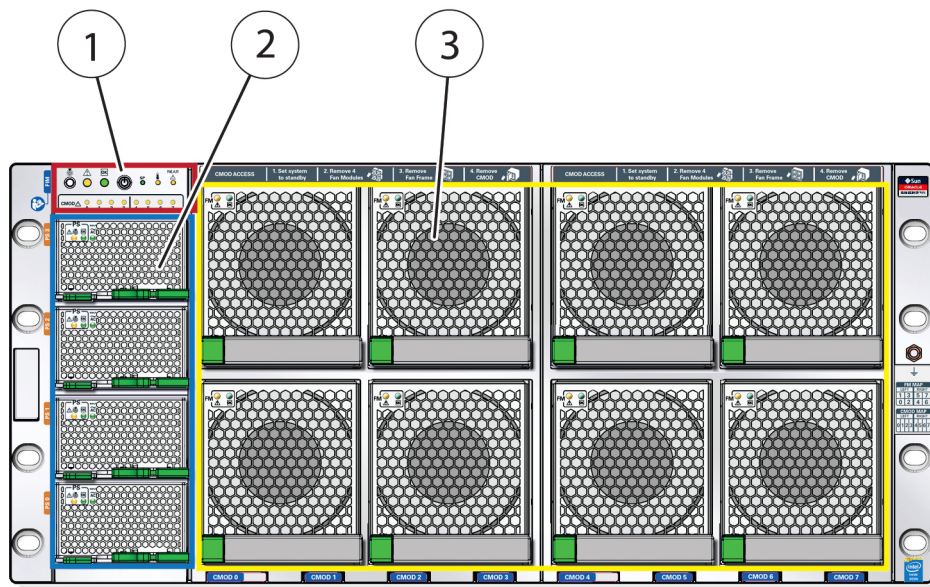
サーバーの機能とコンポーネント

このセクションでは、Oracle Server X5-8 ハードウェアについて説明します。説明項目は次のとおりです。

説明	リンク
サーバーのフロントパネルおよびバックパネルにあるステータスインジケータ、コネクタ、およびストレージドライブの場所を確認します。	■ 13 ページの「フロントパネルの機能」 ■ 17 ページの「バックパネルの機能」
サーバーの機能とコンポーネントを確認します。	20 ページの「サーバーでサポートされているコンポーネント」
サーバー管理ソフトウェアを確認します。	47 ページの「サーバーの管理」

フロントパネルの機能

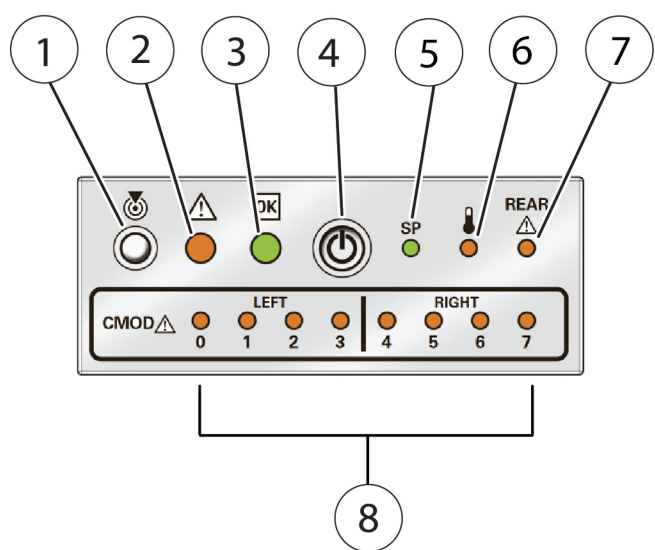
次の図は、Oracle Server X5-8 のフロントパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し	説明
1	前面のインジケータモジュール
2	電源 0 (下) - 3 (上)
3	ファンモジュール (FM 0 - FM 7) ■ 上の列: 1、3、5、7 ■ 下の列: 0、2、4、6

前面のインジケータモジュール

次の図は前面のインジケータモジュールのコントロールとインジケータを示しています。

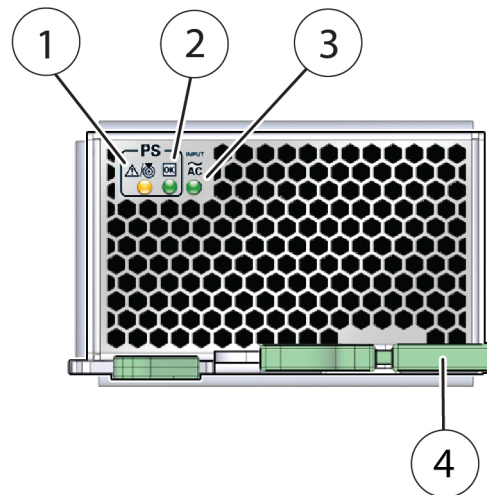


吹き出し	説明
1	シャーシのロケータボタンおよびインジケータ
2	シャーシの保守要求インジケータ
3	システム OK インジケータ
4	埋め込み式の電源ボタン
5	サービスプロセッサ (SP) の OK インジケータ
6	シャーシ温度の保守要求インジケータ
7	シャーシ背面の保守要求インジケータ
8	CMOD 保守要求インジケータ 0 - 7 (左から右) 注記 - サーバーには、4 つまたは 8 つの CMOD (計算モジュール) が含まれています。これらはファンの背後にあり、左から右に CMOD 0 から CMOD 7 として指定されます。各 CMOD には、対応する保守要求インジケータがあります。

注記 - システム電源および関連するコントロールとインジケータの詳細は、[127 ページの「システム電源の制御」](#)を参照してください。

電源装置のコントロールとインジケータ

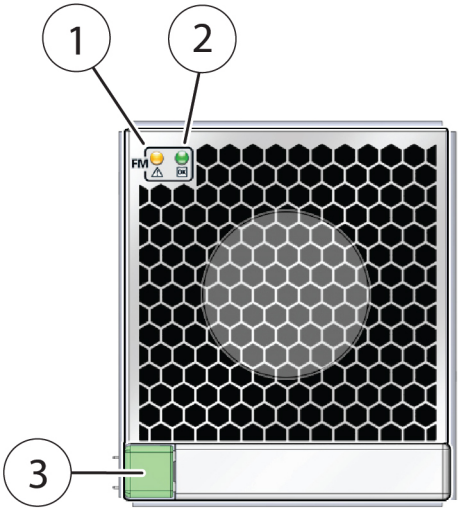
次の図は、電源装置のコントロールとインジケータを示しています。



吹き出し	説明
1	保守要求/ロケータインジケータ
2	OK インジケータ (ホストへの電源は OK)
3	AC OK インジケータ (AC 入力電源は OK)
4	リリースラッチ

ファンモジュールのコントロールとインジケータ

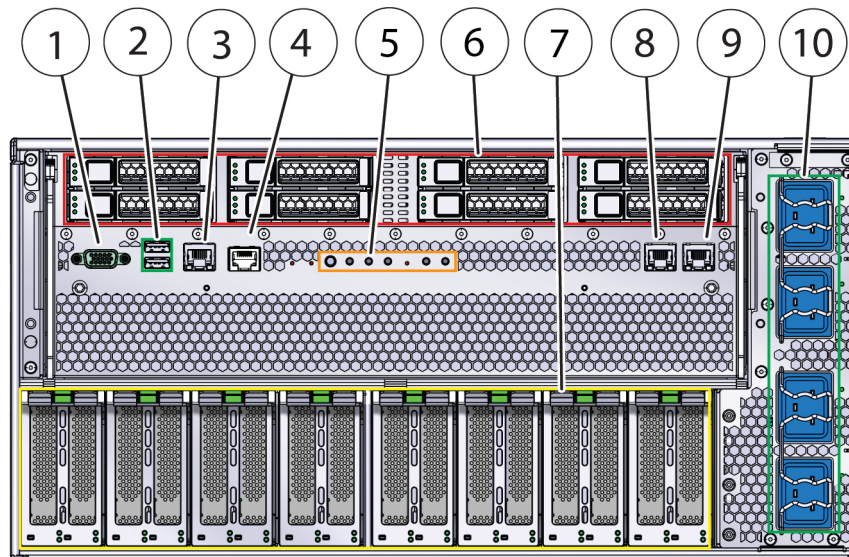
次の図は、ファンモジュールのコントロールとインジケータを示しています。



吹き出し	説明
1	保守要求インジケータ
2	OK インジケータ
3	リリースラッチ

バックパネルの機能

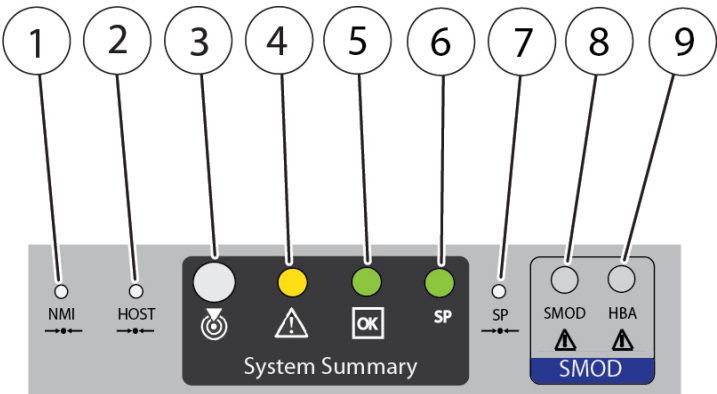
次の図は、Oracle Server X5-8 のバックパネルを示し、そのコンポーネントについて説明しています。



吹き出し	説明
1	DB-15 ビデオポート
2	USB 2.0 ポート (2)
3	ネット管理ポート
4	シリアル管理ポート
5	ステータスインジケータ
6	HDD/SSD スロット 0 - 7 ■ 上の列: 7、5、3、1 ■ 下の列: 6、4、2、0
7	PCIe カードスロット 1 - 16: ■ PCIe 1 が右です ■ PCIe 16 が左です PCIe カードはデュアル PCIe カードキャリア (DPCC) に取り付けられます。各 DPCC に 2 つの PCIe スロットが収容されます。
8	Net 0 ポート
9	Net 1 ポート
10	ケーブルクリップ付き AC 入力 (0 - 3) ■ AC 入力 3 がいちばん上です ■ AC 入力 0 がいちばん下です

バックパネルのステータスインジケータとボタン

次の図は、バックパネルのインジケータとボタンを示しています。

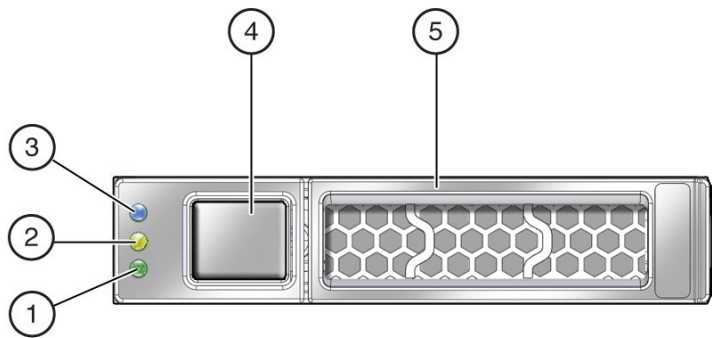


吹き出し	説明
1	マスク不可割り込み (NMI) ボタン – Oracle 保守担当者によって使用されます。
2	リセットボタン – Oracle 保守担当者によって使用されます。
3	ロケータインジケータ – サーバーを識別するために使用されます。詳細は、 http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs にある Oracle ILOM ドキュメントライブラリを参照してください。
4	シャーシの保守要求インジケータ – 詳細は、『Oracle Server X5-8 Service Manual』を参照してください。
5	システム OK – 詳細は、127 ページの「システム電源の制御」を参照してください。
6	SP OK – SP の動作中は常時点灯、SP のブート中は点滅、SP に電源が投入されていない場合はオフ。
7	SP リセットボタン。
8	SMOD 保守要求インジケータ – システムモジュール (SMOD) の障害を示します
9	HBA 保守要求インジケータ – ホストバスアダプタ (HBA) の障害を示します

注記 - システム電源および関連するコントロールとインジケータの詳細は、127 ページの「システム電源の制御」を参照してください。

ストレージのコントロールとインジケータ

次の図は、ストレージのコントロールとインジケータを示しています。



吹き出し	説明
1	OK インジケータ
2	保守要求インジケータ
3	取り外し可能インジケータ
4	ストレージドライブのリリースボタン
5	ストレージドライブのレバー

サーバーでサポートされているコンポーネント

次の表は、Oracle Server X5-8 でサポートされているコンポーネントを一覧表示して説明しています

コンポーネント	説明
CPU モジュール (CMOD)	それぞれに Intel Xeon® E7-8895 v3 18 コア 2.6 GHz プロセッサを 1 基搭載した 4 つまたは 8 つの CPU モジュール。 サポートされている構成: ■ スロット 0 - 3 に取り付けられた 4 つの CPU モジュール ■ スロット 0 - 7 に取り付けられた 8 つの CPU モジュール CPU の仕様に関する最新情報については、Oracle x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Oracle Server X5-8 のページを参照してください。

コンポーネント	説明
メモリー	http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html 最大 192 枚の DIMM、CPU モジュールあたり 24 枚 16GB DDR3 ECC Registered DIMM または 32GB DDR3 Registered ECC LRDIMM 6T バイトの最大メモリー容量
ストレージデバイス	8 台の 2.5 インチ SAS-3 ハードディスクドライブ (HDD) (背面アクセス可能、ホットスワップ可能) または 8 台の 2.5 インチ eMLC SATA-3 ソリッドステートドライブ (SSD)、最大 9.6T バイトの内蔵ストレージ
USB 2.0 ポート	4 つの USB ポート (外部 x 2、内部 x 2)
VGA ポート	1 つの VGA 1280 x1024 8M バイト @ 60 Hz グラフィックコントローラポート
PCI Express 3.0 I/O スロット	それぞれに 2 つの PCIe 3.0 カードスロットを備えた 8 つのデュアル PCIe カードキャリア (DPCC) 16 個の PCIe 3.0 スロット (8 つの x8 スロット、8 つの x16 スロット)、ホットスワップ可能、DPCC を使用
PCI Express I/O カード	お客様が注文できる I/O カードの一覧については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Oracle Server X5-8 のページを参照してください。 http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html
Ethernet ポート	2 つの 1G ビット/秒オンボード Ethernet ポート
サービスプロセッサ	Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は Emulex Pilot 3 ベースボード管理コントローラ (BMC) を使用します。次を提供します。 ■ リモートのキーボード、ビデオ、マウスのリダイレクション ■ コマンド行、IPMI、およびブラウザインタフェースによる完全なリモート管理 ■ リモートメディア機能 (DVD、CD、ISO イメージ) ■ 高度な電源管理およびモニタリング ■ Active Directory、LDAP、RADIUS のサポート ■ デュアル ILOM フラッシュ ■ 署名付き ILOM
電源装置	冗長、ホットスワップ対応、フロントアクセス可能な電源装置 4 台
冷却ファン	シャーシの前面のホットスワップが可能な冗長ファンモジュール (8 つ)。電源装置ごとの冗長ファン
オペレーティングシステム	■ Oracle Solaris (事前インストールオプション) ■ Oracle Linux (事前インストールオプション) ■ Oracle VM (事前インストールオプション) ■ Red Hat Enterprise Linux ■ Microsoft Windows Server ■ VMware ESXi ソフトウェアの詳細は、次を参照してください。 https://wikis.oracle.com/display/SystemsComm/Home#tab:x86-Systems-Options-and-Downloads
管理ソフトウェア	次のオプションを使用できます。 ■ サービスプロセッサ上の Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) ■ オプションの内蔵 USB フラッシュドライブ上の Oracle System Assistant (OSA) ■ Oracle サイトからダウンロード可能な Oracle Enterprise Management Ops Center

サーバーの設置の準備

このセクションでは、サーバーをラックに設置する前に知っておく必要のある情報について説明します。説明項目は次のとおりです。

説明	リンク
サーバーの物理、電気、および環境仕様を確認します。	23 ページの「サーバーの仕様」
ラックマウントサーバーの通気や冷却の要件を確認します。	25 ページの「通気のガイドライン」
サーバーの梱包を解き、出荷キットの内容を確認します。	26 ページの「出荷梱包インベントリ」
設置に必要な道具を組み立てます。	26 ページの「必要な工具および装置」
ESD に関する要件を確認し、安全対策を施します。	27 ページの「ESD 防止対策」
オプションのコンポーネントがある場合は、それらをサーバーに取り付けます。	27 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」
サイト計画のチェックリストを確認します。	133 ページの「サイト計画のチェックリスト」

サーバーの仕様

このセクションでは、システムの物理、電気、および環境仕様について説明します。

物理仕様

次の表に、Oracle Server X5-8 の物理仕様の一覧を示します。

パラメータ	値
高さ	5U/219.25 mm (8.63 インチ)
幅	445 mm (17.5 インチ)
奥行	834 mm (32.8 インチ)

パラメータ	値
重量	114 kg (250 ポンド)

電気仕様

次の表に、Oracle Server X5-8 の電気仕様の一覧を示します。

注記 - 電力消費に関する最新情報については、Sun x86 サーバーの Web サイトにアクセスし、Oracle Server X5-8 のページを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/sun-x86/overview/index.html>

パラメータ	値
公称入力周波数	50/60 Hz
動作入力電圧範囲	200 - 240VAC
定格入力電流	23A @ 200 - 230 VAC
	最大 12A (コードあたり)
最大消費電力	3400 W
最大熱出力	11600 BTU/時

環境要件

次の表に、Oracle Server X5-8 の環境要件の一覧を示します。

パラメータ	値
動作温度 (単一のラック以外のシステム)	海拔ゼロで 5°C - 35°C (41°F - 95°F)
	標高ゼロで 5°C - 31°C (41°F - 88°F)
動作時温度	5°C - 35°C (4°F - 95°F)
非動作時温度	-40°C - 70°C (-40°F - 158°F)
動作時湿度	10 - 90% の相対湿度、結露なし
非動作時湿度	最大 93% の相対湿度、結露なし
動作時高度	最高 3,000 m (9,840 フィート)、高度 900 m 以上では 300 m 上昇するたびに最高周囲温度が摂氏 1 度低下。最大高度 2,000 m への設置が規制されている中国市場を除く

パラメータ	値
非動作時高度	0 m - 12,000 m (0 フィート - 40,000 フィート)
音響ノイズ	音響ノイズ: 7.7 B 動作時、6.8 B アイドリング時 - (LwAd: 1 B=10 dB)

通気のガイドライン

Oracle Server X5-8 のようなラックマウント可能なサーバーや装置は通常、ラックの前面から冷たい空気を取り込み、ラックの背面から暖かい空気を排出します。冷却は前面から背面へ行うため、左右の側面に関するエアフロー要件はありません。

エアコン設備は通常、コンピュータールーム全体の温度や湿度を厳密にモニターおよび制御するわけではありません。一般に、ルーム内のメインユニットやその他のユニットの複数の排気口に対応する個々のポイントで、モニタリングが行われます。

床下通気を使用する場合は、湿度に特別な注意を払ってください。床下通気を使用する場合、各排気口に近いポイントごとに、モニタリングが行われます。部屋全体の温度や湿度の分布は均一ではありません。

Oracle Server X5-8 は、自然対流のエアフロー内に設置された場合に機能するように設計されています。環境仕様を満たせるように、次の要件に従う必要があります。

- システム内に十分なエアフローがあることを確認します。
- 吸気口がシステムの前面に、排気口がシステムの背面に存在していることを確認します。
- システムの前面に 1,232 mm (48.5 インチ) 以上、背面に 914 mm (36 インチ) 以上の通気用の隙間を確保します。
- シャーシの通気が妨げられていないことを確認してください。正常な動作条件では、サーバーは合計 100 CFM の通気を達成できる内蔵ファンを使用します。
- サーバーを通過する空気の温度は 20°C (68°F) を超えないようにしてください。
- 空気が、サーバーの前面から吸気され、背面に排気されることを確認してください。
- サーバーの吸気および排気の両方に使用されるキャビネットドアなどの通気口が塞がれていないことを確認してください。たとえば、Oracle の Sun Rack II は冷却に最適化されています。前面ドアと背面ドアの穿孔はどちらも 80% であるため、ラック内で高レベルのエアフローを実現できます。
- サーバーを取り付ける際は、サーバーの前面に 1 インチ (25.4 mm) 以上、サーバーの背面に 3.15 インチ (80 mm) 以上のスペースが必要です。

これらのスペースの値は、前述の吸気および排気のインピーダンス (使用可能な開口部) に基づいたもので、開口部が吸気および排気面に均一に分散していると仮定しています。これらの値により冷却パフォーマンスも向上します。

注記 - キャビネットドアやドアからサーバーまでのスペースなど、吸気および排気に関する制限の組み合わせは、サーバーの冷却パフォーマンスに影響を与える可能性があります。これらの制限を評価する必要があります。サーバーの配置は高温の環境で特に重要です。

- ラックまたはキャビネット内で排気が再循環しないように考慮してください。
- サーバーの排気口の妨げにならないように、ケーブルをまとめてください。

出荷梱包インベントリ

出荷用梱包箱を検査して、物理的な損傷がないかどうかを確認してください。出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いを要請してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。

Oracle Server X5-8 では、次のものが梱包されています。

- 電源コード (カントリーキットに別途梱包)
- シェルフレールと設置指示書を含むラックマウントキット
- その他のハードウェアおよびケーブル
- [『Oracle Server X5-8 Getting Started Guide』](#)
- 使用条件と安全性に関するドキュメント

必要なサーバーコンポーネントとほとんどのオプションは出荷時に取り付けられています。ただし、一部の注文オプションは別にパッケージ化される場合があります。

可能な場合は、サーバーをラックに設置する前にオプションのコンポーネントを取り付けます。サーバーのオプションの取り付け手順については、[27 ページの「オプションのコンポーネントの取り付け」](#)を参照してください。

必要な工具および装置

システムを設置するには、次の工具が必要です。

- プラスのねじ回し (Phillips の 2 番)
- ESD マットおよび接地ストラップ
- 機械式リフト

また、次のいずれかのようなシステムコンソールデバイスも必要です。

- ワークステーション
- ASCII 端末
- 端末サーバー
- 端末サーバーに接続されたパッチパネル

ESD 防止対策

電子機器は、静電気により損傷する可能性があります。サーバーの設置または保守時には、次に注意してください。

- 接地された静電気防止用リストストラップ、フットストラップ、またはこれらに相当する安全装置を使用してください。
- コンポーネントは、静電放電マット、静電気防止袋、使い捨て静電気防止用マットなどの静電気防止面の上に置きます。



注意 - 装置の損傷。静電気損傷によりシステムが永久に使用不能になったり、認定を受けた保守担当者による修理が必要になったりすることがあります。

オプションのコンポーネントの取り付け

標準のシステムコンポーネントは工場に取り付けられています。標準構成とは別に購入したオプションのコンポーネントは、個別に出荷され、ほとんどの場合、サーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

次のオプションのコンポーネントを注文および別途購入できます。

- PCIe カード
- DDR3 DIMM メモリーキット
- ストレージドライブ
- ソフトウェアメディア

オプションのコンポーネントを取り付けるには、CPU モジュール (CMOD) またはシステムモジュール (SMOD) の上部カバーにあるサービスラベルを参照するか、[『Oracle Server X5-8 Service Manual』](#)に記載されているコンポーネント保守手順を参照してください。

サポートされるコンポーネントとそのパーツ番号は、将来通知なしに変更される可能性があります。最新の一覧については、次を参照してください。

https://support.oracle.com/handbook_private/

ラックの設置手順

このセクションでは、ラックマウントキット内のシェルフレール構成部品を使用して、サーバーをラックに設置する手順について説明します。

Oracle Server X5-8 にはスライドレールがありません。一度ラックに設置すると、取り外さないかぎりラックからスライドさせて引き出すことはできません。ただし、前面または背面からほぼすべてのコンポーネントにアクセスできるため、取り外す必要はほとんどありません。

注記 - このガイドでは、用語「ラック」とはオープンラックまたはクローズキャビネットを意味します。

説明	リンク
安全上の注意事項を確認します。	29 ページの「安全上の注意事項」
ラックの互換性要件を確認します。	30 ページの「ラックの互換性」
サーバーの梱包を解き、内容のインベントリを作成します。	31 ページの「サーバーの開梱と内容のインベントリの作成」
シェルフレールと背面固定部品を取り付けます。	34 ページの「シェルフレールと背面固定部品の取り付け」
出荷用留め具を取り付けまたは取り外します (オプション)	39 ページの「出荷用留め具の取り付け (オプション)」
サーバーをラックに設置します。	41 ページの「サーバーをラックに取り付ける」

安全上の注意事項

このセクションでは、サーバーをラックに設置するときに従う必要のある安全上の注意事項について説明します。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止装置を配置します。



注意 - コンポーネントが損傷します。密閉されたラックアセンブリまたはマルチユニットのラックアセンブリにサーバーを設置している場合、ラック環境の動作時周辺温度が室内の周辺温度より高くなる場合があります。装置は常に、サーバーに指定された最大周辺温度 (TMA) に適合する環境内に設置してください。サーバーの環境要件については、[24 ページの「環境要件」](#)を参照してください。



注意 - 装置の損傷。装置をラック内に設置するときは、その装置の安全な動作に必要な通気が妨げられないようにしてください。



注意 - 回路の過負荷。電源回路への装置の接続、および回路の過負荷によって発生する可能性のある過電流対策や電源配線についても考慮するようにしてください。この問題に対処するときは、装置のネームプレートに表示された定格電力を十分に配慮するようにしてください。



注意 - 装置の損傷。接地を適切に行なってください。分岐回路への直接接続以外の電源接続 (電源タップの使用など) の場合は、特に注意してください。

次の表は、その他の警告を示すため装置に記されている図を示しています。

図	説明
	これは、感電する可能性がある部分に手を触れないよう注意を促す記号です。
	これは、サーバーの持ち上げを禁止し、代わりに機械式リフトの使用を促す記号です。

ラックの互換性

ラックと、シェルレール構成部品および背面固定部品との互換性があることを確認します。これらのコンポーネントは、次の表に示す標準を満たす装置ラックと互換性があります。

項目	要件
構造	前後左右で固定する形式の 4 ポストラック。2 ポストのラックとは互換性はありません。
ラックの横方向の開口部とユニットの縦方向のピッチ	ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 規格に適合すること。M6 または 9.5 平方ミリメートルのねじ穴だけがサポートされています。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の距離	最小 610 - 最大 915 mm (24 - 36 インチ)。
前側取り付け面の前面の隙間	キャビネット前面ドアまでの距離が 25.4 mm (1 インチ) 以上あること。
前側取り付け面の背後の隙間	ケーブル管理アームを使用する場合は、キャビネット後面ドアまで 900 mm (35.5 インチ) 以上の間隔があること、ケーブル管理アームを使用しない場合は 770 mm (30.4 インチ) 以上であること。
前側取り付け面と後ろ側取り付け面の隙間の幅	構造的支柱とケーブルの溝の距離が 456 mm (18 インチ) 以上であること。
サーバーの寸法	23 ページの「サーバーの仕様」 を参照してください。

関連項目

- [31 ページの「サーバーの開梱と内容のインベントリの作成」](#)
- [41 ページの「サーバーをラックに取り付ける」](#)

▼ サーバーの開梱と内容のインベントリの作成

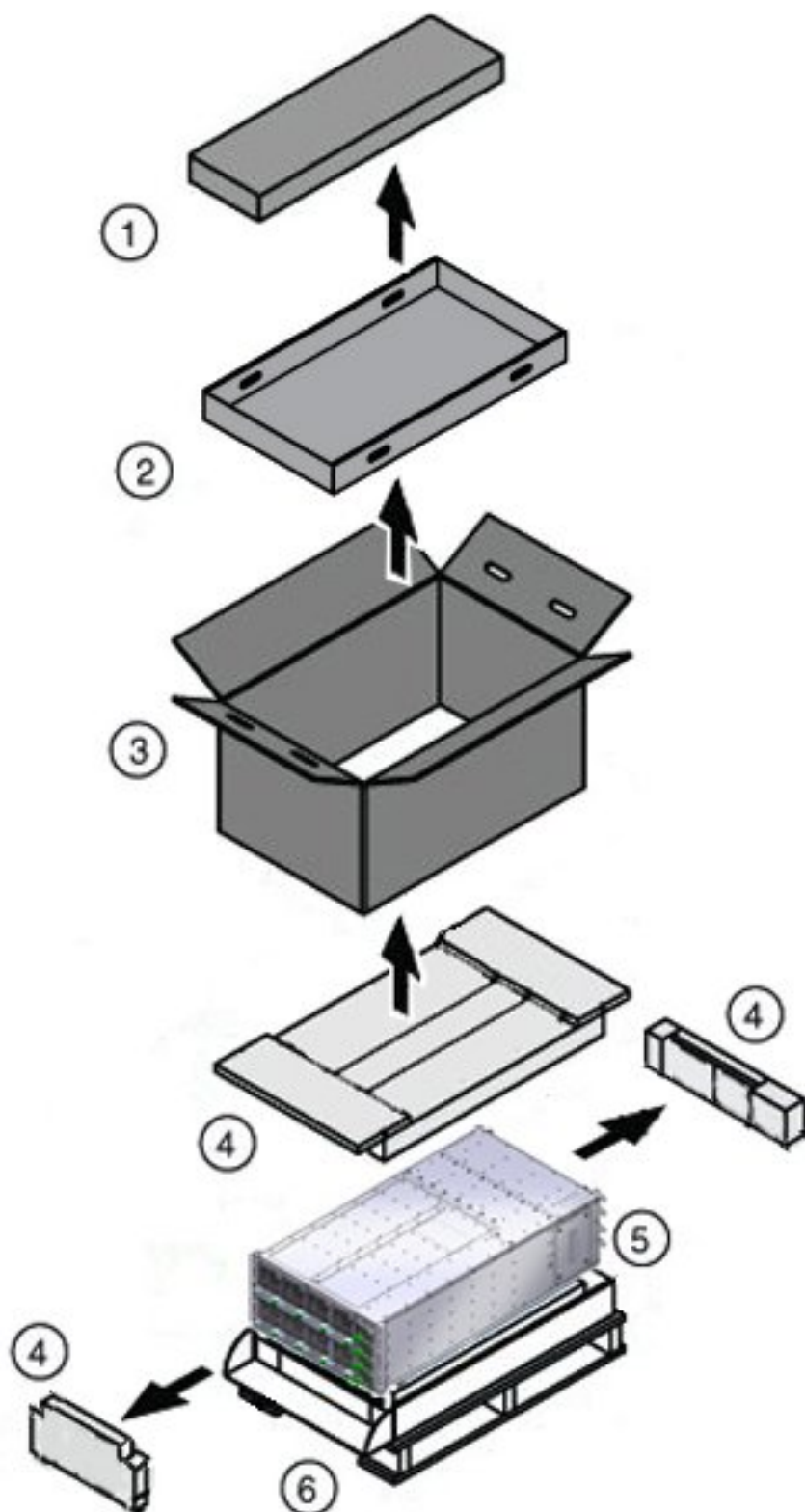
サーバーをコンテナから取り外して内容のインベントリを作成するには、この手順を使用します。

Oracle Server X5-8 では、次のものが梱包されています。

- 電源コード (カントリーキットに別途梱包)
- シェルフレールと設置指示書を含むラックマウントキット
- その他のハードウェアおよびケーブル
- [『Oracle Server X5-8 Getting Started Guide』](#)
- 使用条件と安全性に関するドキュメント

必要なすべてのサーバーコンポーネントとほとんどのオプションは出荷時に取り付けられています。ただし、一部の注文オプションは別にパッケージ化される場合があります。

次の図は、出荷用コンテナのコンポーネントを示しています。



吹き出し	説明
1	ラックマウントキット
2	トレイ
3	箱
4	フォームインサート
5	サーバー
6	パレット

始める前に この手順には機械式リフトが必要です。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。サーバーは重量があります。機械式リフトを使用せずにサーバーを設置しようとししないでください。

1. 出荷用梱包箱を検査して、物理的な損傷がないかどうかを確認してください。
出荷用梱包箱に損傷がある場合は、開梱の際に運送業者の立ち会いを要請してください。業者が検査できるように、箱の中身と梱包材はすべて保管しておいてください。
2. 箱の上部を開けます。
 - a. ストラップを切ります。
 - b. テープを切るか、または取り外します。
 - c. フラップを開けます。
3. ラックマウントキットを取り外し、それとその内容を別にしておきます。
4. トレイを取り外し、それを別にしておきます。
5. 箱を上を持ち上げてサーバーから取り外します。
6. フォームインサートを取り外します。
 - a. 波形のフラップを下に折りたたんで、前面のフォームインサートを取り外します。
 - b. フロントおよびリアインサートを取り外します。
7. 静電気防止用ラッパーをサーバーから取り外します。
8. サーバーをパレットから取り外すには、リフトのブレードをサーバーとパレットの間の隙間に挿入します。

ラックマウントの手順については、[29 ページの「ラックの設置手順」](#)を参照してください。

次の手順 ■ [34 ページの「シェルフレールと背面固定部品の取り付け」](#)

▼ シェルフレールと背面固定部品の取り付け

始める前に Oracle Server X5-8 を設置しようとしているラック内の位置を確認してください。5 ラックユニットが必要です。

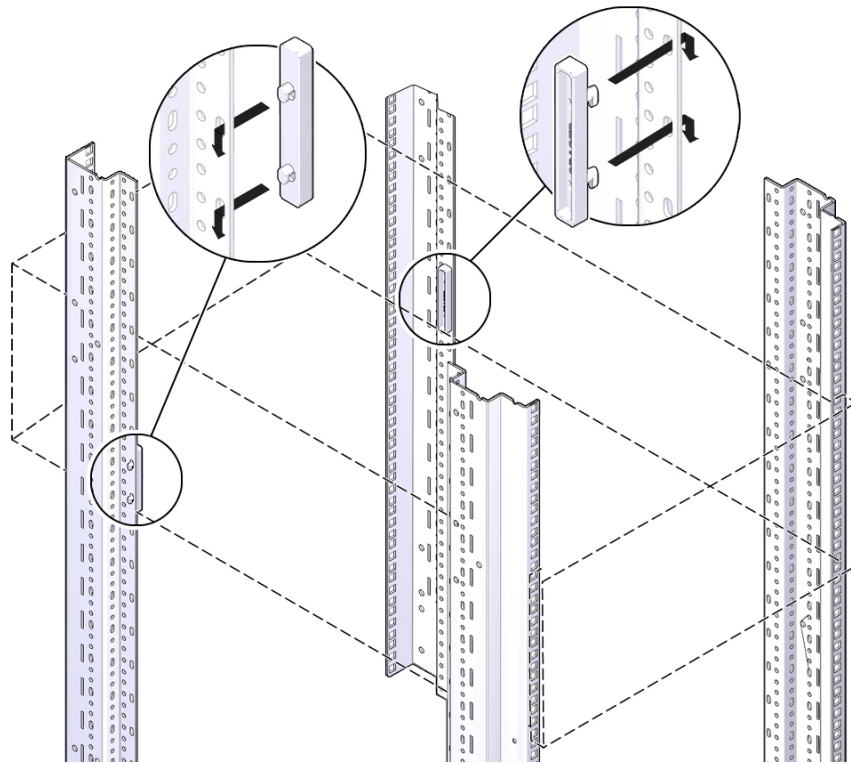
ラックが[30 ページの「ラックの互換性」](#)の要件を満たしていることを確認します。



注意 - 機器の損傷や、作業者の負傷。上方が重くなり転倒することがないように、装置は必ずラックの最下段から上へ順次搭載してください。装置の取り付け時にラックが転倒しないように、ラックの転倒防止装置を配置します。

1. ラック内のサーバーの位置を決定します。
Oracle Server X5-8 には 5 ラックユニットが必要です。
2. 背面ラックレールに 2 つのスペーサーを取り付けます。

スパーサーのスタッドは背面ラックレール内側の楕円形の穴に適合します。スパーサー下部をシステムのラックスペースのいちばん下に合わせます。

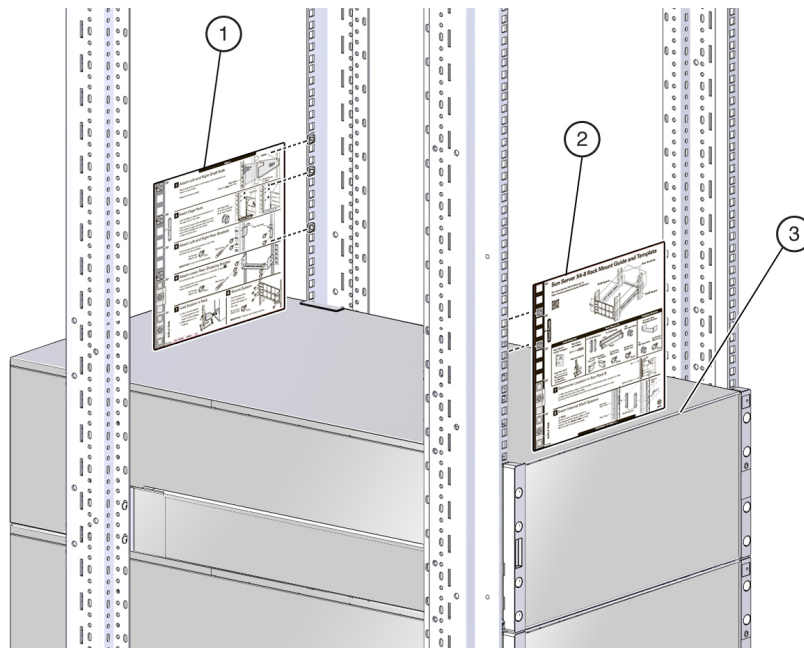


3. 四角穴ラックの場合、位置合わせテンプレートで示された位置にケージナットを取り付けます。丸穴ラックの場合は、手順 4 に進みます。

- a. テンプレートをサーバーを設置する穴に合わせます。

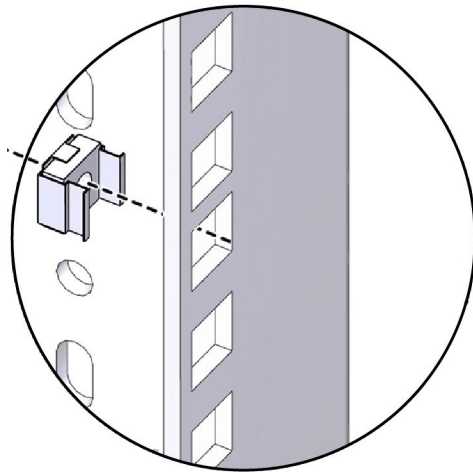
テンプレートには、背面ラック位置合わせ [1] と前面ラック位置合わせ [2] のいずれかのラック位置合わせの図があります。

サーバーは、何も収容されないラックスペースがないように、下のラックユニットのすぐ上に [3] 設置します。



- b. ケージナットをテンプレートに示されている位置に取り付けます。

ケージナットは各レールの内側に取り付けます。ケージナットは前面レールに 2 つずつ、背面レールに 3 つずつ取り付けます。



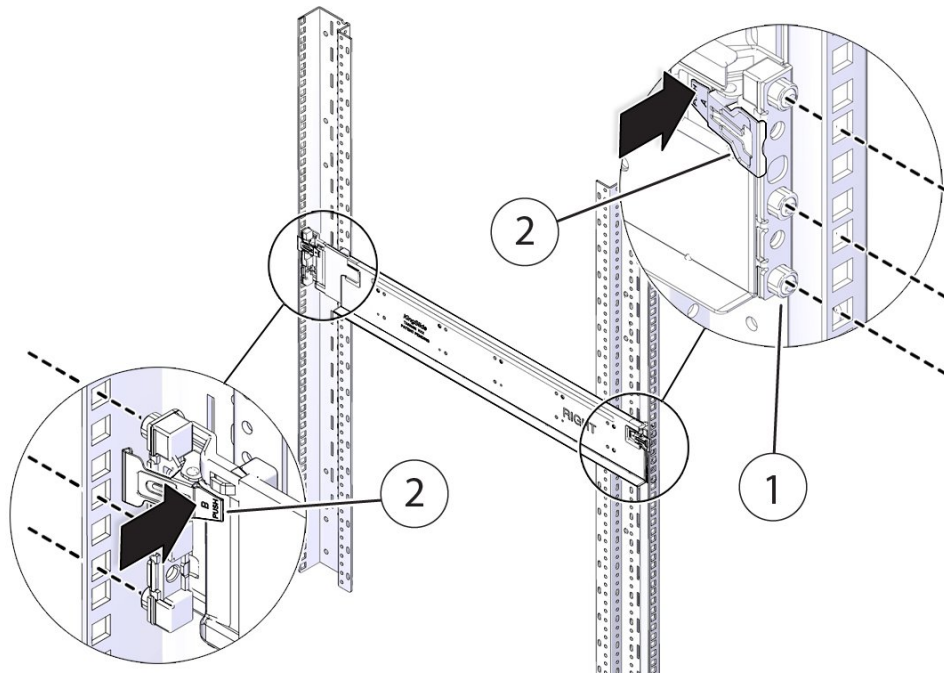
4. 左右のシェルフレールを取り付けます。

レールには、左と右、前面と背面のラベルが付いています。

レールの両端にはスタッドとラッチがあります。各レールで次のようにします。

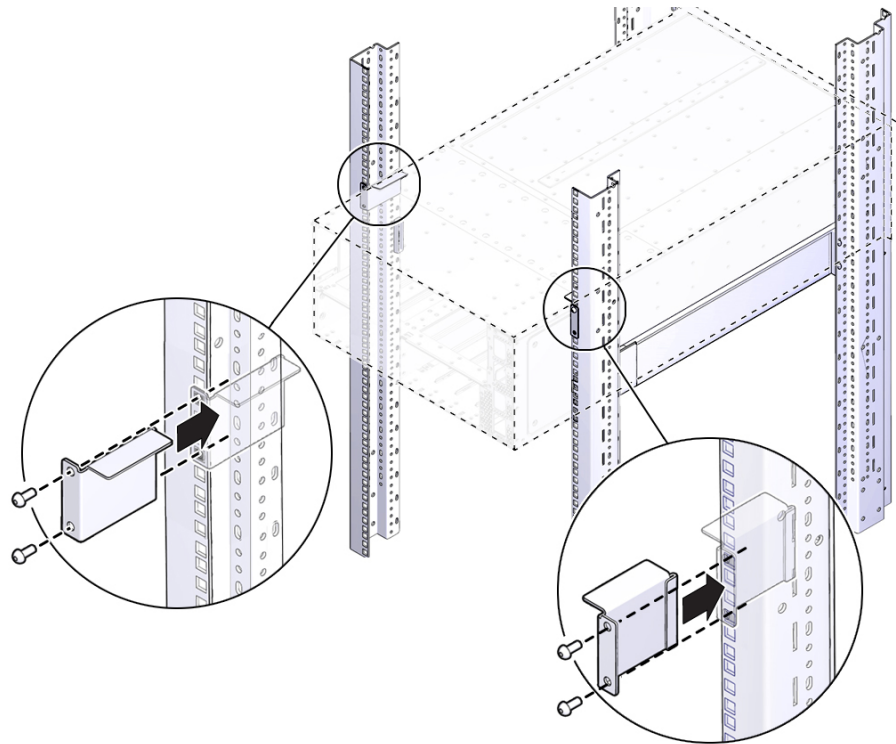
a. ラックに合わせてシェルフレールを伸ばします。

- b. スタッドを [1] ラックの穴に挿入し、タブ [2] を押してラッチを開き、ラックに固定します。



- 5. 背面固定部品を取り付けます。
 - a. フランジがサーバー上面を覆うように各固定部品を合わせます。
 - b. 2つのねじを使用して、各固定部品をラックに固定します。

この時点ではねじを最後まで締めないでください。



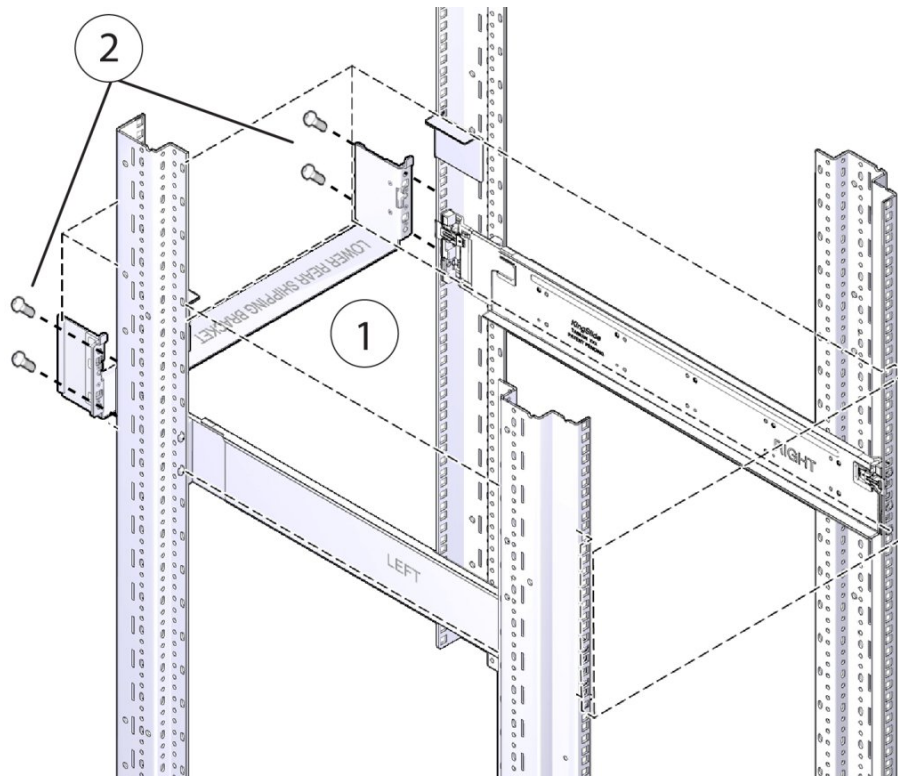
- 次の手順
- 39 ページの「出荷用留め具の取り付け (オプション)」
 - 44 ページの「サーバーのケーブル接続」

▼ 出荷用留め具の取り付け (オプション)

ラック内のサーバーを出荷する場合は、出荷用留め具を取り付けます。出荷用留め具はサーバーをラックに設置する前に取り付ける必要があります。

1. シェルフレール [1] のすぐ上に出荷用留め具を取り付けます。
出荷用留め具の水平方向の部分がシェルフレールの上に載っていることを確認します。

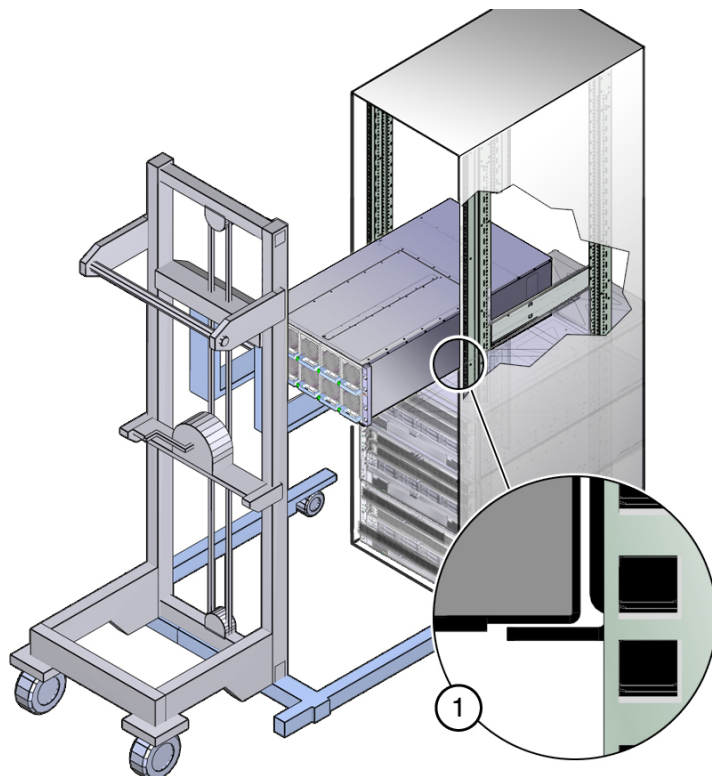
2. 4 つの M6 ねじ [2] を使用してラックに固定します。



次の手順 ■ [41 ページの「サーバーをラックに取り付ける」](#)

▼ サーバーをラックに取り付ける

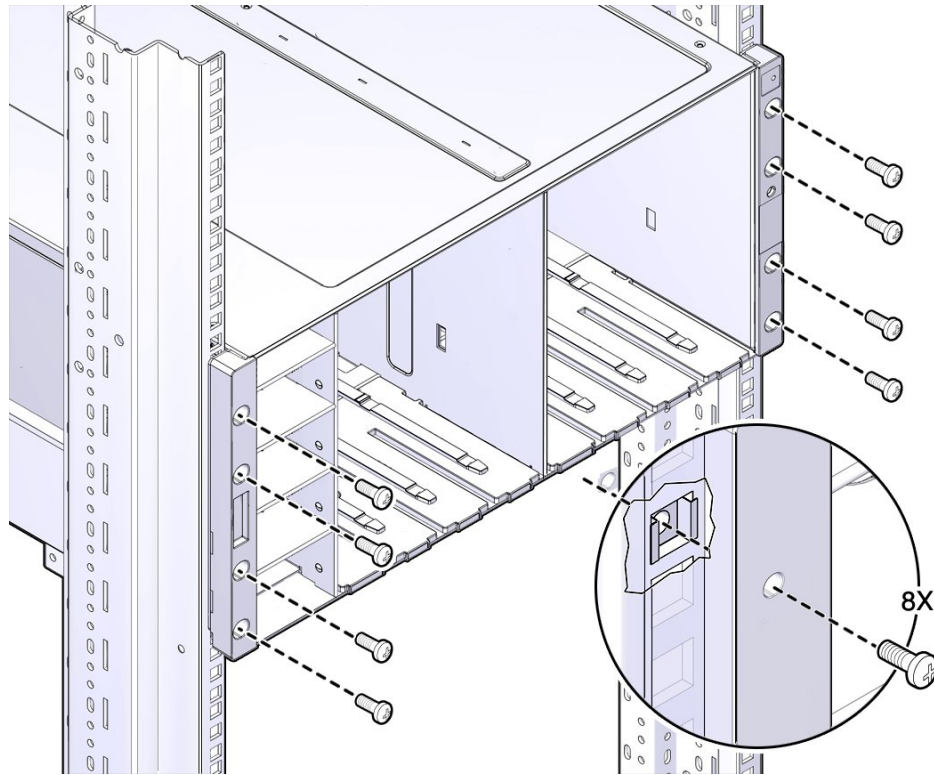
1. リフトを使用してサーバーをラックの所定位置まで持ち上げます。



注意 - 人的傷害または装置が損傷する可能性があります。サーバーがシェルフレールでしっかり支えられたことを確認してから、サーバーをリフトから降ろしてください。

2. シェルフレールの所定の位置までサーバーをゆっくり押し込みます。
サーバーがシェルフレールで完全に支えられるまでは、リフトの支えを外さないでください。
3. 8つの M6 ねじを使用してサーバーの前面をラックに取り付けます。

上2つのねじは、前の手順で取り付けたケージナットに合わせます。下のねじは、シェルフレールのねじ穴に合わせます。



4. 背面固定部品をサーバーに押し付けて、ねじを締めます。

- 参照
- 34 ページの「シェルフレールと背面固定部品の取り付け」
 - 44 ページの「サーバーのケーブル接続」

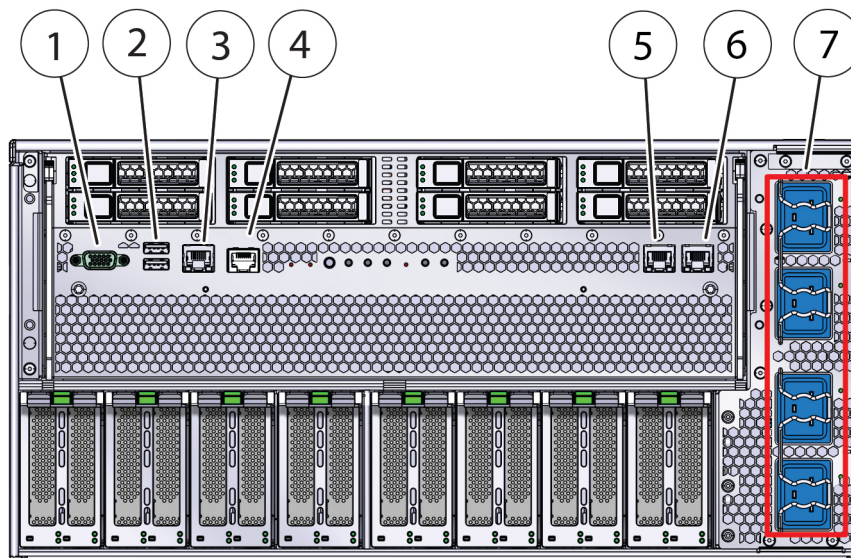
サーバーの配線

このセクションでは、はじめてケーブルを接続して電源を投入する方法について説明します。ここでは、次のトピックについて説明します。

説明	リンク
コネクタポートの場所を確認します。	43 ページの「バックパネルのコネクタとポート」
サーバーにデータケーブルを接続します。	44 ページの「サーバーのケーブル接続」
サーバーに電源コードを接続します。	44 ページの「サーバーのケーブル接続」

バックパネルのコネクタとポート

次の図は、サーバーのバックパネルのコネクタとポートの位置を示しています。



吹き出し	説明
1	DB-15 ビデオポート
2	USB 2.0 ポート (2)
3	ネット管理ポート (NET MGT)
4	シリアル管理ポート (SER MGT)
5	Net 0 ポート
6	Net 1 ポート
7	電源コネクタ 0 - 3。200 - 240 VAC にのみ接続します。

▼ サーバーのケーブル接続

次の順序で外部ケーブルをサーバーに接続します。

注記 - 括弧 [] 内の番号は、[43 ページの「バックパネルのコネクタとポート」](#) のバックパネルの図の吹き出しに対応しています。

1. 必要に応じて、Ethernet ケーブルを Gigabit Ethernet (NET) ポートに接続します [5-6]。

2. (オプション) システムコンソールと直接対話する予定がある場合は、すべての外部デバイス (マウスやキーボードなど) をサーバーの USB ポート [2] に、モニターを DB-15 ビデオポート [1] に接続します。
3. ネットワーク経由で Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) に接続する場合は、Ethernet ケーブルを NET MGT [3] とラベル付けされた Ethernet ポートに接続します。

注記 - サービスプロセッサ (SP) は、デフォルトで NET MGT (帯域外) ポートを使用します。代わりに、サーバーの 2 つの 10/100/1000 Ethernet ポートのいずれかを共有するように SP を構成できます。

4. シリアル管理ポートを使用して Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にアクセスするには、シリアルヌルモデムケーブルを SER MGT [4] というラベルが付いた RJ-45 シリアルポートに接続します。

シリアルコンソールからのシステム出力の表示の詳細は、[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)を参照してください。

5. サーバーの電源コードをサーバーのバックパネルにある AC コネクタに接続し、コネクタのケーブルクリップ [7] を使用して各コードを固定します。

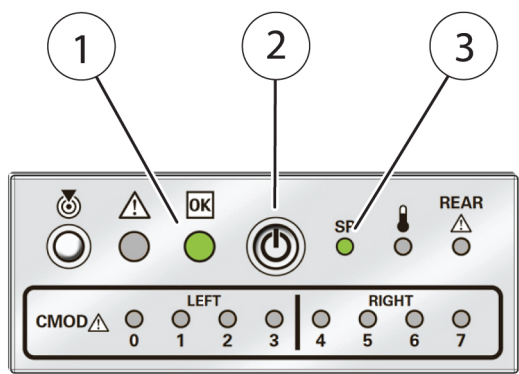
AC は接地された 200 - 240V である必要があります。

電源障害が発生した場合の冗長性を確保するため、および回路遮断器の過負荷からシステムを保護するため、上 2 つの電源コードを下 2 つの電源コードとは異なる回路に接続してください。

電源が接続されると、SP はブートしてスタンバイ電源モードに入ります。

- SP のブート中、SP OK/保守要求インジケータ [3] は点滅し、メインのシステム OK インジケータ [1] は消灯したままになります。
- SP がブートを完了すると、SP OK/保守要求インジケータ [3] は点灯したままになり、メインのシステム OK インジケータは 3 秒ごとに 1 回すばやく点滅します。

ホストは初期化されていないか、まだ電源が投入されていません。



吹き出し	説明
1	システム OK インジケータ
2	埋め込み式の電源ボタン
3	SP OK インジケータ

参照 [127 ページの「システム電源の制御」](#)
[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)

サーバーの管理

サーバーの設置後、複数サーバー管理ツールまたは単一サーバー管理ツールを使用してサーバーを管理できます。

- [47 ページの「複数サーバー管理ツール」](#)
- [47 ページの「単一サーバー管理ツール」](#)

複数サーバー管理ツール

Oracle は、複数のサーバーを管理するためのいくつかのツールを提供しています。これらのツールには、次のものが含まれます。

- このサーバーが、単一のインタフェースから管理する多数の x86 および SPARC サーバーのうちの 1 つである場合は、Oracle Enterprise Manager Ops を使用します。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html> を参照してください。
- エンタープライズサーバーをモニターするには、Sun Management Center を使用します。詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/systems/patches/sysmgmt/smc-jsp-138444.html> を参照してください。
- すでにサードパーティーのシステム管理ツールがある場合、これらのサーバーは多くのサードパーティーツールと統合できます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/system-management> を参照してください。

単一サーバー管理ツール

次の表は単一サーバーの管理に使用できるツールを一覧しています。

ツールリンク	タイプや環境	機能
48 ページの「Oracle System Assistant」	インストール済みです。サーバー内部の USB ドライブに組み込まれています。インストールは必要ありません。	サポートされているオペレーティングシステムをインストールし、サーバーハードウェアをローカル

ツール/リンク	タイプや環境	機能
	ホスト上でブートします。グラフィカルユーザーインターフェイスと、ファイルブラウザを使用してホストオペレーティングシステムからアクセスできるファイルが含まれています。	またはリモートで構成および更新します。
48 ページの「Oracle ILOM」	インストール済みのサービスプロセッサ (SP) ユーティリティ。インストールは必要ありません。初期構成が若干必要です。 ホストから独立して動作します。 Web インタフェースとコマンド行インタフェース (CLI) を提供します。	サーバーコンポーネントをローカルまたはリモートで構成および管理します。専用のネットワークポート、サイドバンドポート、またはローカルシリアルポートに接続します。
49 ページの「Oracle Hardware Management Pack」	アドオンのソフトウェアパック。Oracle System Assistant から取得するか、 http://www.oracle.com/goto/system-management からダウンロードします。 オペレーティングシステムレベルで動作するコマンドやエージェントを備えており、複数のシステムにわたって使用可能です。	SNMP を使ってリモートから、またはコマンド行インタフェースツールを使ってローカルで、ホストオペレーティングシステム経由でハードウェアをモニターします。
50 ページの「UEFI BIOS」	システムをブートし、ブートプロセスに割り込むことによってアクセスされます。単純なグラフィカルユーザーインターフェイスを提供します。	システム機能のハードウェアレベルの管理を提供します。

これらのツールの詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバーの初期のサーバー設定や保守を実行できる、タスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Oracle VM、Linux、または Windows オペレーティングシステムをインストールしたり、サーバーを最新のソフトウェアリリースに更新したり、サーバーハードウェアを構成できます。Oracle System Assistant は、サーバーの購入時に入手可能な、出荷時にインストールされるオプションです。Oracle System Assistant がサーバーに含まれている場合は、内蔵 USB フラッシュドライブ上に存在します。

Oracle ILOM

Oracle ILOM は、サーバーモジュールコンポーネントをモニターおよび管理するために使用される、サーバーの組み込み機能です。

Oracle ILOM のソフトウェア機能には、次のものが含まれます。

- ネットワーク情報の構成
- SP のハードウェア構成の表示および編集
- 重要なシステム情報のモニタリングと記録されたイベントの表示
- Oracle ILOM ユーザーアカウントの管理

次のいずれかの方法でサーバーの SP にアクセスできます。

- [54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)
- [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)

Oracle Hardware Management Pack

Oracle Hardware Management Pack (HMP) は、サーバーを管理するためのコマンド行インタフェース (CLI) ツールと SNMP モニタリングエージェントを提供します。

- Oracle Server CLI ツールを使用して Oracle サーバーを構成できます。CLI ツールは、Oracle Solaris、Oracle Linux、Oracle VM、Linux のその他のバリエーション、および Windows オペレーティングシステムと連携して動作します。これらのツールをスクリプト化すると、サーバーの種類が同じであるかぎり、複数のサーバーをサポートできます。
- Hardware Management Agent SNMP プラグインにより、SNMP を使用すると、Oracle サーバーやサーバーモジュールを、1 つのホスト IP アドレスを使用してオペレーティングシステムからモニターできます。これにより、2 つの管理ポイント (Oracle ILOM とホスト) に接続する必要はなくなります。

Hardware Management Agent は、Oracle ILOM との間で情報のフェッチとプッシュを行います。SNMP プラグインは、業界標準の SNMP ユーザーインタフェースを提供します。

Oracle Linux Fault Management Architecture (FMA) を使用すると、Oracle Linux 6.5 以降のシステム上の Oracle ILOM 障害管理シェルの場合と同様のコマンドを使用して、オペレーティングシステムレベルで障害を管理できます。この機能は、Hardware Management Pack 2.3 で使用できます。

Oracle Hardware Management Pack の詳細は、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/ohmp/docs>

UEFI BIOS

Oracle Server X5-8 には Unified Extensible Firmware Interface 互換 BIOS (UEFI BIOS) が搭載されているため、レガシー BIOS の制限の多くが回避されます。ただし、一部のオペレーティングシステムは UEFI ブートモードでブートできないため、UEFI BIOS には UEFI ブートモードとレガシーブートモードのどちらかを選択できる機能があります。デフォルトはレガシーブートモードです。

ブートモードを変更すると、以前のモードのブート候補は表示されなくなります。新しいモードのブート候補は、BIOS コマンド「Save Changes and Reset」を発行したあとに表示されます。

元に戻すことが必要になった場合に備えて構成を保持するには、Oracle ILOM BIOS の「Backup and Restore」機能を使用します。Oracle ILOM については、Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) のドキュメント (<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>) を参照してください。

ブートモードを選択してオペレーティングシステムをインストールしたあとに、サーバーをリブートして別のブートモードを選択した場合、インストールされたイメージはアクセス不可能となり、使用できません。

次の表は、BIOS ブートモードについて説明しています。

ブートモード	説明
レガシーブートモード	ソフトウェアまたはアダプタが UEFI ドライバを備えていないか、またはシステムがオプション ROM を使用しているときに、ホストバスアダプタ (HBA) でオプション ROM を使用できるようにするには、レガシーブートモードを選択します。
UEFI ブートモード	レガシーブートモードは、デフォルトのブートモードです。レガシーブートモードでは、レガシーブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティー画面の「Boot Options Priority」リストに表示されます。 ソフトウェアとアダプタが UEFI ドライバを備えているときに UEFI ドライバを使用するには、UEFI ブートモードを選択します。UEFI ブートモードは、設定中に手動で選択されます。選択を行う手順については、http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。 UEFI ブートモードでは、UEFI ブートモードをサポートするブート候補のみが BIOS 設定ユーティリティー画面の「Boot Options Priority」リストに表示されます。

UEFI BIOS の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

Oracle ILOM への接続

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) は、サーバーをモニターおよび管理するために使用される組み込みのツールです。Oracle ILOM を使用すると、次のタスクを実行できます。

- ホストの電源を投入または切断した状態で、サーバーをローカルまたはリモートで管理する
- 重要なシステム情報をモニターしたり、ログに記録されたイベントを表示したり、通知を取得したり、トラブルシューティングツールを実行したりする
- サーバーハードウェア構成を表示および編集する
- 会社のセキュアなインフラストラクチャーを使用して Oracle ILOM ユーザーアカウントを管理します
- ホストコンソールにリモートでアクセスします
- Oracle ILOM およびサーバーの BIOS 構成情報をバックアップします

このセクションでは、Oracle ILOM のコマンド行インタフェース (CLI)、または Web インタフェースを構成およびアクセスして、サーバーを管理する方法について説明します。

説明	リンク
Oracle ILOM のハードウェアとインタフェースについて学習します。	52 ページの「Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース」
ネットワークポートとデフォルト値について学習します。	52 ページの「Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値」
シリアルポートに接続された端末を使用して Oracle ILOM に直接ログインします。	53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」
Ethernet 接続を使用してネットワーク経由で Oracle ILOM にログインします。	54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする」
Oracle ILOM ネットワーク設定を構成します。	■ 56 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 ネットワーク設定の変更」 ■ 60 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからのネットワーク設定の変更」 ■ 62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」

説明	リンク
Oracle ILOM を終了します。	■ 63 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」
サービスプロセッサ接続をトラブルシューティングします。	64 ページの「Oracle ILOM の終了」 64 ページの「サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング」

関連項目

- [67 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)
- Oracle ILOM を使用する手順の詳細については、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> を参照してください。

Oracle ILOM のハードウェアとインタフェース

次の表に、Oracle ILOM のコンポーネントと機能の一覧を示します。

コンポーネント	機能
ハードウェア	■ ファン、ストレージドライブ、電源装置など、各コンポーネントのステータスと構成をモニターする組み込みのサービスプロセッサ (SP) チップセット。 ■ バックパネルの 2 つの外部接続: NET MGT ポート Ethernet 接続、および SER MGT RJ-45 シリアル管理ポート。 17 ページの「バックパネルの機能」 を参照してください。
インタフェース	■ Web ブラウザのインタフェース ■ SSH コマンド行インタフェース (CLI) ■ IPMI v2.0 CLI ■ SNMP v3 インタフェース

Oracle ILOM のネットワークのデフォルト値

Oracle Server X5-8 は、Oracle ILOM が IPv4 および IPv6 ネットワーク環境で完全に動作できるようにする、IPv4 と IPv6 のデュアルスタック設定をサポートしています。

- IPv4 構成の場合は、DHCP がデフォルトで有効になっているため、ネットワーク上の DHCP サーバーがネットワーク設定をサーバーに自動的に割り当てることができます。
- IPv6 構成の場合は、IPv6 ステートレス自動構成がデフォルトで有効になっているため、ネットワーク上の IPv6 ルーターがネットワーク設定を割り当てることができます。

きます。標準的な構成では、サーバーは、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターによって割り当てられた設定を受け入れます。

注記 - DHCP サーバーによって割り当てられた IP アドレスまたはホスト名を確認するには、DHCP サーバーまたは IPv6 ルーターに付属しているネットワークツールを使用してください。

このセクションの手順に従って、割り当てられた設定が正しく動作していることをテストし、Oracle ILOM への接続をローカルおよびリモートで確立できます。

関連項目:

- [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)
- [54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)

▼ ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする

この手順では、サーバーのサービスプロセッサ (SP) の IP アドレスを知っている必要はありません。ここでは、管理者権限を持つ Oracle ILOM アカウントにログインする必要があります。

注記 - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは `root` であり、そのパスワードは `changeme` です。このデフォルトのアカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者権限を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

1. 端末か、または端末ソフトウェアおよび接続を備えたノートパソコンを **SER MGT** ポートに接続します。
詳細は、[43 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。
2. 次の端末設定を構成します。
 - **8N1: 8 データビット、パリティなし、1 ストップビット**
 - **9600 ボー**
 - **ハードウェアフロー制御 (CTS/RTS) は無効**
3. **Enter** キーを押して、シリアルコンソールと Oracle ILOM の間の接続を確立します。

Oracle ILOM へのログインプロンプトが表示されます。

4. 管理者アカウントを使用して、Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインします。

Oracle ILOM に、Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

▼ リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする

ここでは、Oracle ILOM Web インタフェースおよび Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) にログインする手順について説明します。

始める前に 次のものを取得してください。

- Oracle ILOM 管理者アカウントおよび対応するパスワード。

注記 - デフォルトの Oracle ILOM 管理者アカウントは `root` であり、そのパスワードは `changeme` です。このデフォルトのアカウントが変更されている場合は、システム管理者に連絡して、管理者権限を持つ Oracle ILOM ユーザーアカウントを取得してください。

- サーバー SP のホスト名と IP アドレス。
- サポートされているブラウザ。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> を参照してください。
- NET MGT ポートへの接続。
詳細は、[43 ページの「サーバーの配線」](#)を参照してください。

1. CLI または Web インタフェースを使用して、Oracle ILOM への接続を確立します。

- **CLI:** セキュアシェルセッションを開始します。次のように入力します。

```
ssh username@host
```

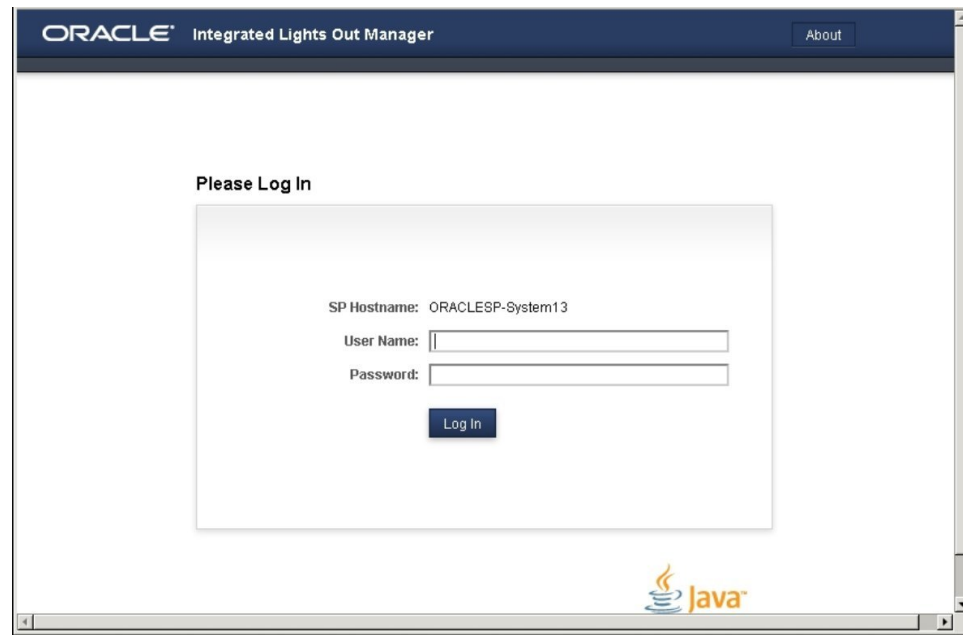
ここで、`username` は管理者権限を持つアカウントのユーザー名であり、`host` はサーバー SP の IP アドレスまたはホスト名 (DNS を使用している場合) です。

Oracle ILOM パスワードプロンプトが表示されます。

Password:

- **Web インタフェース:** Web ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの IP アドレスを入力して、**Enter** を押します。

Oracle ILOM ログイン画面が表示されます。



2. Oracle ILOM にログインします。

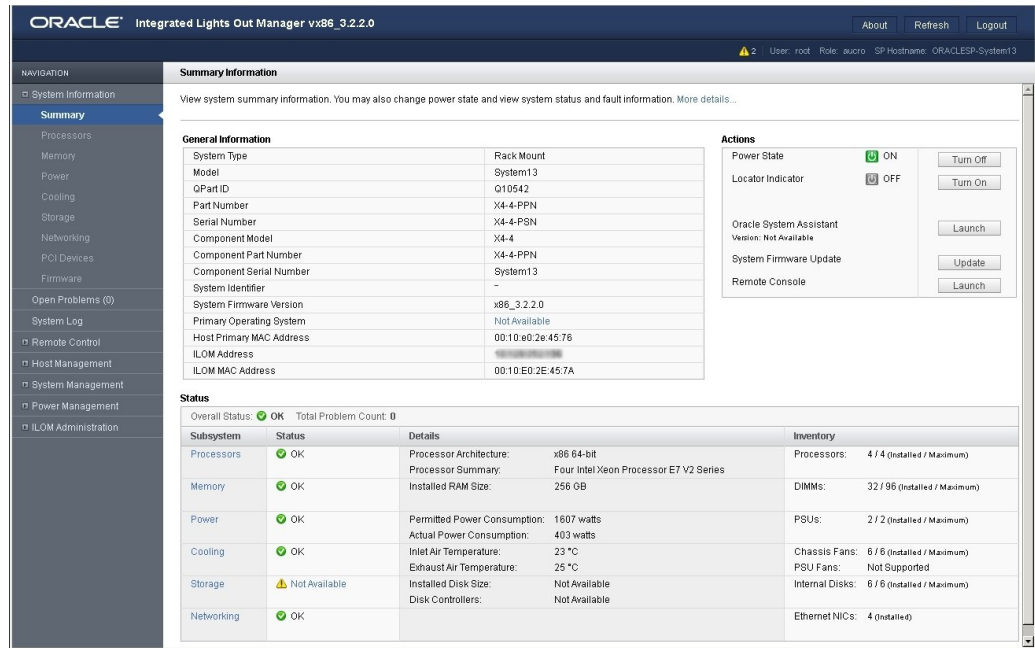
- **CLI: Oracle ILOM パスワードプロンプトで、パスワードを入力し、Enter キーを押します。例:**

Password: **changeme**

Oracle ILOM に、Oracle ILOM に正常にログインしたことを示すデフォルトのコマンドプロンプト (->) が表示されます。

- **Web インタフェース: Oracle ILOM ログイン画面で、ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。**

Oracle ILOM に正常にログインしたことを示す「Summary」画面が表示されます。例:



▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 ネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI を使用してサーバーの IPv4 ネットワーク設定を変更するには、この手順を使用します。

IPv6 ネットワーク設定を変更するには、[58 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv6 ネットワーク設定の変更」](#)を参照してください。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、[『Oracle Server X5-8 Service Manual』](#)を参照してください。

1. Oracle ILOM CLI にログインします。次を参照してください。

- [53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)

■ 54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする」

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定したときに接続が終了します。これが発生した場合は、新しい設定を使用して再度ログインします。

2. cd コマンドを使用して、/SP/network ディレクトリに移動します。

-> cd /SP/network

3. 次のいずれかを実行します。

■ ネットワーク上に DHCP サーバーがある場合、次のコマンドを入力し、DHCP サーバーがサーバーに割り当てた設定を表示します。

-> show /SP/network

■ DHCP サーバーがない場合、または設定を割り当てる場合、set コマンドを使用し、次の表にあるプロパティの値を割り当てます。例:

-> set /SP/network/ pendingipdiscovery=static

-> set /SP/network/ pendingipaddress=192.168.183.106

-> set /SP/network/ pendingipnetmask=255.255.255.0

-> set /SP/network/ pendingipgateway=192.168.183.254

-> set /SP/network/ commitpending=true

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	ネットワークの状態はデフォルトで enabled に設定されています。
pendingipdiscovery	set pendingipdiscovery=static	静的ネットワーク構成を有効にするには、pendingipdiscovery を static に設定します。 デフォルトでは、pendingipdiscovery は dhcp に設定されています。
pendingipaddress	set pendingipaddress=<ip_address>	複数の静的ネットワーク設定を割り当てるには、各プロパティ値 (IP アドレス、ネットマスク、およびゲートウェイ) に対して、set コマンドに続けて pending コマンドを入力したあと、割り当てる静的な値を入力します。
pendingipnetmask	pendingipnetmask=<netmask>	
pendingipgateway	pendingipgateway=<gateway>	

プロパティ	プロパティの設定値	説明
commitpending	set commitpending=true	set commitpending=true と入力し、変更をコミットします。

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、commitpending を true に設定したときに接続が終了します。これが発生した場合は、新しい設定を使用して再度ログインします。

4. ネットワークテストツール (Ping) を使用して、Oracle ILOM から IPv4 ネットワーク構成をテストします。
詳細は、62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」を参照してください。

▼ Oracle ILOM CLI からの IPv6 ネットワーク設定の変更

Oracle ILOM CLI を使用してサーバーの IPv6 ネットワーク設定を変更するには、この手順を使用します。

IPv4 ネットワーク設定を変更するには、56 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 ネットワーク設定の変更」を参照してください。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、「BIOS Setup Utility」 in 『Oracle Server X5-8 Service Manual』を参照してください。

1. Oracle ILOM CLI にログインします。次を参照してください。
 - 53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」
 - 54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする」

注記 - Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインした場合、ネットワーク設定の変更後に接続が終了します。新しい設定を使用して再度ログインする必要があります。

2. cd コマンドを使用して、SP/network/ipv6 ディレクトリに移動します。
-> cd SP/network/ipv6
3. show コマンドを入力して、デバイスで構成された IPv6 ネットワーク設定を表示します。

例:

```
-> show
/SP/network/ipv6
Targets:

Properties:
state = enabled
autoconfig = stateless
dhcpv6_server_duid = (none)
link_local_ipaddress = 2001:db8:214:4fff:feca:5f7e/64
static_ipaddress = ::/128
ipgateway = 2001:db8:211:5dff:febe:5000/128
pending_static_ipaddress = ::/128
dynamic_ipaddress_1 2001:db8:8:b7:214:4fff:feca:5f7e/64

Commands:
cd
show
```

4. **IPv6 自動構成オプションを構成するには、set コマンドを使用して、次の自動構成プロパティの値を指定します。**

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。IPv6 自動構成オプションを有効にするには、この state が enabled に構成されている必要があります。
autoconfig	set autoconfig=<value>	このコマンドには、設定する autoconfig の値を指定します。 次のオプションがあります。 ■ stateless (デフォルト設定) IPv6 ネットワークルーターから学習した IP アドレスを自動的に割り当てます。 ■ dhcpv6_stateless DHCPv6 サーバーから取得した DNS 情報を自動的に割り当てます。dhcpv6_stateless プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ dhcpv6_stateful DHCPv6 サーバーから取得した IPv6 アドレスを自動的に割り当てます。dhcpv6_stateful プロパティの値は、Oracle ILOM 3.0.14 以降で使用できます。 ■ disable すべての自動構成プロパティ値を無効にし、リンクローカルアドレスの読み取り専用プロパティ値を設定します。

注記 - IPv6 構成オプションは、それが設定されたあとに有効になります。

注記 - dhcpv6_stateless オプションまたは dhcpv6_stateful オプションが有効になっているときに、stateless オプションを同時に有効にして実行できます。ただし、dhcpv6_stateless と dhcpv6_stateful を同時に有効にしないでください。

5. 静的 IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を完了します。

a. 次のプロパティタイプを指定します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
state	set state=enabled	IPv6 ネットワークの状態は、デフォルトで enabled になっています。静的 IP アドレスを有効にするには、この状態を enabled に設定する必要があります。
pendingipaddress	set pending_static_ipaddress = <ipv6_address> / <subnet mask length in bits>	このコマンドには、プロパティ値として、デバイスに割り当てる静的 IPv6 アドレスおよびネットマスクを指定します。IPv6 アドレスの例: fec0:a:8:b7:214:4f ff:feca:5f7e/64

b. 次のコマンドを入力して、保留中の IPv6 静的ネットワークパラメータを確定します。

```
-> set commitpending=true
```

注記 - ネットワーク設定は、確定するまで保留されます。サーバーに新しい静的 IP アドレスを割り当てると、サーバーとのアクティブな Oracle ILOM セッションがすべて終了します。Oracle ILOM にログインし直すには、新しく割り当てられた IP アドレスを使用して、新しいセッションを作成します。

6. ネットワークテストツール (Ping6) を使用して、Oracle ILOM から IPv6 ネットワーク構成をテストします。

詳細は、[62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからのネットワーク設定の変更

Oracle ILOM Web インタフェースからサーバーで現在構成されているネットワーク設定を変更するには、次の手順を使用します。

注記 - BIOS 設定ユーティリティを使用して、ネットワーク設定を変更することもできます。手順については、「BIOS Setup Utility」 in 『Oracle Server X5-8 Service Manual』を参照してください。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。**
54 ページの「リモート Ethernet 接続を使用して Oracle ILOM にログインする」を参照してください。
2. 左側のナビゲーションツリーから、「ILOM Administration」>「Connectivity」の順に選択します。
「Network Settings」画面が表示されます。Oracle ILOM はデバイスに構成した設定が表示されます。

ORACLE Integrated Lights Out Manager vx86_3.2.2.0

NAVIGATION

- System Information
 - Summary
 - Processors
 - Memory
 - Power
 - Cooling
 - Storage
 - Networking
 - PCI Devices
 - Firmware
- Open Problems (0)
- System Log
- Remote Control
- Host Management
- System Management
- Power Management
- ILOM Administration
 - Identification
 - Logs
 - Management Access
 - User Management
 - Connectivity**
 - Configuration Management
 - Notifications
 - Date and Time
 - Maintenance

Connectivity

Network DNS Serial Port

View the MAC address and configure network settings for the Service Processor from this page. DHCP is the default mode, but you can manually configure a static IP Address, Gateway. You may also select which port you wish to use for managing this Service Processor. More details...

General Settings Dynamic Address Local Host Interconnect Network Tools

General Settings

State: ☒ Enabled

MAC Address: 00:10:E0:2E:45:7A

Out of Band MAC Address: 00:10:E0:2E:45:7A

Sideband MAC Address: 00:10:E0:2E:45:7B

Management Port: MGMT

802.1Q Tagging: ☐ Enabled

VLAN ID:

The valid range is from 1-4095. The default is: Disabled

Responding DHCP Server:

IPv4

IP Discovery Mode: ☒ DHCP ☐ Static

DHCP Client ID: None

SysID is the System Identifier configured on the Identification Information page.

IP Address:

Netmask: 255.255.255.0

Gateway:

IPv6

State: ☒ Enabled

Autoconfig: ☒ Stateless ☐ None

DHCPv6 Autoconfig: ☐ Stateless ☐ Stateful ☒ None

3. 使用しているネットワーク環境に当てはまるネットワーク構成手順を実行します。

■ IPv4:

- ネットワーク上の DHCP サーバーにネットワーク設定の割り当てを許可するには、「DHCP」ラジオボタンが選択されていることを確認して、「Save」をクリックします。
- ネットワーク設定を割り当てるには、「Static」ラジオボタンを選択して、「IP Address」、「Netmask」、および「Gateway」フィールドに入力します。次に「Save」をクリックします。

■ IPv6:

- 自動構成オプションを構成するには、「State」プロパティの横にある「Enabled」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、自動構成値を選択して「Save」をクリックします。
- 静的 IPv6 アドレスを設定するには、「State」プロパティの横にある「Enabled」チェックボックスが選択されていることを確認します。次に、*ipv6_address/subnet mask length in bits* の値を「Static IP Address」フィールドに入力して、「Save」をクリックします。

注記 - DHCPv6 Autoconfig Stateless オプションを有効にした状態、または DHCPv6 Autoconfig Stateful オプションを有効にした状態で、Autoconfig Stateless オプションの実行を有効にできます。

4. ネットワークテストツール (Ping および Ping 6) を使用して、Oracle ILOM で IPv4 または IPv6 のネットワーク構成をテストします。

詳細は、[62 ページの「Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト」](#)を参照してください。

▼ Oracle ILOM CLI からの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. CLI プロンプトで show コマンドを入力して、ネットワークの test ターゲットとプロパティを表示します。

たとえば、次の出力は test のターゲットプロパティを示しています。

```
-> show
/SP/network/test
Targets:

Properties:
ping = (Cannot show property)
ping6 = (Cannot show property)

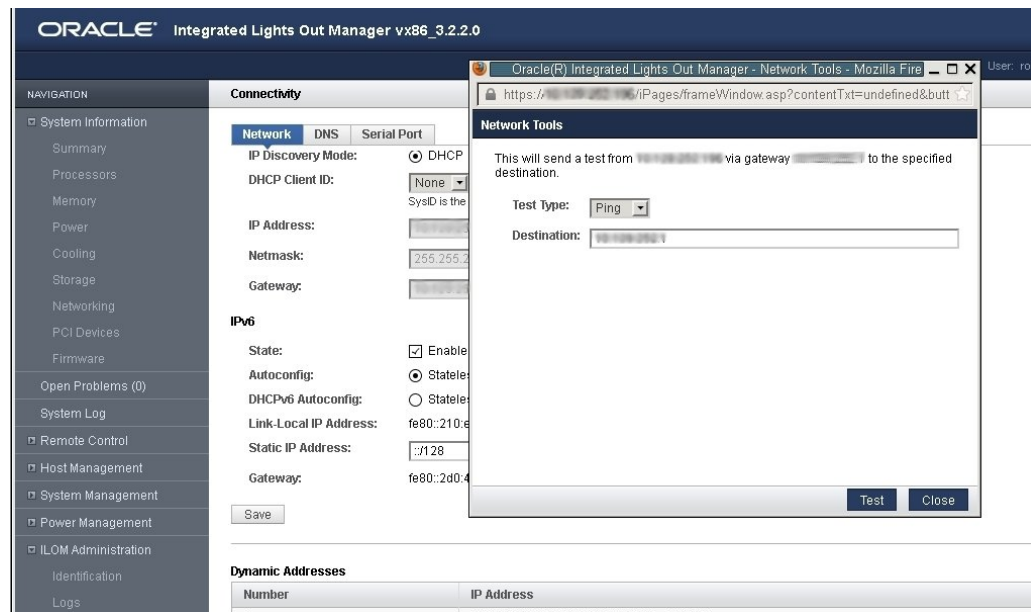
Commands:
cd
set
show
```

2. `set ping` または `set ping6` コマンドを使用して、ネットワークテストをデバイスから、次の表で指定されているネットワーク宛先に送信します。

プロパティ	プロパティの設定値	説明
ping	<code>set ping=<IPv4_address></code>	コマンドプロンプトで <code>set ping=</code> コマンドを入力し、続けて IPv4 テストの宛先アドレスを入力します。例:-> <code>set ping=192.168.10.106</code> Ping of 192.168.10.106 succeeded
ping6	<code>set ping6= <IPv6_address></code>	<code>set ping6=</code> コマンドのあとに、IPv6 テストの宛先アドレスを入力します。例:-> <code>set ping6=2001::db8:5dff:febe:5000</code> Ping of 2001::db8:5dff:febe:5000 succeeded

▼ Oracle ILOM Web インタフェースからの IPv4 または IPv6 ネットワーク構成のテスト

1. 「ILOM Administration」 > 「Connectivity」画面で、画面最下部の「Tools」ボタンをクリックします。
「Network Configuration Test」画面が表示されます。



2. 「Test Type」リストボックスから「Ping」または「Ping6」を選択します。
IPv4 ネットワーク構成には Ping テストを選択します。IPv6 ネットワーク構成には Ping6 テストを選択します。
3. 「Destination」フィールドに IPv4 または IPv6 テストの宛先アドレスを入力し、「Test」をクリックします。
テストが成功した場合は、「Network Configuration Test」画面内の「Destination」フィールドの下に「Ping of *ip_address* succeeded」というメッセージが表示されます。

▼ Oracle ILOM の終了

- Oracle ILOM セッションを終了するには、次の手順を実行します。
 - Oracle ILOM CLI から、CLI プロンプトで「exit」と入力します。
 - Oracle ILOM Web インタフェースで、画面の右上隅にある「Log Out」ボタンをクリックします。

サービスプロセッサ接続のトラブルシューティング

このセクションでは、Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) に関して発生する可能性のある次の 2 つの問題の対処方法を示します。

- Oracle ILOM SP が応答しなくなり、リセットが必要になる。
- システム管理者が root アカウントのパスワードを忘れてしまったため、復旧する必要がある。

これらの問題の対処手順については、次の各セクションを参照してください。

- [64 ページの「Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット」](#)
- [65 ページの「SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット」](#)
- [65 ページの「root アカウントのパスワードの回復」](#)

▼ Oracle ILOM を使用したサービスプロセッサのリセット

- Oracle ILOM サービスプロセッサ (SP) が無応答になった場合は、次の方法のいずれかを使用してリセットします。

- **Oracle ILOM コマンド行インタフェース (CLI) から、reset /SP コマンドを入力します。**
- **Oracle ILOM Web インタフェースから、「Administration」 > 「Maintenance」 > 「Reset SP」の順にクリックします。**

注記 - Oracle ILOM SP をリセットすると、現在の Oracle ILOM セッションが切断されます。Oracle ILOM での作業を続行するには、再度ログインする必要があります。

▼ SP リセットスイッチを使用したサービスプロセッサのリセット

この手順は、Oracle ILOM SP が無応答になり、それを Oracle ILOM Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI を使用してリセットできない場合に使用します。

- **Oracle ILOM のリセットスイッチを使用して、Oracle ILOM SP を手動でリセットします。**

SP リセットスイッチの位置を確認するには、[17 ページの「バックパネルの機能」](#)を参照してください。

▼ root アカウントのパスワードの回復

必要な場合、システム管理者は、事前構成された Oracle ILOM のデフォルトのパスワードを使用して、事前構成された Oracle ILOM のローカルの root アカウントまたはローカルの root アカウントのパスワードを回復できます。

root アカウントのパスワードを回復するには、Oracle ILOM に対するローカルのシリアル管理ポート (SER MGT) 接続が必要です。また、Oracle ILOM で Physical Presence State が有効になっている場合 (デフォルト)、ユーザーは自分がサーバーの前にいることを証明する必要があります。

root アカウントのパスワードを回復するには、これらの手順を実行します。

1. **Oracle ILOM に対してローカルのシリアル管理接続を確立し、デフォルトのユーザーアカウントを使用して Oracle ILOM にログインします。例:**

```
SUNSP-000000000 login: default
```

```
Press and release the physical presence button
```

Press return when this is completed...

2. サーバーの前に自分がいることを証明します。

物理的にサーバーの前にいることを証明するには、サーバーの前面にあるロケータボタンを押します。

ロケータボタンの位置については、[13 ページの「フロントパネルの機能」](#)を参照してください。

3. シリアルコンソールに戻り、Enter キーを押します。

パスワードプロンプトが表示されます。

4. デフォルトのユーザーアカウントのパスワード defaultpassword を入力します。

5. アカウントのパスワードをリセットするか、または root アカウントを作成し直します。

Oracle System Assistant を使用したソフトウェアおよびファームウェアの設定

このセクションでは、Oracle System Assistant の起動、Oracle System Assistant の使用準備、およびオペレーティングシステムのインストールに向けたサーバー準備の手順を示します。

説明	リンク
Oracle System Assistant の起動	67 ページの「Oracle System Assistant の起動」
Oracle System Assistant ネットワークインタフェースの構成 (1 回のみ)	71 ページの「Oracle System Assistant のネットワークの構成」
オペレーティングシステムをインストールする前に必要なタスクのリストを完了します。	72 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」

Oracle System Assistant の起動

このセクションでは Oracle System Assistant を起動する方法について説明します。

Oracle System Assistant はシステムのソフトウェアとファームウェアの設定に適したアプリケーションです。Oracle System Assistant は、ほとんどの Oracle x86 サーバーの初期サーバーセットアップおよび保守作業を行うための組み込みのタスクベースのサーバープロビジョニングツールです。Oracle System Assistant を使用すると、サポートされている Oracle Solaris、Linux、Oracle VM、または Windows オペレーティングシステムのインストール、サーバーの最新ソフトウェアリリースへの更新、サーバーハードウェアの構成を行うことができます。

説明	リンク
Oracle ILOM から Oracle System Assistant を起動します。	68 ページの「Oracle ILOM Web インタフェースを使用した Oracle System Assistant の起動」
Oracle System Assistant をローカルで起動します。	70 ページの「Oracle System Assistant のローカルでの起動」

関連項目

- Oracle System Assistant の詳細は、『[Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド](http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs)』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)を参照してください。

▼ Oracle ILOM Web インタフェースを使用した Oracle System Assistant の起動

1. サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。

サーバーがスタンバイ電源モードの場合は、サービスプロセッサの OK インジケータがオンになり、電源/OK インジケータがゆっくり点滅します。これらのインジケータの位置については、[13 ページの「フロントパネルの機能」](#)を参照してください。

2. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。

ブラウザのアドレスフィールドにサーバーの SP の IP アドレスを入力します。Oracle ILOM のネットワークアクセスを設定していない場合は、[51 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。

「System Summary」画面が表示されます。

The screenshot shows the Oracle ILOM web interface. The top navigation bar includes 'About', 'Refresh', and 'Logout'. The main content area is titled 'Summary Information' and contains the following sections:

- General Information:** A table listing system details.

System Type	Rack Mount
Model	System13
QPart ID	Q10542
Part Number	X4-4-PPN
Serial Number	X4-4-PSN
Component Model	X4-4
Component Part Number	X4-4-PPN
Component Serial Number	System13
System Identifier	-
System Firmware Version	x86_3.2.2.0
Primary Operating System	Not Available
Host Primary MAC Address	00:10:e0:2e:45:76
ILOM Address	View Details
ILOM MAC Address	00:10:E0:2E:45:7A
- Actions:** A panel with controls for Power State (ON/OFF), Locator Indicator (ON/OFF), Oracle System Assistant (Launch), System Firmware Update (Update), and Remote Console (Launch).
- Status:** A table showing the overall status and details of various subsystems.

Subsystem	Status	Details	Inventory
Processors	OK	Processor Architecture: x86 64-bit Processor Summary: Four Intel Xeon Processor E7 V2 Series	Processors: 4 / 4 (Installed / Maximum)
Memory	OK	Installed RAM Size: 256 GB	DIMMs: 32 / 96 (Installed / Maximum)
Power	OK	Permitted Power Consumption: 1607 watts Actual Power Consumption: 403 watts	PSUs: 2 / 2 (Installed / Maximum)
Cooling	OK	Intel Air Temperature: 23 °C Exhaust Air Temperature: 25 °C	Chassis Fans: 6 / 6 (Installed / Maximum) PSU Fans: Not Supported
Storage	Not Available	Installed Disk Size: Not Available Disk Controllers: Not Available	Internal Disks: 6 / 6 (Installed / Maximum)
Networking	OK		Ethernet NICs: 4 (Installed)

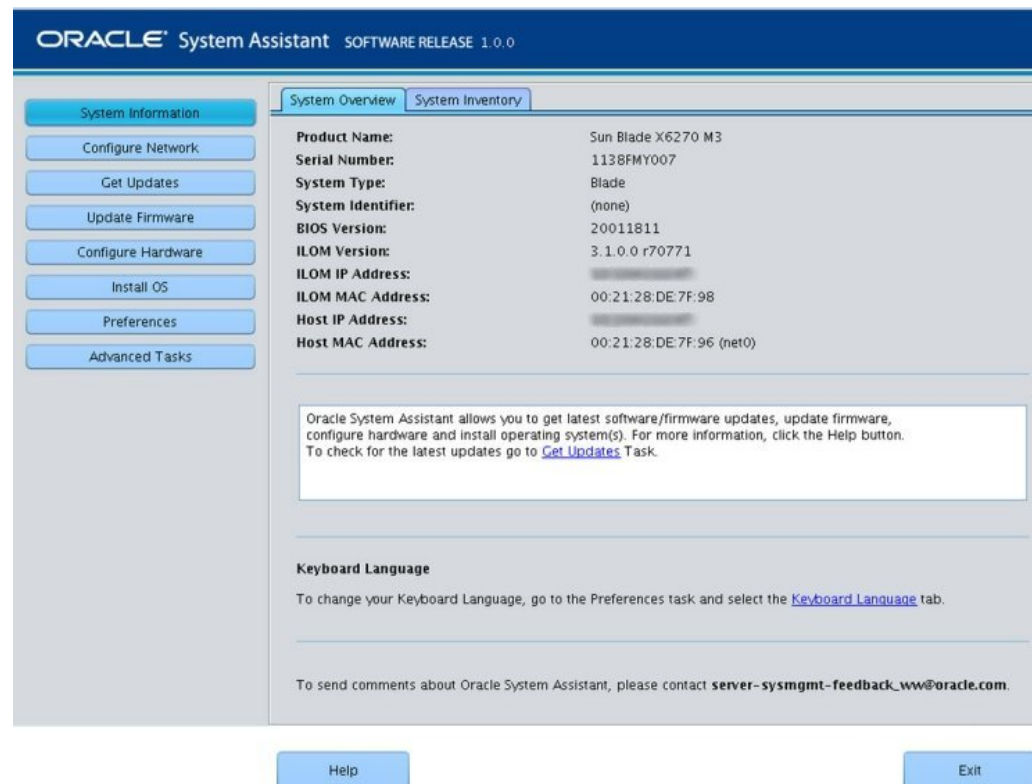
3. 右上パネルにある Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。

Oracle System Assistant を起動する際、サーバーがスタンバイ電源モードではなくフル電源になっている場合、最初にホストをシャットダウンするよう求められます。129 ページの「[Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する](#)」を参照してください。ホストの電源が切断されてから、この手順を続行してください。

4. Oracle System Assistant の起動を続行するには、「Yes」をクリックします。

サーバーがブートします。これには数分かかる場合があります。

- サーバーの電源が投入されます。
- Oracle System Assistant アプリケーションがブートします。
- Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



参照 ■ [73 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」](#)

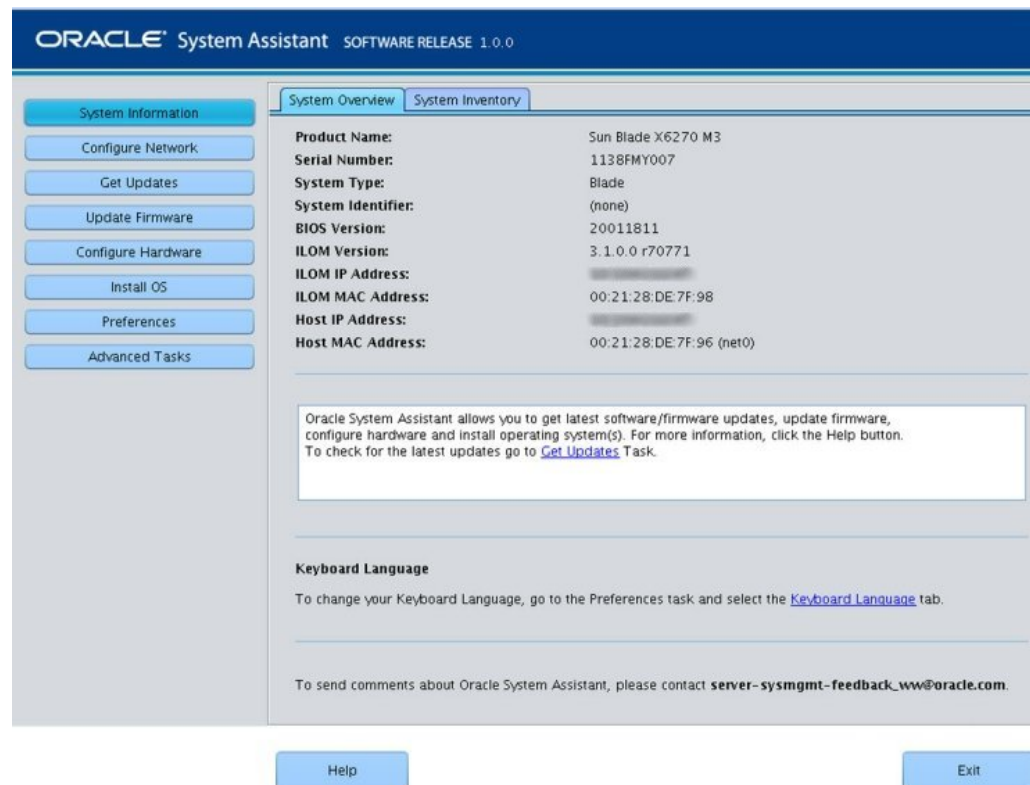
▼ Oracle System Assistant のローカルでの起動

始める前に Oracle System Assistant をローカルで起動するには、物理的にサーバーの前にいる必要があり、かつ VGA モニター、USB キーボード、および USB マウスをシステムに接続する必要があります。

1. サーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認します。
電源/OK インジケータがゆっくり点滅していることを確認します。インジケータの位置については、[13 ページの「フロントパネルの機能」](#)を参照してください。
2. サーバーにローカルで接続します。
[53 ページの「ローカルのシリアル接続を使用して Oracle ILOM にログインする」](#)を参照してください。
3. フロントパネルの電源ボタンを押して離し、サーバーの電源をフル電源モードで投入します。
サーバーがブートし、モニターに POST メッセージが表示されます。
4. Oracle System Assistant の POST メッセージが表示されたら、F9 ファンクションキーを押します。



Oracle System Assistant がブートして Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。



参照 ■ 73 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」

▼ Oracle System Assistant のネットワークの構成

このセクションでは、Oracle System Assistant を使用できるようにネットワーク接続を構成する方法について説明します。

Oracle System Assistant は、起動すると、Net 0 上で DHCP に接続しようとします。

- Net 0 が DHCP 対応ネットワークに接続されていて、自動構成が成功した場合、それ以上の構成は必要ありません。

- Net 0 が DHCP 非対応ネットワークに接続されている場合は、ネットワーク接続を構成する必要があります。

これらの設定は通常、はじめて Oracle System Assistant を使用するとき 1 回設定する必要があります。

1. **67 ページの「Oracle System Assistant の起動」**の説明に従って Oracle System Assistant を起動します。
2. 「Network Configuration」タブを選択します。
3. ネットワーク構成の詳細を入力します。

詳細は、『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)の「ネットワークインタフェース設定を構成する (Oracle System Assistant)」を参照してください。

OS インストールのためのサーバーの準備

このセクションでは、オペレーティングシステムのインストール用のサーバーを準備する方法について説明します。

オペレーティングシステムをインストールするには、その前にいくつかのタスクを完了する必要があります。これには、次のものが含まれます。

- ファームウェアおよびソフトウェアの更新の入手
- ファームウェアの更新のインストール
- Oracle ILOM のネットワークアドレスの構成
- RAID の構成

これらが完了したら、オペレーティングシステムをインストールできます。

これらは、Oracle System Assistant か、またはその他の方法を使用して実行できます。Oracle System Assistant を使用することをお勧めします。

- Oracle System Assistant を使用するには、**73 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」**を参照してください。
- その他の方法を使用して OS インストール用のサーバーを準備するには、次を参照してください。

『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)

注記 - Oracle Solaris インストールの場合、Oracle System Assistant は、推奨されるドライバまたはツールをインストールしません。Linux、Oracle VM、および Windows の場合、Oracle System Assistant は、推奨されるドライバやツールのうち、その特定のオペレーティングシステムまたは仮想マシンソフトウェアでサポートされているものをインストールします。Oracle System Assistant を使用してオペレーティングシステムをインストールするときにインストール可能なオプションソフトウェアの一覧については、Oracle System Assistant の ReadMe を参照してください。

関連項目

- [67 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)
- [73 ページの「OS インストールのためのサーバーの準備」](#)

▼ OS インストールのためのサーバーの準備

1. [67 ページの「Oracle System Assistant の起動」](#)の説明に従って Oracle System Assistant を起動します。
2. Oracle System Assistant を使用して、次の表に示されているタスクを実行します。
Oracle System Assistant の詳細は、[『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』](#)
(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)または Oracle System Assistant のヘルプを参照してください。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面	詳細情報
1	Oracle System Assistant ネットワーク接続を設定します。	Network Configuration	71 ページの「Oracle System Assistant のネットワークの構成」
2	Oracle System Assistant で使用される最新のソフトウェアとファームウェアの更新を入手します。	Get Updates	117 ページの「サーバーファームウェアとソフトウェアの入手」
3	Oracle ILOM、BIOS、ディスクエクスパンダ、HBA ファームウェアを必要に応じて更新します。入手可能なサポートされている最新の BIOS およびファームウェアのバージョンを使用することをお勧めします。	Update Firmware	123 ページの「更新のインストール」
4	Oracle ILOM を構成します。これはサービスプロセッサにアクセスするための準備を支援します。	「Configure Hardware」 > 「Service Processor Configuration」	51 ページの「Oracle ILOM への接続」 これはすでに完了している場合があります。
5	RAID を構成します。Oracle System Assistant RAID 構成ユーティリティを	「Configure Hardware」 > 「RAID Configuration」	77 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」 。

手順	タスク	Oracle System Assistant の画面	詳細情報
	使用して、ディスク上にボリュームを作成します。 注意 - データ損失。インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。		
6	Oracle System Assistant の「Install OS」ウィザードを使用して、オペレーティングシステムをインストールします。サポートされているオペレーティングシステムには、Oracle Solaris、Linux、Windows、または Oracle VM ソフトウェアが含まれます。 注意 - データ損失。インストール済みの OS を含むディスクでは、このオプションを使用しないでください。	Install OS	詳細は、オペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

OS インストールのためのストレージドライブの構成

このセクションでは、オペレーティングシステムのインストール用のサーバーブートディスクを準備する方法について説明します。

説明	リンク
ストレージドライブ構成オプションについて学習します。	75 ページの「ストレージドライブ構成」
Oracle System Assistant を使用して、サーバーストレージドライブを RAID ボリュームに構成します。	77 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」
BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用してサーバーの複数のストレージドライブで RAID ボリュームを構成します。	84 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用した RAID の構成」
オペレーティングシステムインストールと更新タスクについて学習します。	97 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」

関連項目

- ホストバスアダプタ (HBA) ドキュメントコレクション (<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/oracle-storage-networking-190061.html>)

ストレージドライブ構成

サーバーには、Oracle Storage 12 Gb/s SAS PCIe RAID 内蔵 HBA (7110116、7110117) が搭載されています。オペレーティングシステム (OS) をインストールしてブートするには、この HBA には RAID アレイが必要です。

オペレーティングシステムのインストール用のドライブを準備するには、次の手順を実行します。

インストール済みのオペレーティングシステム: インストール済みの OS を含むシステムでは、ドライブは工場出荷時に構成されます。次のセクションのいずれかに進みます。

- 99 ページの「インストール済みの Oracle Solaris OS の構成」
- 111 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」
- 105 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成」

新しいオペレーティングシステム: OS をインストールするには、その OS をインストールするドライブが RAID ボリュームの一部であることを確認し、そのアレイをブート可能なように構成する必要があります。

RAID を使用しない場合は、ドライブを RAID 0 ボリュームとして構成する必要があります。

注記 - Oracle から出荷されたドライブには RAID 0 ボリュームが事前にインストールされている可能性があります。そのボリュームはブート可能でない可能性があります。ドライブに OS をインストールしようとする前に、そのドライブにブート可能アレイが含まれていることを確認してください。

RAID 構成をチェックしてドライブを構成するには、次のようにします。

- Oracle System Assistant を使用するには、77 ページの「Oracle System Assistant を使用した RAID の構成」を参照してください
- BIOS 構成ユーティリティを使用するには、84 ページの「BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成」を参照してください

次の表に、サポートされている RAID レベルごとの要件の一覧を示します。

RAID レベル	必要なディスク数	インストールツール
0	1	Oracle System Assistant または BIOS
1	2	Oracle System Assistant または BIOS
5	3	Oracle System Assistant または BIOS
6	3	BIOS
10	4	Oracle System Assistant または BIOS
50	6	BIOS
60	6	BIOS

ブート可能な RAID ボリュームを作成したら、OS をインストールします。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある対応するオペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。

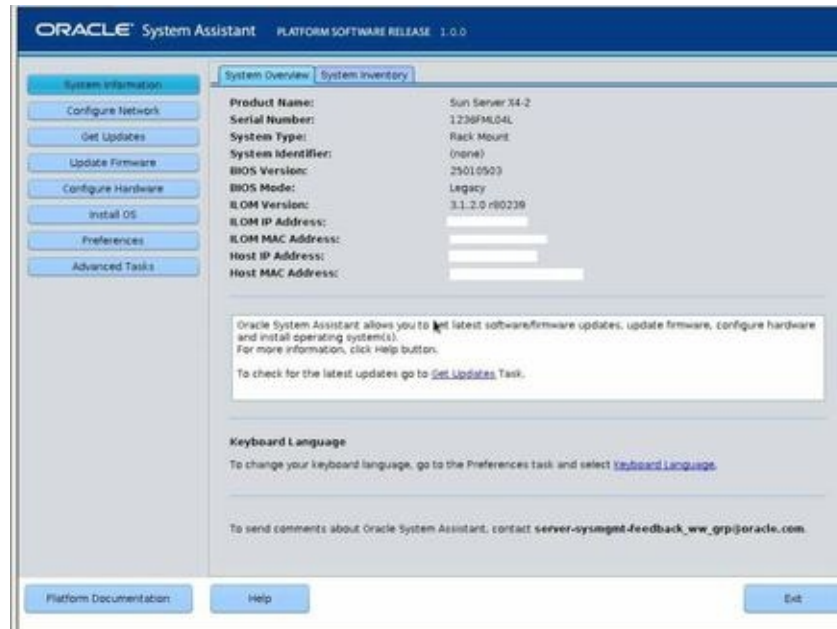
▼ Oracle System Assistant を使用した RAID の構成

RAID ボリュームとして構成し、それをブート可能にすることによって OS インストール用のサーバーハードドライブを準備するには、Oracle System Assistant を使用します。

1. Oracle System Assistant を起動します。

67 ページの「[Oracle System Assistant の起動](#)」を参照してください。

Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。



2. 「System Overview」画面で、BIOS モードが正しいブートモード (UEFI またはレガシー BIOS) に設定されていることを確認します。

注記 - RAID 構成に使用される BIOS ブートモードは、オペレーティングシステムをインストールするときに使用するモードと一致している必要があります。さらに、サポートされているすべてのオペレーティングシステムが UEFI ブートモードをサポートしているわけではありません。UEFI ブートモードをサポートしているオペレーティングシステムのリストについては、50 ページの「UEFI BIOS」を参照してください。

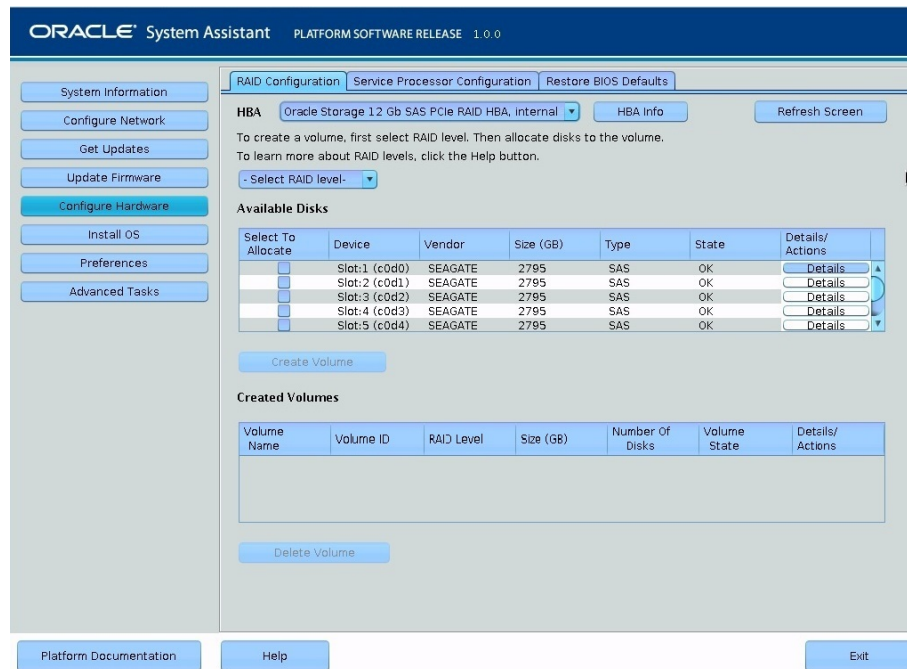
UEFI ブートモードとレガシーブートモードを切り替えるには、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

3. 「Configure Hardware」ボタンをクリックし、「RAID Configuration」タブを選択します。

「RAID Configuration」画面が表示されます。「Created Volumes」リストに、既存のすべてのボリュームが表示されます。

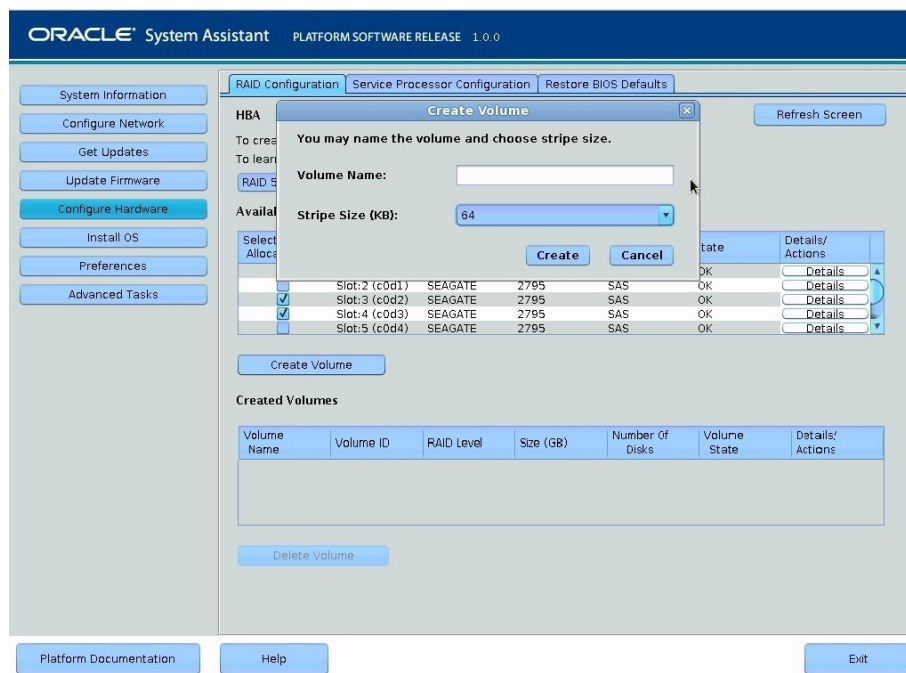
注記 - 一部のドライブは、RAID 0 が事前にインストールされた状態で出荷されます。ドライブがすでに RAID ボリュームとして構成されていて、その構成を変更しない場合は、手順 8 に進むことができます。

4. 「HBA」リストボックスで、「Oracle Storage 12 Gb SAS PCIe RAID HBA, Internal」を選択します。



5. 「Select RAID Level」リストボックスで、目的の RAID レベルを選択します。
Oracle System Assistant は、RAID 0、RAID 1、RAID 5、および RAID 10 をサポートしています。
6. 「Available Disks」表で、RAID ボリュームに追加するストレージドライブを選択し、「Create Volume」ボタンをクリックします。

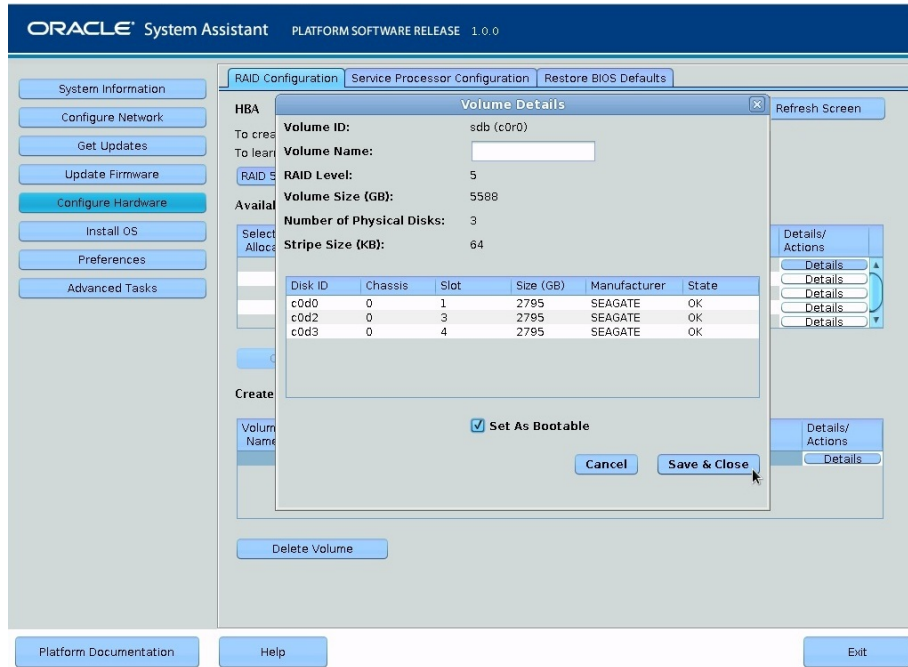
「Create Volume」ダイアログボックスが表示されます。



7. 「Create Volume」ダイアログの情報を入力します。
 - a. (オプション) ボリューム名を入力します。
 ボリュームに名前を付けない場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。
 - b. ボリュームの「Stripe Size」を選択するか、またはデフォルトのストライプサイズを受け入れます。
 - c. 「Create」をクリックします。
 「Creating RAID Volume」情報ボックスが表示されます。
 ボリュームが作成されると、そのボリュームは「Created Volumes」表に表示されます。
8. そのボリュームに OS をインストールする予定がある場合は、次の手順を使用してボリュームをブート可能として設定します。

- a. 「Created Volumes」表の「Details/Actions」列で、ブート可能として設定するボリュームの「Details」ボタンをクリックします。

「Volume Details」ダイアログボックスが表示されます。

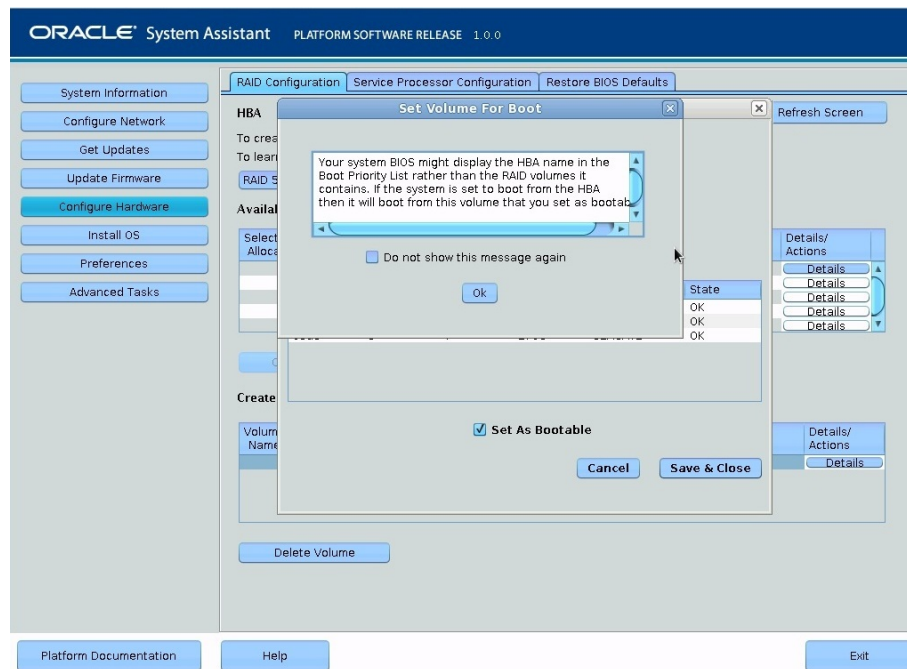


- b. (オプション) 「Volume Name」フィールドで、ボリューム名を入力または変更します。

前にボリューム名を入力しなかった場合、「Volume Details」ダイアログボックスでは、入力する2度目の機会が与えられます。前にボリューム名を入力した場合は、それをここで変更できますが、その名前を完全に削除することはできません。

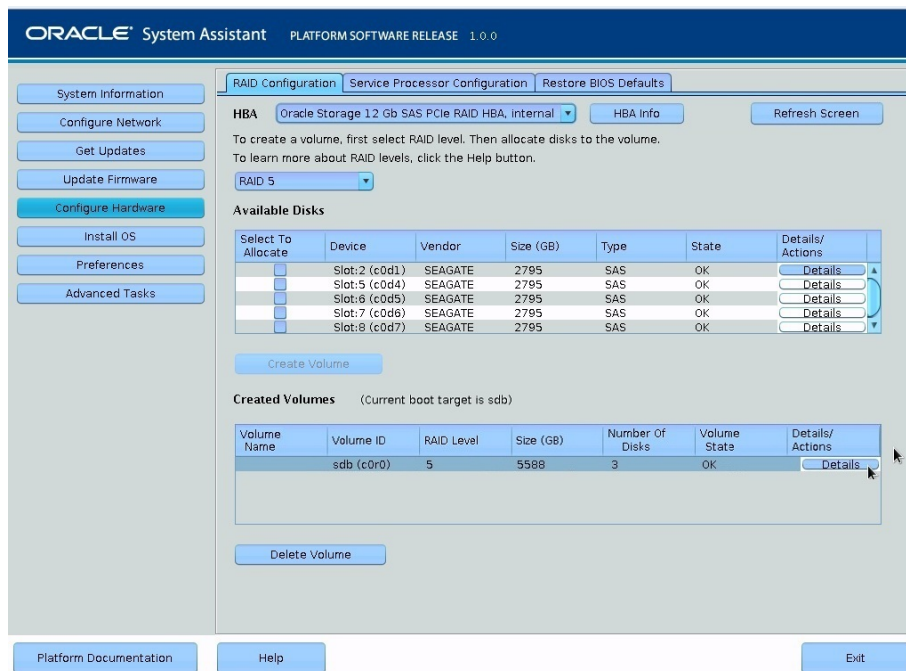
注記 - ボリュームに名前を付けることはオプションです。ボリュームに名前を付けない場合、Oracle System Assistant は名前のないボリュームを作成します。さらに、ボリューム名の変更が必要になった場合は、「Created Volumes」表の「Details」ボタンをクリックしていつでも変更できますが、ボリューム名が割り当てられたあとにそれを削除することはできません。

- c. 「Set As Bootable」 チェックボックスを選択します。
- d. 「Save & Close」 をクリックします。
「Set Volume For Boot」 確認ダイアログが表示されます。



- e. 「OK」 をクリックします。

「RAID Configuration」画面が表示され、RAID ボリュームが現在のブートデバイスとして一覧表示されます。



9. 1つ以上のディスクをグローバルホットスペアとして指定するには、次の手順を実行します。
 - a. 「Available Disks」表の「Details/Actions」列で、グローバルホットスペアとして設定するディスクの「Details」ボタンをクリックします。
「Disk Details」ダイアログボックスが表示されます。

- b. 「Set as Hot Spare」チェックボックスを選択します。

注記 - 最大 256 個のホットスペアを作成できます。

- c. 「Save」をクリックします。
「Disk Details」ダイアログボックスが閉じます。

10. ボリュームを削除するには、次の手順を実行します。

- a. 「Created Volumes」表で、削除するボリュームを選択します。
 - b. 「Delete Volume」 ボタンをクリックします。
11. 次のいずれかを実行します。
- その他のいずれかの Oracle System Assistant タスクを選択するには、左側のパネルメニューで対応するボタンをクリックします。たとえば、RAID を構成したあとに「Install OS」タスクを選択し、オペレーティングシステムのインストールを実行することもできます。
 - Oracle System Assistant を終了するには、「Exit」をクリックします。
- 参照 ■ [97 ページの「オペレーティングシステムおよびドライバの設定」](#)

BIOS RAID 構成ユーティリティを使用した RAID の構成

BIOS RAID 構成ユーティリティは、UEFI ブートモードおよびレガシーブートモードに設定されたサーバーでの RAID の構成をサポートしています。ブートモードごとに個別のユーティリティが用意されています。

注記 - 一部のオペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアでは、レガシーブートモードのみがサポートされています。

次の手順のいずれかを使用して RAID を構成します。

- [84 ページの「UEFI ブートモードでの RAID の構成」](#)
- [94 ページの「レガシーブートモードでの RAID の構成」](#)

▼ UEFI ブートモードでの RAID の構成

1. BIOS へのワンタイムブート用にサーバーを構成します。
 - a. Oracle ILOM Web インタフェースにアクセスします。
 - b. 「Host Management」 > 「Host Control」 に移動します。
 - c. ドロップダウンリストから「BIOS」を選択し、「Save」を選択します。

サーバーが、次回のブートで BIOS にブートするように構成されます。

2. 「**Summary**」ウィンドウから、「**Remote Console**」>「**Launch**」の順に選択し、ダイアログに回答します。

リモートコンソール画面が表示されます。

3. ホストの電源を投入するか、またはホストをリセットします。

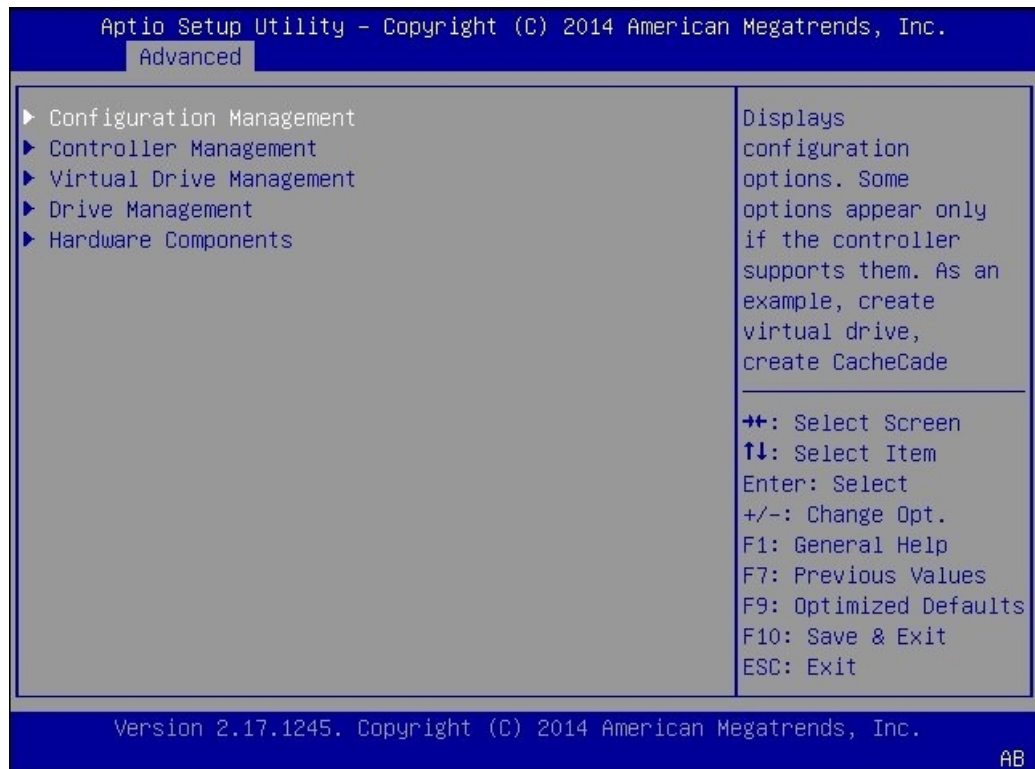
たとえば、ホストをリセットするには、次のいずれかを行います。

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押して (約 1 秒) ホストの電源を切断したあと、電源ボタンをもう一度押して電源を再投入します。
- Oracle ILOM Web インタフェースから、「**Host Management**」>「**Power Control**」の順に選択したあと、「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- Oracle ILOM CLI から、「**reset /System**」と入力します。

BIOS 設定ユーティリティーが表示されます。

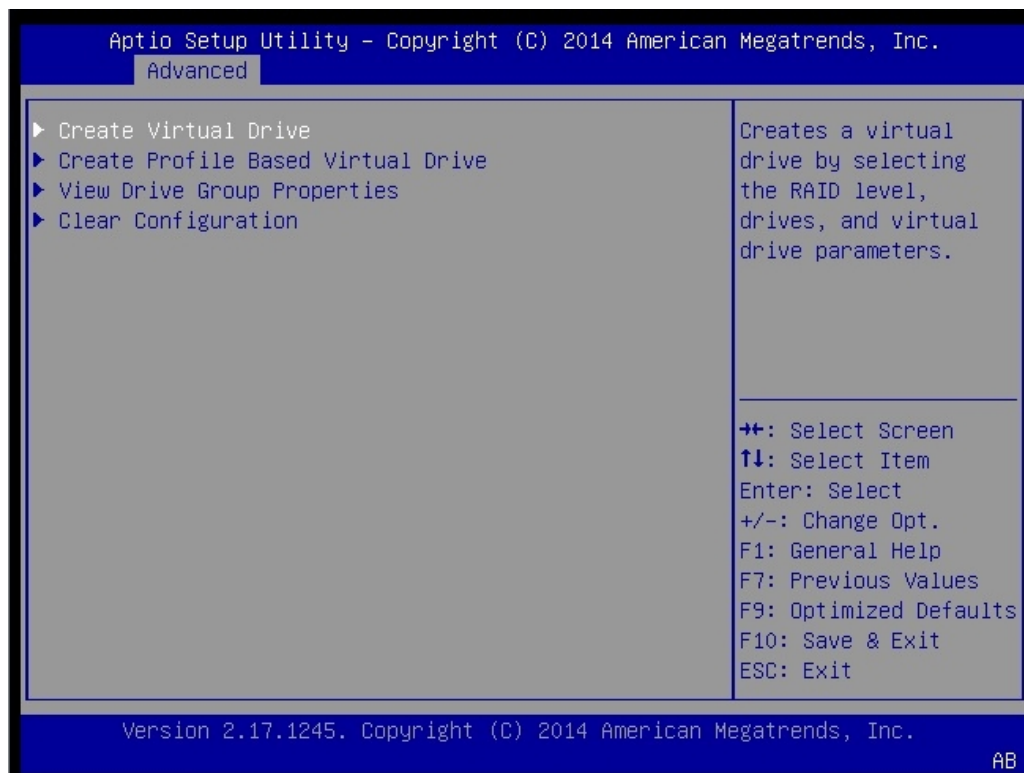
4. 「**Advanced**」タブに移動して「**LSI MegaRAID Configuration Utility <LSI MegaRAID 9361-8i>**」を選択し、Enter キーを押します。

次の画面が表示されます。



5. 「Configuration Management」を選択し、「Enter」を選択します。

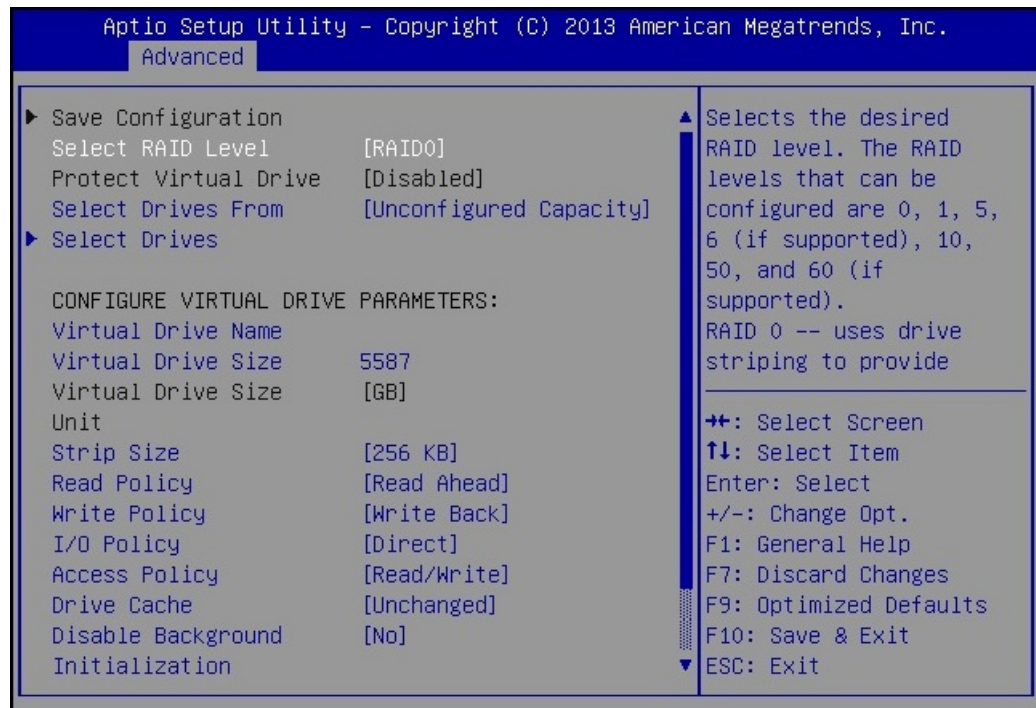
次の画面が表示されます。



6. 「Create Virtual Drive」 > 「Advanced」の順に選択し、Enter キーを押します。

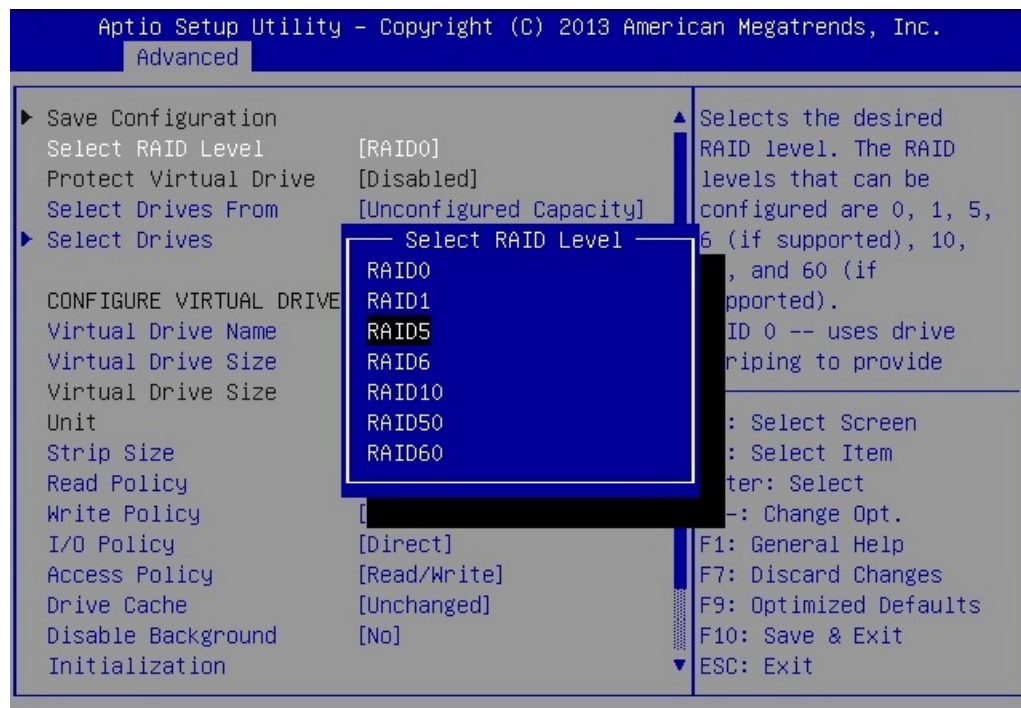
または、RAID 構成ウィザードを表示する「Create Virtual Drive」オプションを選択することもできます。「Create Virtual Drive」画面では、仮想ドライブの詳細設定を構成できません。

「Create Virtual Drive」 > 「Advanced」 画面が表示されます。



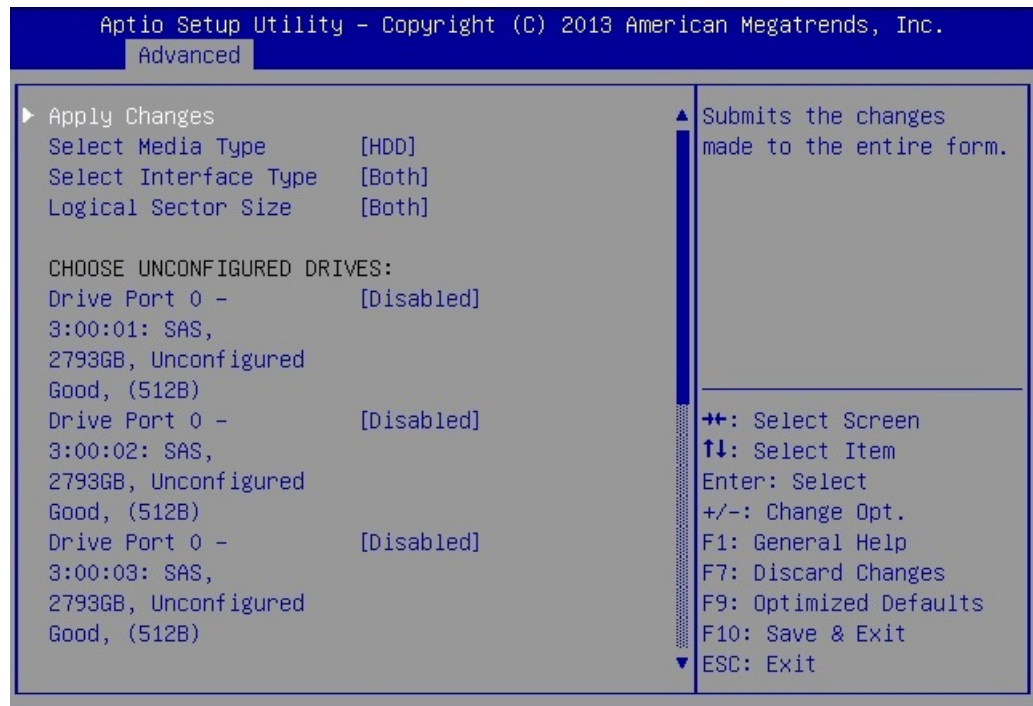
7. 「Select RAID Level」 オプションを選択し、Enter キーを押します。

「Select RAID Level」ダイアログボックスが表示されます。

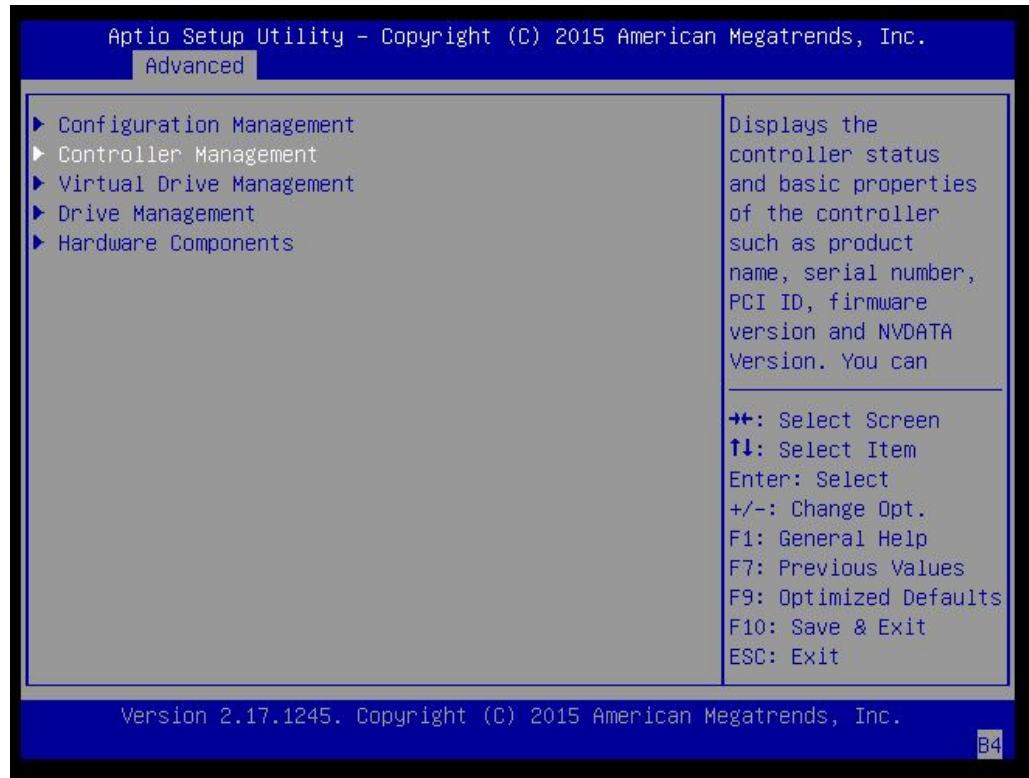


8. 目的の RAID レベルを選択し、Enter キーを押します。
9. 「Select Drives」オプションを選択し、Enter キーを押します。

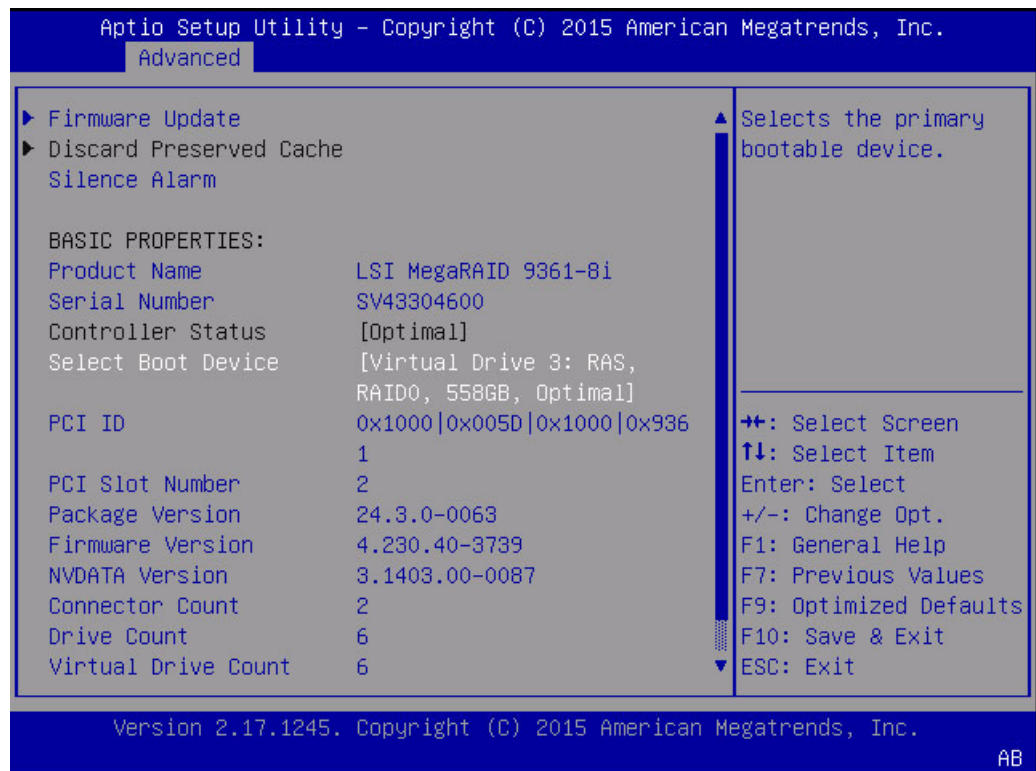
「Drive Selection」画面が表示されます。



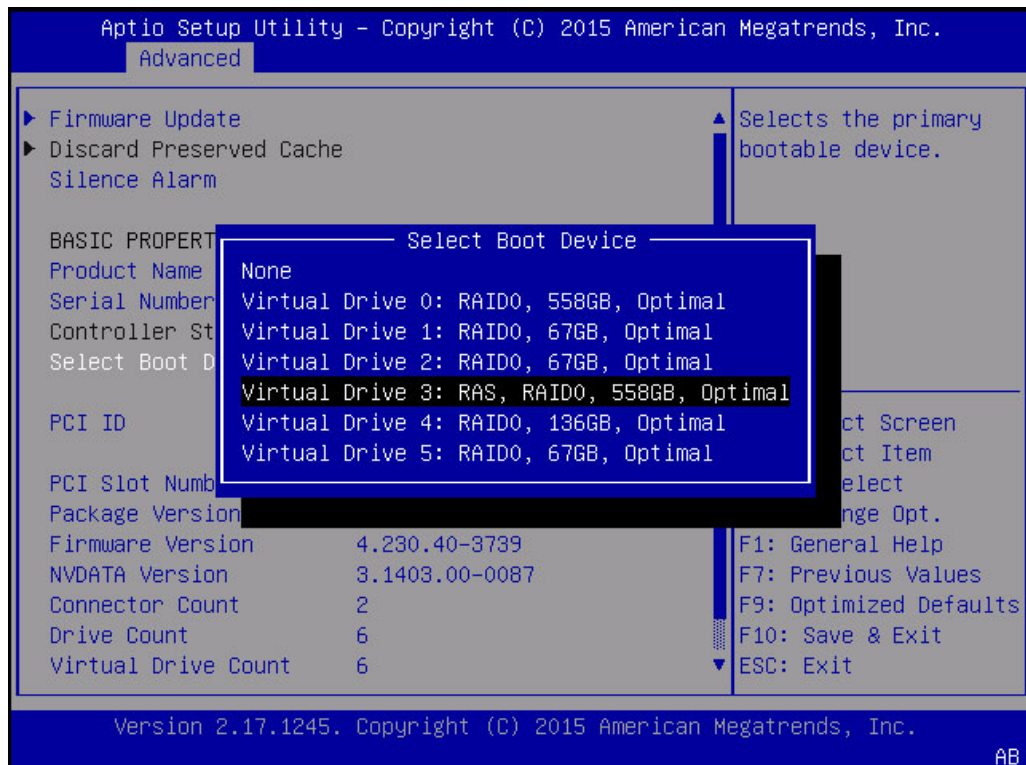
10. LSI MegaRAID 画面の上部から、「Controller Management」を選択します。



11. 「Drive Selection」画面で、メディアタイプ、インタフェースタイプ、および RAID 構成に含めるドライブを選択します。

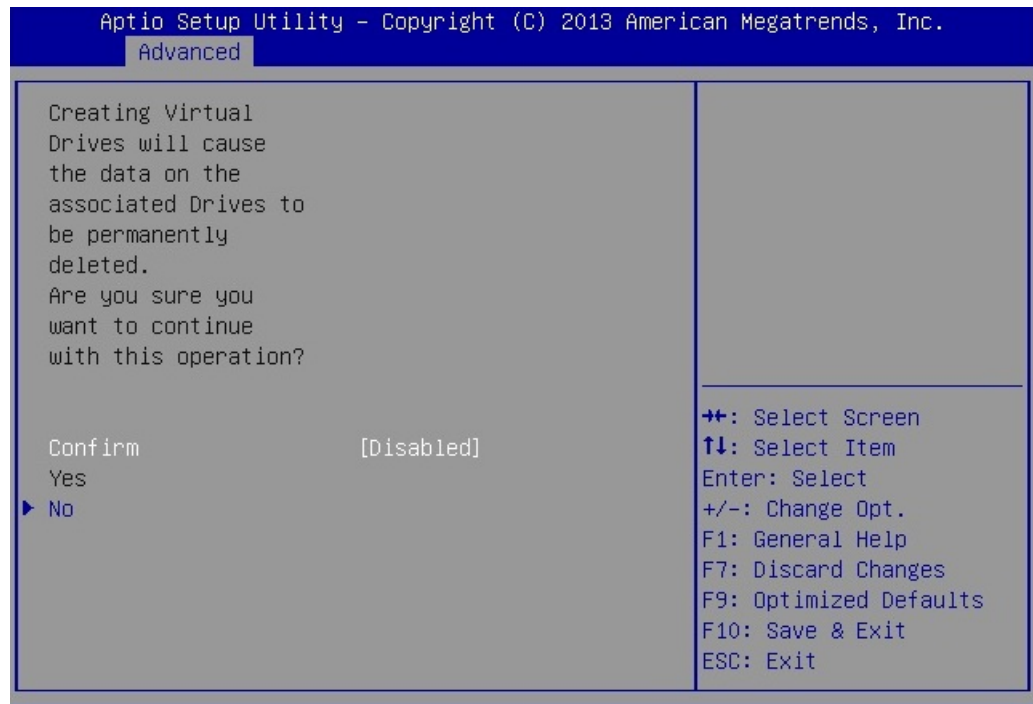


12. ドロップダウンリストから、ドライブを選択します。



13. 「Apply Changes」を選択し、Enter キーを押します。
RAID 構成の確認画面が表示されます。
14. 「Save Configuration」を選択し、Enter キーを押します。

RAID 構成の確認画面が表示されます。



15. RAID 構成を確認するには、「Confirm」を選択してから「Yes」を選択します。
確認画面が表示されます。
16. 「OK」を選択して続行します。
17. F10 キーを押して変更を保存し、終了します。
これにより、RAID の構成が完了します。

▼ レガシーブートモードでの RAID の構成

この手順では、HBA ファームウェア内に存在する BIOS RAID 構成ユーティリティーを使用して RAID アレイを構成し、それをブート可能にします。この手順は、次のいずれかの条件の下で使用します。

- Oracle System Assistant がシステムにインストールされていないか、またはそれを RAID の構成に使用したくない場合。
- Oracle System Assistant ではサポートされていない RAID レベル (RAID 6、50、60 など) をインストールする場合。

注記 - Oracle System Assistant は、Oracle Storage 12 Gb/s SAS PCIe RAID 内蔵 HBA で RAID 0、1、5、および 10 をサポートしています。

1. ホストの電源を投入するか、またはホストをリセットします。

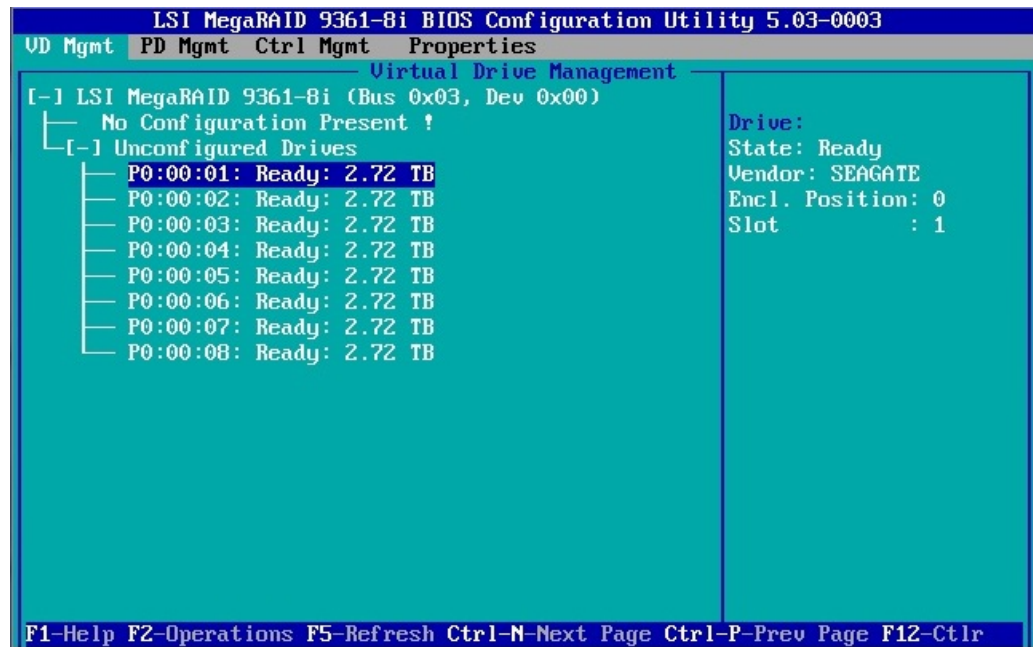
たとえば、ホストをリセットするには、次のいずれかを行います。

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルにある電源ボタンを押して (約 1 秒) ホストの電源を切断したあと、電源ボタンをもう一度押して電源を再投入します。
- Oracle ILOM Web インタフェースから、「**Host Management**」 > 「**Power Control**」の順に選択したあと、「**Select Action**」リストボックスから「**Reset**」を選択します。
- Oracle ILOM CLI から、「**reset /System**」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。

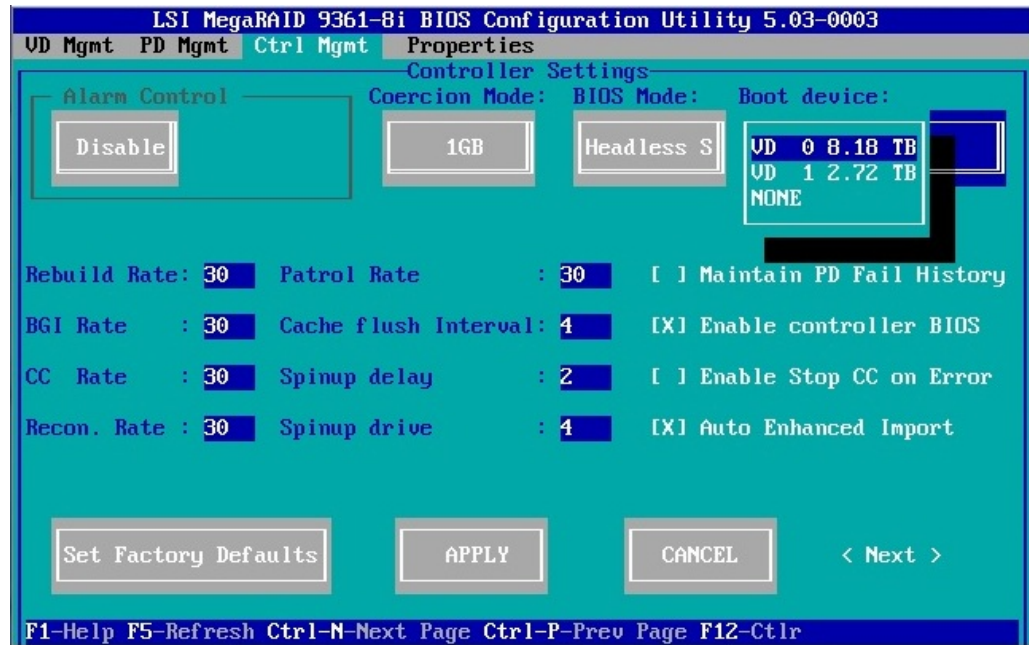
2. BIOS による POST の実行中に、**Press <Ctrl><R> to run the MegaRAID Configuration Utility** というプロンプトが表示されたらすぐに、**Ctrl+R** のキーの組み合わせを押して LSI MegaRAID ユーティリティにアクセスします。

「Virtual Drive Management」画面が表示されます。



3. 1つ以上の RAID ボリューム (仮想ドライブ) を作成します。
<http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/index.aspx> にある『MegaRAID SAS ソフトウェアユーザーガイド』の手順を参照してください。
4. Ctrl-N を 2 回押して「Ctrl Mgmt」メニューに移動します。

「Controller Settings」画面が表示されます。



5. 下矢印を使用して「Boot Device」フィールドに移動します。
6. ブート可能にする仮想ドライブを選択し、Enter キーを押します。
7. 「Apply」ボタンに移動し、Enter キーを押します。
この手順の実行の詳細は、<http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/index.aspx> にある『MegaRAID SAS ソフトウェアユーザーガイド』を参照してください。
8. Esc キーを押して LSI MegaRAID ユーティリティを終了します。

オペレーティングシステムおよびドライバの設定

インストール済みのオペレーティングシステム (OS) を構成するか、またはサーバーでサポートされている OS をインストールできます。次の表で、OS のインストールまたは構成に関する情報にアクセスする方法について説明します。

目的	使用するツールまたはドキュメント
インストール済みの OS を構成します	■ 99 ページの「インストール済みの Oracle Solaris OS の構成」 ■ 111 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」 ■ 105 ページの「インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成」
OS をインストールし、ドライバを更新します	対応するオペレーティングシステムのインストールガイドを参照してください。 ■ 『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Oracle Solaris Operating System』 ■ 『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Oracle VM Server』 ■ 『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Linux Operating Systems』 ■ 『Oracle Server X5-8 Installation Guide for Windows Operating Systems』

インストール済みの Oracle Solaris OS の構成

このセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステム (OS) (注文された場合) を構成する手順について説明します。

注記 - インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムのサポートされているバージョンに関する最新情報については、<http://www.oracle.com/goto/x5-8/docs-videos> にある『Oracle Server X5-8 プロダクトノート』を参照してください。

次の各セクションの手順を実行します。

手順	タスク	リンク
1	Oracle Solaris OS のインストール準備を行い、使用しているサーバー環境の構成ワークシートに記入します。	99 ページの「Oracle Solaris 構成の準備」
2	インストール済みの Oracle Solaris OS を構成します。	102 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
3	Oracle Solaris の再インストールまたは別のバージョンの Oracle Solaris をインストールします。	103 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール」
4	Oracle Solaris OS のドキュメントを検索します。	104 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Solaris 構成の準備

インストール済みの Oracle Solaris オペレーティングシステムの構成を開始する前に、Oracle Solaris OS 構成ワークシートに記入します。

Oracle Solaris OS 構成ワークシート

オペレーティングシステムの構成を開始する前に、次の表の構成ワークシートを使用して、必要な情報を収集します。システムの使用しているアプリケーションに適用される情報のみを収集する必要があります。

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
言語	OS で使用可能な言語のリストから選択します。	英語*
ロケール	使用可能なロケールのリストから地理的地域を選択します。	
端末	使用可能な端末タイプのリストから、使用している端末のタイプを選択します。	
ネットワーク接続	システムがネットワークに接続されているかどうか。	■ ネットワークに接続されている ■ ネットワークに接続されていない*
DHCP	システムで動的ホスト構成プロトコル (DHCP) を使用してネットワークインタフェースを設定できるかどうか。	■ はい ■ いいえ*
DHCP を使用しない場合は、ネットワークアドレスを入力します。	IP アドレス DHCP を使用しない場合は、システムの IP アドレスを入力します。 例: 192.168.100.1	
サブネット	DHCP を使用しない場合、システムはサブネットの一部かどうか。 そうである場合、サブネットのネットマスクは何か。 例: 255.255.255.0	255.255.0.0*
IPv6	このマシンで Ipv6 を有効にするかどうか。	■ はい ■ いいえ*
ホスト名	システムのホスト名を選択します。	
Kerberos	このマシンで Kerberos セキュリティーを構成しますか?	■ はい ■ いいえ* 「はい」の場合、この情報を収集します。 デフォルトレルム: 管理サーバー: 第 1 KDC: (オプション) 追加の KDC:
ネームサービス	ネームサービス 該当する場合は、このシステムのネームサービスを選択します。	■ NIS+ ■ NIS ■ DNS ■ LDAP ■ なし*
ドメイン名	システムが所属するドメインの名前を入力します。 DNS または NIS	
NIS+ および NIS	NIS+ または NIS を選択した場合、ネームサーバーを指定しますか、それともインストールプログラムに検索させますか。 NIS を選択した場合:	■ 指定する ■ 検索する*

インストール情報	説明または例	回答: デフォルト (*)
	■ NIS ドメインを指定する、または ■ NIS サーバーを指定するか検索するかを指定する。	
DNS	DNS を選択した場合、DNS サーバーの IP アドレスを入力します。少なくとも 1 つ以上の IP アドレスを入力する必要があります。最大で 3 つのアドレスを入力できます。 また、DNS クエリーを行う際に検索する DNS ドメインのリストを入力することもできます。	検索ドメイン: 検索ドメイン: 検索ドメイン:
LDAP	LDAP を選択した場合、LDAP プロファイルに関する情報を入力します。	プロファイル名: プロファイルサーバー: LDAP プロファイルにプロキシ認証レベルを指定する場合、次の情報を収集します。 プロキシバインド識別名: プロキシバインドパスワード:
デフォルトルート	デフォルトのルート IP アドレスを指定しますか、それとも OS インストールプログラムに検索させますか。 デフォルトルートは、2 つの物理ネットワーク間でトラフィックを転送するブリッジを提供します。IP アドレスは、ネットワーク上の各ホストを識別する一意の数字です。 次の選択肢があります。 ■ IP アドレスを指定できます。 指定された IP アドレスを使用して、<code>/etc/defaultrouter</code> ファイルが作成されます。システムのリブート時に、指定した IP アドレスがデフォルトのルートになります。 ■ OS インストールプログラムに IP アドレスを検出させることができます。 ただし、その場合は、システムがルーターのあるサブネット上にあり、そのルーターがルーター検索用のインターネット制御メッセージプロトコル (ICMP) を使用して自身を通知している必要があります。コマンド行インタフェースを使用する場合、システムのブート時にソフトウェアが IP アドレスを検出します。 ■ ルーターを使用していないか、現時点ではソフトウェアに IP アドレスを検出させたくない場合には、「None」を選択できます。 ソフトウェアは、リブート時に IP アドレスを自動的に検出しようとします。	■ 指定する ■ 検出する ■ なし*
タイムゾーン	デフォルトのタイムゾーンを指定する方法。	■ 地理的地域* ■ GM からの時差 ■ タイムゾーンファイル
root パスワード	システムの root パスワードを選択します。	

▼ インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成

99 ページの「[Oracle Solaris 構成の準備](#)」にある Oracle Solaris OS 構成ワークシートに記入したら、次の手順を使用してインストール済みの Oracle Solaris 11 OS を構成します。

始める前に ILOM に電源が投入され、ホストの電源が切断された状態でサーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認してください。

1. **Oracle ILOM Web インタフェースまたは CLI にログインします。**
51 ページの「[Oracle ILOM への接続](#)」を参照してください。
2. 次の方法のいずれかを使用して、ホストの電源を投入します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースから:**
 - ナビゲーションツリーから、「System Information」>「Summary」の順に選択します。
 - 「Summary」画面の「Actions」セクションで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
 - **Oracle ILOM CLI から、プロンプトから次のコマンドを入力します。**
-> **start /System**
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
Starting /System
サーバーがブートプロセスを開始します。
3. 次の方法のいずれかを使用して、リモートコンソールを起動します。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースから、ナビゲーションツリーで「Remote Control」>「Redirection」を選択します。次に、「Launch Remote Console」ボタンをクリックして、ビデオコンソールのリダイレクトを起動します。**
ホストがブートしたあと、「GRUB」メニューが表示されます。次に例を示します (インストール済みのバージョンが異なることがあります)。

GNU GRUB Version 1.99 ,5.11.0.175.1.0.0.24.2

Oracle Solaris 11.1 - Serial Port ttya
Oracle Solaris 11.1 - Graphics Adapter
 - **Oracle ILOM CLI の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。**
-> **start /HOST/console**

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

注記 - 「GRUB」メニューが表示されたら、5 秒以内に選択を行ってください。

4. 「GRUB」メニューから、次のいずれかを行います。
 - Oracle ILOM CLI を使用している場合は、上/下矢印キーを使用して「Serial Port (ttya)」オプションを選択し、Enter キーを押します。
 - Oracle ILOM リモートコンソール (または直接ビデオポート接続) を使用している場合は、上/下矢印キーを使用して「Graphics Adapter」オプションを選択し、Enter キーを押します。

注記 - 選択を行わない場合は、デフォルトで「Serial Port (ttya)」が使用されます。つまり、残りの OS 構成プロセスでは、システムがビデオポートではなく、シリアルポートに出力を送信します。

注記 - 必要に応じて、「GRUB」メニューで「e」と入力してブート前にコマンドを編集するか、または「c」と入力してコマンド行を開始できます。

5. Oracle インストーラの画面上のプロンプトに従って OS を構成します。
 システムおよびネットワーク設定の入力に役立てるために、[99 ページの「Oracle Solaris 構成の準備」](#)で収集された情報を使用します。
 これらの画面は、サーバーにネットワーク情報を割り当てるために選択した方法 (DHCP または静的 IP アドレス) によって異なる可能性があります。
 システム構成情報を入力すると、サーバーがブートプロセスを完了し、Oracle Solaris のログインプロンプトを表示します。
- 参照
- [103 ページの「Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール」](#)。
 - 登録を含む Oracle Solaris OS の使用については、[104 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」](#)を参照してください。

Oracle Solaris オペレーティングシステムの再インストール

Oracle Solaris 11 OS を再インストール、または別バージョンの Oracle Solaris OS をインストールする場合は、関連する Oracle Solaris インストールガイドを参照してください。

Oracle Solaris OS のソフトウェアは、次のサイトからダウンロードできます。

- Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/solaris11/downloads/index.html>

- Oracle Solaris パッチをダウンロードするには、次にアクセスしてください。

<https://support.oracle.com>

関連項目

- 102 ページの「インストール済みの Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムの構成」
- 104 ページの「Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント」

Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムのドキュメント

このセクションでは、Oracle Solaris 11 オペレーティングシステムに関する情報の参照先を示します。指定されている場合は、x86 システムに固有の手順に従ってください。

Oracle Solaris 11 Information Library は、次の場所にあります。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/solaris-11-192991.html>

Oracle Solaris 11 OS のインストールに関する詳細な手順については、『Oracle Solaris 11 システムのインストール』の「イントールの準備」および『Oracle Solaris 11 システムのインストール』の「メディアからブートする自動インストール」を参照してください。

パッチやその他の最新情報については、『Oracle Server X5-8 Product Notes』を参照してください。

パッチおよびパッチのインストール手順については、My Oracle Support Web サイト (<https://support.oracle.com>) にアクセスしてください。

インストール済みの Oracle VM 3.X ソフトウェアの構成

このセクションでは、サーバーにインストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成する方法について説明します。インストール済みのイメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

注記 - インストール済みの Oracle VM のサポートされているバージョンに関する最新情報については、「[Oracle VM Issues](#)」 in 『[Oracle Server X5-8 Product Notes](#)』を参照してください。

インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成するには、次の表の手順を、示されている順序で実行します。

手順	タスク	リンク
1	Oracle VM ソフトウェアの要件を確認します。	105 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件」
2	構成時に必要な情報を収集します。	106 ページの「Oracle VM 構成ワークシート」
3	インストール済みの Oracle VM ソフトウェアを構成します。	106 ページの「インストール済みの Oracle VM Server の構成」
4	Oracle VM の使用を開始します。	110 ページの「Oracle VM のドキュメント」

インストール済みの Oracle VM Server の互換性要件

システムにインストール済みの Oracle VM サーバーソフトウェアを使用する場合は、Oracle VM インフラストラクチャーの管理に使用する Oracle VM Manager のバージョンと互換性があることを確認する必要があります。互換性を確保する必要がある場合は、Oracle VM Manager をアップグレードしてバージョンを一致させてください。

Oracle VM ソフトウェアのアップグレードについては、『[Oracle VM インストールおよびアップグレードガイド](#)』を参照してください。Oracle VM のドキュメントは次で

入手できます: <http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

Oracle VM 構成ワークシート

Oracle VM サーバーを構成する前に、このセクションのワークシートを使用して必要な情報を収集してください。

構成用の情報	説明または例	回答
Oracle VM サーバーの root アカウントのパスワード	root パスワードを選択します。文字および長さに制限はありません。	
Oracle VM エージェントのパスワード	Oracle VM エージェントのパスワードを選択します。パスワードは 6 文字以上にする必要があります。	
ネットワークインタフェース	サーバーの管理に使用するインタフェース (eth#) を入力します。	
静的 IP アドレス	サーバーの IP アドレスを入力します。静的 IP アドレスは必須です。 例: 192.0.2.0	
ネットマスク	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。 例: 255.255.0.0	
ゲートウェイ	サーバーにゲートウェイ経由でアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを指定します。	
DNS サーバー	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを入力します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。	
ホスト名	サーバーの完全修飾ドメイン名を指定します。 例: xxx.oracle.com	

▼ インストール済みの Oracle VM Server の構成

この手順では、サーバー上のインストール済みの Oracle VM サーバーを構成する方法についてのみ説明します。Oracle VM にはまた、仮想マシン環境をサポートするた

めにインストールされているか、またはすでに稼働している必要のある、Oracle VM Manager などのその他のコンポーネントもあります。

始める前に Oracle ILOM に電源が投入され、ホストの電源が切断された状態でサーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認してください。

1. シリアル接続からローカルで、または **Ethernet** 接続を使用してリモートで **Oracle ILOM** にログインします。

51 ページの「[Oracle ILOM への接続](#)」を参照してください。

2. 次のようにホストの電源を投入します。

- **Oracle ILOM Web インタフェース**から、ナビゲーションパネルから「System Information」>「Summary」の順に選択します。次に、「Actions」パネルで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。
- **Oracle ILOM CLI** から、プロンプトから次のコマンドを入力します。

```
-> start /System
プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
Starting /System
```

ホストがブートします。

3. リモートコンソールを起動します。

- **Oracle ILOM Web インタフェース**から、ナビゲーションパネルで「Remote Control」>「Redirection」を選択します。次に、「Launch Remote Console」ボタンをクリックします。
- **Oracle ILOM CLI** の CLI プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
-> start /HOST/console
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

サーバーがブートし、「GRUB」メニューが表示されます。「GRUB」メニューで、表示の出力先を引き続きシリアルポートにするかどうか、または表示の出力先をビデオポートに接続されたデバイスにするかどうかを選択できます。例:

```
GNU GRUB version 0.97 (613K lower / 2087424K upper memory)

Oracle VM server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.21-410vs)
Oracle VM server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-410vs)
```

4. 上下の矢印キーを使用して表示オプションを選択し、**Enter** を押します。

「GRUB」メニューで一時停止するには、Enter 以外の任意のキーを押します。次に、使用するオプションを選択し、Enter キーを押して続行します。

注記 - 「GRUB」メニューでオプションを選択しないと、少ししてから「GRUB」メニューが使用できなくなり、システムは出力先をシリアルポートにしたまま続行します。

メニューに 2 つの選択肢、すなわち、通常ブートとシリアルコンソール対応のブートが表示されます。

5. 上下の矢印キーを使用して、強調表示するエントリを選択します。選択した OS をブートするには Enter を、ブート前にコマンドを編集するには「E」を、コマンド行を開始するには「C」を押します。

- デフォルトオプションを表示するには、リストの最初のオプションを選択します。

Oracle VM server-ovs (xen-4.0.0 2.6.32.32-41ovs)

- 出力をシリアルポートに表示するには、リストの 2 番目のオプションを選択します。

Oracle VM server-ovs serial console (xen-4.0.0 2.6.32.21-41ovs)

6. 構成プロセスが進み、次の画面が表示されます。画面をスクロールダウンして、root のパスワードと Oracle VM Agent のパスワードを設定および確認します。



```
Starting OVM console server: [ OK ]
Starting OVM ovmwatch services: [ OK ]
Starting ovs-agent: Starting ovs-agent services:
OK ]
Configuring Oracle VM...
Enter new root password:
Confirm password:
Enter new Oracle VM Agent password:
Confirm password:
Configuring network.
```

注記 - root および Oracle VM Agent のパスワードの入力を求めるプロンプトは、Oracle VM サーバーを最初にブートしたときだけ表示されます。

7. プロンプトに従ってオンボードのネットワークインタフェースコントローラ (NIC) を選択し、ネットワークに関するほかの必須構成情報を構成および入力します。

```
This tool is used to select the NIC used by the OVM Manager.
You can exit at any time by pressing CTRL-C.

Here's the list of current available network interfaces.
eth0  eth1  eth2  eth3

Please select interface(s) to be used for OVM management.
These interfaces will be configured for redundancy.
eth1
```

8. すべての構成内容が正しければ、「y」と入力し、Enter キーを押して設定を保存します。

```
Are these settings correct?(Y/n)
```

すべての設定が入力され、保存されると、次に示すように、システムが Oracle VM Server コンソールセッションをロードします。

```
Oracle VM Server 3.0.2 Console [Alt-F2 for login console]

Local hostname      : lynxp-ovm.us.oracle.com
Manager UUID        : 0004fb0000010000a060c639d1075957
Hostname            : None
Server IP           : None
Server Pool         : None
Clustered           : No
Server Pool Virtual IP : None
Cluster state       : Offline
Master Server       : No
Cluster type        : None
Cluster storage     : None

OVS Agent           : Running
VMs running         : 0
System memory       : 4087
Free memory         : 2439
Uptime              : 0 days, 4 hours, 33 minutes_
```

これにより、仮想オペレーティングシステムを作成するためのインストール済みの Oracle VM Server の構成が完了します。

Oracle VM のドキュメント

Oracle VM の使用の詳細な情報については、次にある Oracle VM ドキュメントを参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-096300.html>

インストール済みの Oracle Linux OS の構成

オプションのインストール済みの Oracle Linux OS イメージを購入した場合は、インストール済みソフトウェアを構成することによってインストールを完了します。インストール済みの OS イメージには、サーバーに必要なすべてのドライバが含まれています。

次の表で、インストール済みの Oracle Linux OS を構成するために必要なタスクについて説明します。

手順	タスク	リンク
1	使用しているサーバー環境の Oracle Linux 構成ワークシートに記入します。	111 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」
2	インストール済みの Oracle Linux OS を構成します。	112 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」
3	Oracle Linux OS を更新し登録します。	114 ページの「Oracle Linux OS を登録および更新する」

Oracle Linux 構成ワークシート

次の情報を収集し、構成作業を開始するための準備を整えます。自分の組織とネットワーク環境に当てはまる情報のみを収集する必要があります。

必要なインストール情報	説明	回答
Oracle Linux の root パスワード	root パスワードを選択して出荷時デフォルトのパスワードを置き換えます。文字および長さに制限はありません。	
ネットワークインタフェース	ネットワークに接続するサーバーのインタフェース (eth#) を選択します。(Linux が稼働を始めていれば、 <code>ifconfig -a</code> コマンドを使用することでサーバーのネットワークポートを識別できます。)	
ネットワーク構成 (DHCP を使用しない場合)	サーバーの IP アドレスを入力します。 例: 172.16.9.1	

必要なインストール情報	説明	回答
	サーバーがサブネットの一部である場合は、サブネットのネットマスクを入力します。	
	例: 255.255.0.0	
	サーバーにゲートウェイを介してアクセスする場合は、ゲートウェイの IP アドレスを入力します。	
	ドメイン名サーバー (DNS) の IP アドレスを入力します。(ちょうど) 1 つの DNS が必要です。	

関連項目

- [112 ページの「インストール済みの Oracle Linux OS の構成」](#)

▼ インストール済みの Oracle Linux OS の構成

この手順では、サーバー上のインストール済みの Oracle Linux を構成する方法について説明します。

始める前に ILOM に電源が投入され、ホストの電源が切断された状態でサーバーがスタンバイ電源モードになっていることを確認してください。

1. まだサーバーの **Oracle ILOM** にログインしていない場合は、直接シリアル接続からローカルで、または **Ethernet** 接続からリモートでログインします。

[51 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。

2. 次の方法のいずれかを使用して、ホストの電源を投入します。

- **Oracle ILOM Web インタフェースから:**

- ナビゲーションツリーから、「System Information」>「Summary」の順に選択します。
- 「Summary」画面の「Actions」セクションで、「Power State」の横にある「Turn On」ボタンをクリックします。

- **Oracle ILOM CLI から、プロンプトから次のコマンドを入力します。**

```
-> start /System
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /System (y/n)? y
```

```
Starting /System
```

サーバーがブートプロセスを開始します。

3. Oracle ILOM から、次の方法のいずれかを使用してホストコンソールを起動します。

- Oracle ILOM Web インタフェースから、「Remote Control」>「Launch Remote Console」をクリックします。
- Oracle ILOM CLI から、次のように入力します。

```
-> start /HOST/console
```

プロンプトが表示されたら、「y」と入力して確定します。

```
Are you sure you want to start /HOST/console (y/n)? y
Serial console started.
```

ホストがブートすると、「GRUB」メニューが表示されます (次の例を参照)。一時停止するには Enter 以外のキーを押します。そうしないと、5 秒後に強調表示された選択が使用されます。

```
GNU GRUB version 0.97 (612K lower / 2082932K upper memory)

+-----+
| Oracle Linux Server-uek (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64) |
| Oracle Linux Server (2.6.32-279.el6.x86_64)             |
+-----+

+-----+
| Use the ^ and v keys to select which entry is highlighted. |
| Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the       |
| commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments |
| before booting, or 'c' for a command-line.                 |
+-----+

The highlighted entry will be booted automatically in 5 seconds.
```

4. 「GRUB」メニューで、上下の矢印キーを使用してインストールオプションを選択してから、Enter を押します。

次のオプションがあります。

- Unbreakable Enterprise Kernel。例:

```
Oracle Linux Server-uek (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64)
```

- Red Hat 互換カーネル。例:

```
Oracle Linux Server (2.6.32-279.el6.x86_64)
```

注記 - Oracle では、すべてのエンタープライズアプリケーションで、Oracle Linux と Unbreakable Enterprise Kernel を使用することをお勧めします。

インストールオプションを選択すると、Linux が起動します。完了すると、Linux システムのログインが表示されます。例:

```
Oracle Linux Server release 6.3
Kernel 2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64 on an x86_64
```

systemname login:

初回ログインの場合は、**root** アカウントと出荷時デフォルトのパスワード (**root**) を使用します。

5. ログイン後に、標準の Linux ツールを使用してサーバーの構成を完了します。

次のタスクが含まれます。

- セキュリティーのため、**root** の出荷時デフォルトのパスワードを変更します。
- ネットワークのサーバーを構成します (DHCP を使用しない場合)。111 ページの「Oracle Linux 構成ワークシート」を参照してください。
- 必要に応じて、インターネットアクセス用のプロキシを構成します。
- サーバーを登録し更新します。114 ページの「Oracle Linux OS を登録および更新する」を参照してください。
- 目的のパッケージをインストールします。

6. 構成が完了したら、次の方法のいずれかを使用してコンソールセッションを終了します。

- Oracle ILOM Web インタフェースから、「Remote Console」ウィンドウを閉じたあと、Oracle ILOM からログアウトします。
- Oracle ILOM CLI から、Esc + (または Esc + Shift + 9 を押してシリアルリダイレクトセッションを終了したあと、Oracle ILOM からログアウトします。

参照 ■ 114 ページの「Oracle Linux OS を登録および更新する」

▼ Oracle Linux OS を登録および更新する

始める前に Unbreakable Linux Network (ULN) は、Oracle Linux サポートのサブスクリイバのための包括的なリソースであり、Linux ソフトウェアのパッチ、更新と修正、更新およびサポートポリシーに関する情報へのアクセスを提供します。

アクティブな Oracle Linux サポートのサブスクリプションを持つ Oracle のライセンス所有のお客様の場合は、Oracle Linux CSI (カスタマサポート ID) 番号を使用して ULN のサーバーを登録してください。

1. まだ ULN アカウントを持っていない場合は、作成します。電子メールアドレスと CSI を使用してパスワードを作成します。

<https://linux.oracle.com/register>

アカウントが構成されたら、電子メールアドレスとパスワードを使用して ULN にログインします。

2. アカウントを作成したら、端末ウィンドウまたはコマンド行で、**root** ユーザーとしてサーバーで下のコマンドを実行します。

uln_register

uln_register ウィザードによってマシン情報が収集され、Oracle にアップロードされます。

上のコマンドを実行すると、デフォルトのチャンネル *ol6_<arch>_latest* が選択されます。

_latest チャンネルは、ディストリビューションのすべてのパッケージの RPM を提供します (*_patch* チャンネルでも提供される訂正を含む)。*_latest* チャンネル上でダウンロードできる RPM はすべて入手可能な最新バージョンです。登録後に、Web インタフェースを使用してほかのチャンネルにサブスクライブできます。

- 参照 ■ 登録プロセスの詳細については、次を参照してください。
<http://www.oracle.com/technetwork/topics/linux/yum-repository-setup-085606.html>
- Oracle Unbreakable Linux Network の詳細については、次を参照してください。
<https://linux.oracle.com/>

サーバーファームウェアとソフトウェアの入手

このセクションでは、サーバーのファームウェアとソフトウェアにアクセスするためのオプションについて説明します。

説明	リンク
サーバーファームウェアとソフトウェアの更新について学びます。	117 ページの「ファームウェアとソフトウェアの更新」
ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプションについて学びます。	118 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション」
使用可能なファームウェアとソフトウェアパッケージを確認します。	118 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」
Oracle System Assistant、My Oracle Support、または物理メディアのリクエストにより、ファームウェアおよびソフトウェアパッケージにアクセスします。	119 ページの「ファームウェアとソフトウェアへのアクセス」
ファームウェアとソフトウェアの更新をインストールします。	123 ページの「更新のインストール」

ファームウェアとソフトウェアの更新

ファームウェアとソフトウェア (サーバーのハードウェアドライバやツールなど) は定期的に更新されます。これらは、ソフトウェアリリースとして入手可能になります。ソフトウェアリリースは、サーバーで使用可能なすべてのファームウェア、ハードウェアドライバ、およびユーティリティを含む一連のダウンロード (パッチ) です。これらはすべて、一緒にテストされています。ダウンロードに含まれている ReadMe ドキュメントは、前回のソフトウェアリリースから変更されている点と変更されていない点について説明しています。

サーバーのファームウェアとソフトウェアは、ソフトウェアリリースが入手可能になったらできるだけ早く更新してください。ソフトウェアリリースには多くの場合、バグ修正が含まれているため、更新することによって、サーバーソフトウェアと最新のサーバーファームウェアやその他のコンポーネントファームウェアおよびソフトウェアとの互換性が保証されます。

ダウンロードパッケージ内の ReadMe ファイルには、ダウンロードパッケージ内の更新されたファイルや、現在のリリースで修正されたバグに関する情報が含まれていま

す。また、プロダクトノートでは、サポートされるサーバーソフトウェアのバージョンに関する情報も提供されます。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセスオプション

サーバーのファームウェアとソフトウェアの最新のセットを取得するには、次のいずれかのオプションを使用します。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、出荷時にインストールされる Oracle サーバー用のオプションであり、サーバーのファームウェアとソフトウェアを簡単にダウンロードしてインストールできるようにします。

Oracle System Assistant の使用の詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

- **My Oracle Support** – すべてのシステムファームウェアおよびソフトウェアは、My Oracle Support Web サイトから入手できます。

My Oracle Support Web サイトで入手可能なものの詳細は、<https://support.oracle.com> を参照してください。

My Oracle Support からソフトウェアリリースをダウンロードする方法については、[120 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)を参照してください。

- **物理メディアのリクエスト (PMR)** – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。

詳細は、[121 ページの「物理メディアをリクエストする」](#)を参照してください。

入手可能なソフトウェアリリースパッケージ

My Oracle Support では、ダウンロードは製品ファミリ、製品、およびバージョン別にグループ分けされています。バージョンには 1 つ以上のダウンロード (パッチ) が含まれます。

サーバーとブレードの場合、パターンは似ています。製品はサーバーです。サーバーごとにリリースセットが含まれます。これらのリリースは、実際のソフトウェア製品リリースではなく、サーバーの更新リリースのことです。これらの更新はソフトウェアリリースと呼ばれ、まとめてテスト済みの複数のダウンロードで構成されます。各ダウンロードには、ファームウェア、ドライバ、またはユーティリティが含まれます。

次の表に示すように、My Oracle Support には、このサーバーファミリ向けの同じダウンロードタイプのセットが含まれます。これらも、物理メディアのリクエスト (PMR)

を行なって依頼できます。Oracle System Assistant を使用しても、同じファームウェアおよびソフトウェアをダウンロードできます。

パッケージ名	説明	このパッケージをダウンロードするタイミング
Oracle Server X5-8 SW version – Firmware Pack	Oracle ILOM、BIOS、およびオプションカードファームウェアを含む、すべてのシステムファームウェア。	最新のファームウェアが必要なとき。
Oracle Server X5-8 SW version – OS Pack	OS Pack は、サポートされているオペレーティングシステムバージョンごとに入手できます。各 OS Pack には、そのバージョンの OS のすべてのツール、ドライバ、およびユーティリティのパッケージが含まれています。 ソフトウェアには、Oracle Hardware Management Pack および LSI MegaRAID ソフトウェアが含まれます。 Windows OS の場合、この OS Pack には Intel Network Teaming and Install Pack も含まれます。	OS 固有のドライバ、ツール、またはユーティリティを更新する必要があるとき。
Oracle Server X5-8 SW version – All Packs	Firmware Pack、すべての OS Pack、およびすべてのドキュメントが含まれています。 このパックには、Oracle VTS または Oracle System Assistant イメージは含まれていません。	システムファームウェアと OS 固有のソフトウェアの組み合わせを更新する必要があるとき。
Oracle Server X5-8 SW version – Diagnostics	Oracle VTS 診断イメージ。	Oracle VTS 診断イメージが必要なとき。
Oracle Server X5-8 SW version – Oracle System Assistant	Oracle System Assistant 回復および ISO 更新イメージ。	Oracle System Assistant を手動で回復または更新する必要があるとき。

各ダウンロードは、ReadMe ファイルと、ファームウェアまたはソフトウェアファイルが含まれた一連のサブディレクトリを含む zip ファイルです。ReadMe ファイルには、前回のソフトウェアリリース以降に変更されたコンポーネントや、修正されたバグに関する詳細が含まれています。

ファームウェアとソフトウェアへのアクセス

このセクションでは、ソフトウェアリリースファイルをダウンロードまたはリクエストする手順について説明します。

Oracle System Assistant を使用すると、最新のソフトウェアリリースを簡単にダウンロードして使用できます。詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

更新されたファームウェアとソフトウェアを入手するためのその他の方法として、My Oracle Support の使用と物理メディアのリクエストの 2 つがあります。次を参照してください。

- 120 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」
- 121 ページの「物理メディアをリクエストする」

▼ My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード

1. 次の Web サイトへ移動します: <https://support.oracle.com>
2. My Oracle Support にサインインします。
3. ページ上部にある「パッチと更新版」タブをクリックします。
「パッチと更新版」画面が表示されます。
4. 「検索」画面で、「製品またはファミリ (拡張)」をクリックします。
検索フィールドを含む画面が表示されます。
5. 「製品」フィールドで、ドロップダウンリストから製品を選択します。
または、製品名 (たとえば、Oracle Server X5-8) の全体または一部を、一致するものが表示されるまで入力します。
6. 「リリース」フィールドで、ドロップダウンリストからソフトウェアリリースを選択します。
7. 「検索」をクリックします。
ダウンロードできるパッチが一覧表示されます。
入手可能なダウンロードの説明については、118 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」を参照してください。
8. ダウンロードするパッチを選択するには、そのパッチをクリックします (Shift キーを使用すると、複数のパッチを選択できます)。
ポップアップアクションパネルが表示されます。ポップアップパネルには、「計画に追加」および「ダウンロード」オプションを含め、いくつかのアクションオプション

があります。「計画に追加」オプションの詳細は、関連するドロップダウンボタンをクリックして、「なぜ計画を使用するのですか。」を選択してください。

9. パッチをダウンロードするには、ポップアップアクションパネルの「ダウンロード」をクリックします。

「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスが表示されます。

10. 「ファイル・ダウンロード」ダイアログボックスで、パッチの zip ファイルをクリックします。

パッチファイルがダウンロードされます。

物理メディアをリクエストする

Oracle Web サイトからダウンロードできない場合は、物理メディアのリクエスト (PMR) で最新のソフトウェアリリースを入手できます。

物理メディアのリクエストを行うための大まかなタスクに従ってください。

- [121 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」](#)
- [122 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)
- [123 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

物理メディアのリクエストのための情報の収集

物理メディアのリクエスト (PMR) を実行するには、サーバーの保証またはサポート契約が必要です。

PMR を実行する前に、次の情報を収集します。

- **製品名、ソフトウェアリリースバージョン、および必要なパッチを取得します。**最新のソフトウェアリリースや、リクエストするダウンロードパッケージ (パッチ) の名前を知っていると、リクエストの実行が容易になります。
 - My Oracle Support にアクセスできる場合: [120 ページの「My Oracle Support を使用したファームウェアとソフトウェアのダウンロード」](#)の手順に従って、最新のソフトウェアリリースを確認したり、入手可能なダウンロード (パッチ) を表示したりします。パッチのリストを表示したあと、ダウンロード手順を続行しない場合は、「パッチ検索結果」ページからほかのページに移動できます。
 - My Oracle Support にアクセスできない場合: [118 ページの「入手可能なソフトウェアリリースパッケージ」](#)にある情報を使用して、必要なパッケージを確認したあと、それらのパッケージの最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

- **送付先情報を用意します。** リクエストの一部として、連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所を指定する必要があります。

関連項目

- [122 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)
- [123 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

▼ 物理メディアのリクエスト (オンライン)

1. 次の Web サイトへ移動します: <https://support.oracle.com>。
2. **My Oracle Support** にサインインします。
3. ページの右上隅にある「問合せ」リンクをクリックします。
4. 「リクエストの説明」セクションで、次を入力します。
 - a. 「リクエスト・カテゴリ」ドロップダウンメニューで、次を選択します。
ソフトウェアおよび OS メディアリクエスト
 - b. 「リクエスト・サマリー」フィールドに、「**Oracle Server X5-8 の最新ソフトウェアリリースの PMR**」と入力します。
5. 「リクエスト詳細」セクションで、次の表に示されている質問に回答します。

質問	回答
物理ソフトウェアメディアの送付リクエストですか？	はい
どの製品ラインに關係するメディアのリクエストですか？	Sun 製品
パッチのダウンロードに必要なパスワードの確認ですか？	いいえ
CD/DVD でのパッチのリクエストですか？	はい
CD/DVD でのパッチをリクエストする場合は、パッチ番号と OS/プラットフォームを入力してください。	このソフトウェアリリースの希望するダウンロードごとのパッチ番号を入力してください。
物理メディア送付をリクエストしている製品の名前とバージョンをリストしてください。	製品名: Oracle Server 5-8 バージョン: 最新のソフトウェアリリース番号
リクエストするメディアの OS/プラットフォームは何ですか？	OS 固有のダウンロードをリクエストする場合は、ここで OS を指定します。システムファームウェア

質問	回答
	のみをリクエストする場合は、「汎用」と入力します。
メディアに言語は必要ですか。	いいえ

6. 出荷先担当者の連絡先、電話番号、電子メールアドレス、会社名、および出荷先住所の情報を入力します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「ファイルのアップロード」の「関連ファイル」画面で「次へ」をクリックします。情報を指定する必要はありません。
9. 「関連ナレッジ」画面で、リクエストに該当するナレッジ記事を確認します。
10. 「送信」をクリックします。

- 参照
- [121 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」](#)
 - [123 ページの「物理メディアのリクエスト \(電話\)」](#)

▼ 物理メディアのリクエスト (電話)

1. 次の **Oracle Global Customer Support Contacts Directory** にある該当する番号を使用して、**Oracle** サポートに電話をかけます。
<http://www.oracle.com/us/support/contact-068555.html>
2. **Oracle Server 5-8** の物理メディアのリクエスト (PMR) を行いたい旨を **Oracle** サポートに伝えます。
 - My Oracle Support から特定のソフトウェアリリースおよびパッチ番号の情報にアクセスできる場合は、この情報をサポート担当者に伝えます。
 - ソフトウェアのリリース情報にアクセスできない場合は、**Oracle Server X5-8** の最新のソフトウェアリリースをリクエストします。

- 参照
- [121 ページの「物理メディアのリクエストのための情報の収集」](#)
 - [122 ページの「物理メディアのリクエスト \(オンライン\)」](#)

更新のインストール

次のセクションでは、ファームウェアとソフトウェアの更新のインストールに関する情報を提供します。

- [124 ページの「ファームウェアのインストール」](#)
- [124 ページの「ハードウェアドライバと OS ツールのインストール」](#)

ファームウェアのインストール

更新されたファームウェアは、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center** – Ops Center Enterprise Controller は、最新のファームウェアを Oracle から自動的にダウンロードするか、または Enterprise Controller 内にファームウェアを手動でロードできます。どちらの場合も、Ops Center は 1 つ以上のサーバー、ブレード、またはブレードシャーシにファームウェアをインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant** – Oracle System Assistant は、Oracle から最新のファームウェアをダウンロードしてインストールできます。

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs> にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

- **Oracle Hardware Management Pack** – Oracle Hardware Management Pack 内の fwupdate CLI ツールを使用すると、システム内のファームウェアを更新できます。

詳細は、Oracle Hardware Management Pack ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/goto/ohmp/docs>) を参照してください。

- **Oracle ILOM** – Oracle ILOM および BIOS ファームウェアは、Oracle ILOM Web インタフェースまたはコマンド行インタフェースを使用して更新できる唯一のファームウェアです。

詳細は、Oracle Lights Out Manager (ILOM) ドキュメントライブラリ (<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>) のサポートされているバージョンのドキュメントを参照してください。

ハードウェアドライバと OS ツールのインストール

更新されたハードウェアドライバやオペレーティングシステム (OS) 関連のツール (Oracle Hardware Management Pack など) は、次のいずれかを使用してインストールできます。

- **Oracle Enterprise Manager Ops Center**

詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html> を参照してください。

- **Oracle System Assistant**

詳細は、<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>にある『Oracle x86 X5 シリーズサーバー管理ガイド』を参照してください。

- JumpStart、KickStart、サードパーティーのツールなどの、**その他の配備メカニズム**。

詳細は、使用しているオペレーティングシステムのドキュメントを参照してください。

システム電源の制御

この章では、サーバーの電源を投入および切断する方法について説明します。次が含まれます。

- [127 ページの「サーバーの電源投入と電源切断」](#)
- [128 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を切断する」](#)
- [128 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を投入する」](#)
- [129 ページの「Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する」](#)

サーバーの電源投入と電源切断

サーバーの電源状態には電源切断、スタンバイ電源、フル電源の 3 つがあります。

電源状態	説明	インジケータ	アクション
電源切断	サーバーは、AC 電源コードが引き抜かれると完全に電源が切断されます。	すべてのインジケータが消灯します。 サーバーはすべての電源から切り離されています。	電源を完全に切断するには、電源コードを引き抜きます。 注意 - 装置の損傷。システムがフル電源モードのときに電源コードを引き抜かないでください。
スタンバイ電源	サーバーがスタンバイ電源モードのとき、サービスプロセッサの電源は投入されますが、ホストの電源は切断されます。	システム OK インジケータは点滅します。 サービスプロセッサの OK インジケータは常時点灯します。	サーバーの電源が完全に切断されている場合は、電源コードを差し込むとスタンバイ電源が投入されます。 サーバーがフル電源モードの場合は、Oracle ILOM または埋め込み式の電源ボタンを使用してホストの電源を切断します。 ホストの電源を正常に切断することも、すぐに切断することもできます。 注意 - データ損失: データ損失を回避するために、即時の電源切断を実行する前に、オペレーティングシステムをシャットダウン用に準備してください。
フル電源	ホストの電源を投入すると、サーバーは	フル電源モードでは、システム OK	Oracle ILOM または埋め込み式の電源ボタンを使用してホストの電源を投入します。

電源状態	説明	インジケータ	アクション
	フル電源モードに入ります。	インジケータが常時点灯します。	

関連項目:

- [128 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を切断する」](#)
- [128 ページの「電源ボタンを使用してホストの電源を投入する」](#)
- [129 ページの「Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する」](#)

▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を切断する

1. サーバーのフロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンの位置を確認します。

2. 埋め込み式の電源ボタンを押します。

- 正常なシャットダウンを実行するには、電源ボタンを押して離します。

ACPI 対応のオペレーティングシステムでは、正常なシャットダウンが実行されます。ACPI 対応のオペレーティングシステムを実行していないシステムでは、このイベントが無視され、ホストのシャットダウンが失敗する可能性があります。

システム OK インジケータは点滅します。サービスプロセッサのインジケータは常時点灯します。

- 即時シャットダウンを実行するには、電源ボタンを 5 秒以上押し続けます。

システム OK インジケータは点滅します。サービスプロセッサのインジケータは常時点灯します。



注意 - データ損失。即時停止すると、すべてのアプリケーションとファイルは、変更が保存されずに突然終了されます。

- サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

▼ 電源ボタンを使用してホストの電源を投入する

1. サーバーがスタンバイ電源モードであることを確認します。

ホストの電源は切断されていますが、SP の電源は投入されています。電源装置が電源に接続され、OK ステータスインジケータは点滅しています。

2. フロントパネルにある埋め込み式の電源ボタンの位置を確認します。
3. 埋め込み式の電源ボタンを押します。
ホストがブートし、サーバーがフル電源モードに入ります。ホストが完全にブートされると、システム OK インジケータが常時点灯します。

▼ Oracle ILOM を使用してホストの電源を投入および切断する

ここでは、サーバーのサービスプロセッサ (SP) での Web およびコマンド行インタフェース (CLI) の手順について説明します。

Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) を使えば、ホストの電源の投入や切断をリモートから行えます。



注意 - データ損失。即時停止すると、すべてのアプリケーションとファイルは、変更が保存されずに突然終了されます。

- **Oracle ILOM Web インタフェースまたは Oracle ILOM CLI を使用して電源を制御します。**
管理者権限でログインする必要があります。詳細は、[51 ページの「Oracle ILOM への接続」](#)を参照してください。

- **Oracle ILOM Web インタフェースで次のいずれかを実行します。**

注記 - これらのコマンドはホストの電源に適用され、SP の電源には影響しません。サーバーの電源を完全に切断するには、サーバーのバックパネルから電源コードを引き抜く必要があります。

- a. 「Host Management」 > 「Power Control」をクリックします。
- b. 「Settings」ドロップダウンメニューから、次のいずれかを選択します。
 - **Reset:** 電源を切断せずにオペレーティングシステムをリセットします。
 - **Immediate Power-Off:** ホストの電源をただちに切断します。
 - **Graceful Shutdown and Power Off:** オペレーティングシステムを正常にシャットダウンし、システムの電源を切断します。

- Power On: 電源を全投入します。
 - Power Cycle: ホストの電源をただちに切断したあと、電源を再投入します。
 - **Oracle ILOM CLI から、次のいずれかのコマンドを入力します。**
 - `reset /SYSTEM`: 電源を切断せずにホストをリセットします。
 - `stop /SYSTEM`: ホストを正常にシャットダウンし、電源を切断します。
 - `stop -f /SYSTEM`: ホストの電源をただちに切断します。
 - `start /SYSTEM`: 電源を全投入します
- 参照 ■ 『Oracle ILOM 構成および保守ガイド』、「ホスト電源の制御」。

設置の問題のトラブルシューティング

このセクションでは、設置の問題のトラブルシューティングに関する情報を提供します。

説明	リンク
トラブルシューティングについて学習し、診断の参考情報を入手します。	131 ページの「トラブルシューティングおよび診断の参考」
サーバーの情報を記録してから保守部門に連絡します。	131 ページの「技術サポート情報ワークシート」
システムのシリアル番号の場所を確認してから保守部門に連絡します。	132 ページの「サーバーのシリアル番号の確認」

トラブルシューティングおよび診断の参考

『[Oracle Server X5-8 Service Manual](#)』は、製品固有のトラブルシューティング情報を提供します。

『[Oracle x86 サーバー診断ガイド](#)』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) は、Oracle の x86 サーバーで使用可能なさまざまなツールに関する情報を提供します。

ナレッジ記事、ホワイトペーパー、および製品アップデートは、Oracle サポートポータル (<https://support.oracle.com>) から入手できます。

技術サポート情報ワークシート

トラブルシューティング情報を使用しても問題を解決できない場合は、サポートに電話をする前に次の情報を収集します。

必要なシステム構成情報	お客様の情報
サービス契約番号	

必要なシステム構成情報	お客様の情報
システムモデル	
オペレーティングシステム	
システムのシリアル番号	
システムに接続されている周辺装置	
お客様の電子メールアドレスと電話番号、および代理の連絡先	
システムの設置場所の住所	
スーパーユーザーのパスワード	
問題のサマリーと、問題が発生したときに実行した操作内容	
IP アドレス	
サーバー名 (システムのホスト名)	
ネットワークまたはインターネットのドメイン名	
プロキシサーバー構成	

サーバーのシリアル番号の確認

次の方法のいずれかを使用して、サーバーのシリアル番号を確認します。この番号は、あとで使用するときのために記録しておいてください。

- フロントパネルのベゼルの中央左を確認します。
- サーバーの Oracle Server X5-8 パッケージに付属している黄色い Customer Information Sheet (CIS) を確認します。このシートにシリアル番号が記載されています。
- Oracle ILOM からは次のようにします。
 - Web インタフェースを使用してログインし、「Summary」ページを表示します。
 - Oracle System Assistant の「Summary」/「System Information」画面を確認します。
 - CLI を使用してログインし、次のコマンドを入力します。
show /System

サイト計画のチェックリスト

サイトでのサーバーの準備が整っていることを確認するには、このセクション内のチェックリストに記入してください。

- [133 ページの「搬入経路およびデータセンターのチェックリスト」](#)
- [134 ページの「データセンター環境のチェックリスト」](#)
- [135 ページの「施設の電源のチェックリスト」](#)
- [136 ページの「ラックマウントのチェックリスト」](#)
- [137 ページの「安全性のチェックリスト」](#)
- [138 ページの「自動サービス・リクエストのチェックリスト」](#)
- [138 ページの「納入のチェックリスト」](#)

搬入経路およびデータセンターのチェックリスト

サーバーを設置する前に、次の施設チェックリストを確認してください。

データセンタールームのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
搬入経路に、梱包された装置を運搬するための空間があることを確認しましたか。				
すべてのドアと搬入経路が搬入のための幅と高さの要件を満たしていますか。開梱されたユニットの幅についてはどうですか。				
新しいハードウェアの移動パス上に傾斜、階段、または段差がありますか。				
搬入経路に衝撃の原因となる障害物がないことを確認しましたか。				
装置を上階に搬入する場合、搬入用エレベータは使用できますか。				
ラックの場所が割り当てられていますか。				
ラック内に新しいサーバーのための空きスペースがありますか。				

データセンタールームのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
フロアレイアウトは装置の保守アクセス要件を満たしていますか。				
サーバー保守のための十分なスペースがありますか。				
キャビネット安定化対策は考慮されていますか。				
ハードウェアの設置場所で規格外の長さのケーブルは必要ですか。				
床から天井までの高さが 2914 mm (約 9.6 フィート) 以上ありますか。				
上げ床の深さが 460 mm (18 インチ) 以上ありますか。				

関連項目

- [23 ページの「サーバーの仕様」](#)

データセンター環境のチェックリスト

サーバーがデータセンター環境の要件を満たしていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

データセンター環境のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
コンピュータールームの空調は温度および湿度の要件を満たしていますか。				
設置フロアレイアウトは通気要件を満たしていますか？				
あるラックからの排気が別のラックの吸気口から入らないように装置が配置されていますか。				
有孔床タイルごとに 400 CFM 以上の通気が確保されていますか。				
データセンターの空調設備によって前面から背面への十分な通気が確保されますか。				
局所的に高温にならないように十分な通気が確保されていますか。				
データセンターは環境の要件を継続して満たすことができますか。				

データセンター環境のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
通気フロアタイルが追加で必要な場合に入手できますか。				

関連項目

- [25 ページの「通気のガイドライン」](#)

施設の電源のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する施設電源要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

施設の電源のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
このサーバーの必要な動作時の電圧および電流レベルを把握していますか。				
ラックごとに 2 メートル (6.5 フィート) 以内に十分な数の電源コンセントが用意されていますか。				
電源コンセントに適切な差し込み口が付いていますか。				
ラックにオプションのアースケーブルを接続しますか。				
装置の回路遮断器は、電圧および通電能力の点で適していますか。				
電力周波数は装置の仕様を満たしていますか。				
システム電源は 2 つの異なる電源グリッドから供給されますか。				
装置に電力を供給する無停電電源装置がありますか。				
新しいハードウェアの電力負荷に対応するための最低限必要な電源がありますか。電力負荷は、キロワット (kW)/キロボルト (kVA) で表します。				

関連項目

- [23 ページの「サーバーの仕様」](#)

ラックマウントのチェックリスト

サーバーをラックまたはキャビネット内に設置する前に、次のチェックリストに記入してください。

ラックマウントのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
前方取り付け面と後方取り付け面の距離が、最小値 610 mm と最大値 915 mm の間 (24 インチから 36 インチの間) になっていますか。				
前方取り付け面の前の空間の奥行き (前面キャビネットドアまでの距離) が 25.4 mm (1 インチ) 以上ありますか。				
対象のラックが次の最小荷重を満たしていますか。 ■ 19 kg/ラックユニット ■ 合計 785 kg				
ラックは 4 ポストラック (前方と後方の両方でマウント) ですか。 2 ポストのラックとは互換性がありません。				
ラックの水平方向の開口部と装置の垂直距離が、ANSI/EIA 310-D-1992 または IEC 60927 の標準に準拠していますか。				
ラックが RETMA レールをサポートしていますか。				
ラックが Oracle ケーブル管理アーム (CMA) をサポートしていますか。				
ラックが Oracle の通気孔付きソリッドフィラーパネルの設置に対応していますか。				
必要に応じて、ラック内にケーブルハーネスと配電盤 (PDU) のための十分なスペースがありますか。				
サーバーのシリアル番号が記載されたラベルを印刷し、対象のラックに貼ることができますか。				
ネットワーク装置からサーバーの設置場所までの必要なネットワークケーブルを配線しましたか。				
サーバーに接続するネットワークケーブルにラベルを付けましたか。				
ラックが、Oracle の標準 PDU の設置に対応していますか。 対応していない場合は、このチェックリストを終了してください。				

ラックマウントのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
顧客は同等の PDU を用意できますか。				
顧客は、1 つの PDU が故障した場合に電源要件をサポートする単一の PDU とその回路を用意できますか。				
顧客は、単一 PDU のすべての回路に電力負荷が均等に割り振られることを保証できますか。				
顧客は、PDU のための適切な電力ドロップを提供できますか。				

関連項目

- [23 ページの「サーバーの仕様」](#)

安全性のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する安全性要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

安全性のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
緊急時の電源オフ機能はありますか。				
データセンタールームに防火システムがありますか。				
コンピュータールームに適切な消火装置がありますか。				
静電気防止フロアが設置されていますか。				
上げ床の下に床に障害物や妨害物はありませんか。				

関連項目

- [23 ページの「サーバーの仕様」](#)

自動サービス・リクエストのチェックリスト

サーバーで自動サービス・リクエストを使用する予定がある場合は、次のチェックリストに記入してください。

自動サービス・リクエストのチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
自動サービス・リクエストに登録するための My Oracle Support オンライン・アカウントを持っていますか。				
My Oracle Support のカスタマサポート ID (CSI) 番号を持っていますか。				
Auto Service Request Manager を含むサーバーのホスト名と IP アドレスがわかりますか。				
システムにプロキシサーバーは必要ですか。必要な場合は、プロキシサーバーのホスト名と IP アドレスを記入してください。				
自動サービス・リクエストの技術担当者の情報を持っていますか。この情報には、その担当者の名、姓、および電子メールアドレスが含まれます。				

納入のチェックリスト

サーバーの設置先となるデータセンターに対する納入要件が満たされていることを確認するには、次のチェックリストに記入してください。

納入のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
データセンター担当者の連絡先情報はありますか。				
データセンターのためのセキュリティまたはアクセス制御はありますか。				
ベンダーの担当者がデータセンターに入室する際に身元確認や入室許可は必要ですか。必要な場合、どのような機関による証明を受ければよいですか。				
身元確認は何日前までに済ませる必要がありますか。				
セキュリティや入室に関して、ほかに注意することはありますか。				
設置担当者のコンピュータールームへの入室は許可されていますか。				

納入のチェック項目	はい	いいえ	該当なし	コメント
データセンターではノートパソコン、携帯電話、カメラの使用が許可されていますか。				
建物には搬入口がありますか。				
配達、開梱、準備のための場所がありますか。				
配達場所は建物内部ですか。				
納入場所が建物内部でない場合、設置場所で梱包を解くことができますか。				
開梱、準備のための場所は雨風から保護されていますか。				
建物に十分な搬入場所がありますか。				
各種のハードウェアコンポーネントが熱衝撃を受けないように開梱場所の室温が管理されていますか。				
ハードウェアの設置に十分な運搬要員が確保できますか。				
梱包を解く作業とごみの片付けについては手配済みですか。				
納入やごみ撤去に関する制限がありますか。				
配達用トラックの長さ、幅、高さに制限がありますか。				
コンピュータールームへの段ボールなどの梱包材の持ち込みは可能ですか。				
搬入口へのアクセス時間に制約はありますか。ある場合、時間的制約を指定してください。				
装置を搬入口に降ろす際に、運搬車両にテールリフトは必要ですか。				
コンピュータールームに装置を配置するために、次のものは必要ですか。 階段運搬車 リフター 傾斜台 鋼板 床材				
フロア保護キャスター、台車、パレットジャッキ、フォークリフトなど、配達業者が用意する必要がある特殊な機材はありますか。				

関連項目

- [23 ページの「サーバーの仕様」](#)
- [31 ページの「サーバーの開梱と内容のインベントリの作成」](#)

索引

あ

- インジケータ
 - バックパネル, 17
 - フロントパネル, 13
- インストール済みのオペレーティングシステム
 - Oracle Solaris、構成, 99
 - Oracle VM、構成, 105
- インストール済み OS オプション
 - Oracle Llinux, 111
- インベントリ
 - パッケージの内容, 26
- オプション
 - サーバーコンポーネント, 26
- オペレーティングシステム
 - Oracle Linux
 - インストール済みソフトウェアの構成, 111
 - Oracle Solaris OS
 - 再インストール, 103
 - ダウンロード, 103
 - Oracle Solaris OS、インストール済みソフトウェアの構成, 99
 - Oracle VM
 - インストール済みソフトウェアの構成, 105
 - インストール済みイメージの構成, 111

か

- 外部ケーブル、接続, 44
- 環境要件, 24
- ケーブル
 - 接続, 44
- 工具および装置
 - サーバーの取り付けに必要, 26
- 構成
 - Oracle Linux, 111

コネクタ

- 位置, 44

コンソール

- シリアル, 53
- 必要なデバイス, 26

さ

サーバー

- 電源のリセット, 84
- サーバーの開梱, 26
- サイト計画のチェックリスト
 - 安全性, 137
 - 施設の電源, 135
 - 自動サービス・リクエスト, 138
 - データセンター環境, 134
 - 納入, 138
 - 搬入経路とデータセンタールーム, 133
 - ラックマウント, 136
- システムステータスインジケータ
 - フロントパネル, 13, 13

静電放電 (ESD)

- 安全対策, 27

出荷梱包箱

- 内容, 26

仕様

- 環境, 24
- 電気, 24
- 物理, 23, 135, 136

シリアル接続

- Oracle ILOM へのログイン, 53
- シリアルヌルモデムケーブル
 - 接続, 44
- スタンバイ電源モード, 127
- 正常な電源切断, 128, 129

- 静電気防止用リストストラップ, 27
- 設置タスクの概要, 11
- 即時電源切断, 128
- 即時の電源切断, 129
- ソフトウェアリリースパッケージ
 - My Oracle Support を使用してダウンロードする, 120

た

- 注意事項, 27
- 電気仕様, 24
- 電源
 - 状態, 127
 - スタンバイ, 127
 - フル, 127
 - ボタン, 128
- 電源ケーブル、接続, 44
- 電源障害インジケータ
 - 位置, 17
- 電子部品
 - 静電気損傷からの保護, 27
- 電力消費数
 - 意味, 24
- ドキュメント
 - 診断, 131

は

- ハードドライブ、Oracle System Assistant を使用した準備, 77
- バックパネル
 - 機能, 17
 - コネクタ, 17, 43
- ファンモジュール
 - 保守要求 LED, 16
- 物理仕様, 23, 135, 136
- フル電源モード, 127
- フロントパネル
 - 機能, 13, 13
- ポート
 - SER MGT/RJ-45, 44
 - SP NET MGT Ethernet, 44
- ボリューム、Oracle System Assistant を使用した作成, 77

ら

- ラックの安全上の注意事項, 29
- ラックの互換性、確認, 30
- ラックマウント
 - キット, 29
 - レール構成部品, 29
- レール構成部品, 29

A

- AC OK インジケータ, 13, 17
- AC 電源
 - スタンバイ, 127
 - フル, 127

E

- Ethernet ケーブル、接続, 44
- Ethernet 接続
 - Oracle ILOM へのログイン, 54

G

- Gigabit Ethernet (LAN) コネクタ, 44

H

- Hardware Management Pack
 - 概要, 49

M

- My Oracle Support, ソフトウェアリリースパッケージのダウンロードに使用する, 120

O

- Oracle ILOM
 - Oracle System Assistant の起動, 68
 - 初期設定と構成, 51
 - 接続, 51
 - デフォルトのユーザー名とパスワード, 53, 54

Oracle Linux

- 構成, 111, 112

- 構成ワークシート, 111

- 登録, 114

Oracle Solaris OS, 99

- インストール済みソフトウェアの構成, 99, 102

Oracle System Assistant

- Oracle ILOM を使用した起動, 68

- ローカルでの起動, 70

- Oracle System Assistant を使用したハードドライブの準備, 77

S**SER MGT/RJ-45 ポート**

- 位置, 43

SP NET MGT Ethernet ポート, 44**U****Unified Extensible Firmware Interface (UEFI)**

- 概要, 50

- ブートモード

- 説明, 50

V**VMware ESXi**

- サーバーの電源のリセット, 84

